603-230
1200501531052
60.3
230

6. 8. 19

世紀の夜

尾崎士郎著

603-230

世紀の夜

目次

第一章　新しき斷橋……一
第二章　順風記……三二
第三章　夜霧の街……六五
第四章　花園橋（ガーデンブリッヂ）の灯……九七
第五章　風雲來……一一七
第六章　女優燦珠……一五一
第七章　一九三〇年……一八七

第八章　南里玄作……二三九
第九章　光と翳と……二七一
第十章　矢車草……二九七
第十一章　蘇州の夢……三三九
第十二章　生活の嵐……三六七
第十三章　悲曲……三八一
第十四章　白燈……四〇九

——（終）——

第一章　新しき斷橋

[illegible]

十二時に近い銀座の夜。

1

宵の口の雜踏を豪雨に洗ひつくされた鋪道の上に軒燈のあかりが列をつくつて流れ、雨にうたれた街路樹の朽ち葉が高い建物の影を涵した水だまりの上にうかんでゐる。——沈鬱な晩秋の夜氣の中で疲れて眠つてゐる都會の假面——そのしめやかな假面をゆるがして、一臺の自動車が、新橋の方角に向つて走り過ぎた。

自動車の中には深いクッションに肩を埋めた二人の男女が擦れ合ふやうに顔をならべてゐる。黑い外套の間から手が膝の上に伸びて男のレーンコートの端しを弄んでゐたが、不意にうつむいてゐた顔をあげると淸々しい嬌羞が女の瞳の中に閃いた。

「——二タ月なのね、二タ月だけよ、二タ月が一日でも伸びたら、わたし、もう何をしてゐるかわからないことよ、」

「だつて、若途中で船が衝突したら歸れないぢやないか！」

「おや、もうそんな口實を考へてゐるの、——でもいゝわ、わたし、こんなゥれしい晩は無いのよ、何だかわたしたちの結婚式のやうな氣がするぢやないの、憎らしいわたしのドン・ホセ！」

ほのかな微笑が男の唇にうかんだが、しかし、彼は直ぐに自分の幸福をおそれるものゝやうに慌てゝ視線を窓の外にうつした。そのとき、一二町先きに見える尾張町交叉點の街角にあるカフエーの大通に向いた重い扉がひらかれて痩せた一人の男がよろけるやうに出てきた。ぺしやんこに歪んだ黒いソフト帽をあみだにかむり、兩手は外套のポケットの中に突込んでゐるけれども、しかし、出て來たといふよりも、むしろ押出されたといつた方がいゝ。——一瞬間その男の半身がくつきりとうかびあがつた。

「おや——南里だ！」

自動車の中の男が低い聲で、しかし妙に調子外れな嘆聲をあげたとき、ソフト帽の男は危くうしろに身を引いてゐた。自動車は唸りを立てゝその前を走り過ぎた。

「酔つぱらつてゐるのね、わたしあんな人大嫌ひよ、でもあなたのお友達なのね」

女はわざとらしくこぢれたやうな表情をしたが、男はそれには答へないで、

「——でもね、僕はこんな幸福の記憶を殘もたまゝで日本を去ることが急に悲しくなつてきたんです、自分の命をかけてゐた幸福がこんなにも易々と得られたといふことが——」

彼は、急に改まつた調子になつて、數時間前の慌しい陶酔を追想するものゝやうに眼を瞑ぢた。

「おや隨分センチメンタルなお坊つちやんね、それぢやあカルメンの情人にはなれないことよ

わたし今夜は芝居の方の宴會へゆく筈になつてゐたのよ。それをね、病氣だといつてすつぽかしてやつたのさ、だのに、ドン・ホセがこんなに弱氣ぢや……」

女は女優らしい巧な身のこなし方で男の膝に凭れかゝるやうにして左手をぎゆつと握りしめた。自動車は何時の間にか芝口を右に曲り溜池の方角に向つて走つてゐる。冴えぐゝと街の灯のうつる雨夜の空が窓越しに男の視野を埋めてゐた。夢見るやうな放心の中で男の指の先から傳はつてくる女の情熱を感ずると衝動的に手をふりほどいて女の肩を抱きすくめた。自動車の速力が鈍つて、砂利の上を軋りながら暗い坂をのぼりはじめた。

2

丸い女の肩が巧に男の腕を潜りぬけた。自動車が停つたのだ。暗い坂の中腹で、右側に白い石垣が城壁のやうに續いてゐる。——女は先に立つて馴れた手つきでスカートの裾を抑えながら、身を躱すやうに外へ出ると運轉臺に近づいて、もう前から餘程の知り合ひらしい眼鏡をかけた運轉手に輕く囁いてから石垣の横にある半朽ちかゝつた黑い冠木門の横の潜り戸をあけた。潜り戸の上には女文字で「月岡寓」と書いた小さい標札が掛つてゐる。

「一寸一時間ほどね、——これからデザート・コースに入るのよ」

茫然としてうしろに立つてゐる男の顏に女の微笑が碎けた。

女は深い植込の中の小徑を身體をすくめながら歩いていつたが、ふと五六歩行つてから物に怯えたやうに立ち停つた。不意に突きあたりにある離家の左側の窓からカーテン越しの青い灯が樹立の闇の中にくつきりと浮あがつたのだ。

「おや——誰かゐるのかしら？」

火照つた頰に雨に濡れた木の葉の感觸を快よくうけながら、うつとりとして立つてゐる男の耳に女の聲が顫へるやうにひゞいてきた。

女は口のあたりを掩ふやうにして聲を落としながら——

「一寸此處で待つていらつしやいね」

輕く命令するやうに言ひ捨てゝ足早に歩いていつた。やがて扉のあく音がして、高い笑ひをまぢへた話聲がかすかに傳はつてきた。しかし、男がどきつとして四邊を見廻しながら、ほとんど本能的に植込の蔭に身體を隱さうとしたとき正面の窓があいて明るい電燈の光りを背負つた女の顏が小さく現はれ、直に彼は自分を探してゐる暖い瞳を感じた。女はゐらつしやい！と言ふかはりに輕く右手をあけて、合圖をした。それに應ずるやうに彼も左手に握りしめたステッキを高く差上げてから女の顏に向つて近づいていつた。

だが扉をあけると靴の紐を解きながら、彼は非常な細心さでくらい礫土の上に眼を落とさねばならなかつた。其處には無雜作にぬぎ捨てられた女の小さい靴のそばにたしかに男の編上靴が傲然と——新しい闖入者に向つて挑みかゝるやうにならんでゐるではないか！。

不意に妙な苛立たしさが彼の胸にこみ上げてきたのである。彼はレーンコートをぬぎ捨てると、玄關の突端にある扉を搖ぶるやうに押しあけた。

部屋の中の光景は、一瞬間彼の頭に描き出された想像と少しも違はなかつた。電氣スタンドを置いたテーブルに片肘を凭たせかけて丈の高い一人の青年がうしろの壁によりかゝつてゐる。長い髮の毛が耳の上に垂れ窪んだ眼がこの男の自信あり氣な態度に一層確證を與へるものゝやうに、ぢつと彼の顏を見据てゐるのであつた。

女は電燈に背を向けて立つてゐたが、しかし、彼は、そのとき、かすかに女の表情をかすめた心の動搖。——その動搖を隱さうとする狼狽を見逃さなかつた。

彼女は青年の方をちらつと見てから、朗らかな聲で、

「御紹介しますわ、この方ね、聲樂家の仁科さんよ、それから、こちらはね、小說家の荒川克彥さん——荒川さんはね、明日上海へお經ちになるのよ」

すると、青年は勢ひよく立ちあがつた。

「僕仁科重夫ですどうぞよろしく」

人馴た・自信に充ちた調子でかう言ひながら、しかし、若々しいお辭儀をした。その聲には自分の存在をはつきり相手に承認させなければ措かないやうな虚傲な響きが籠つてゐた。……

3

三方の窓を掩ふ絲色のカーテンの反射をうけた小さい部屋であつた。その中に三人の顏が蒼白くうかんでゐる。荒川克彦の腰かけてゐる椅子のうしろには小さな西洋戸棚とならんで黑檀の脚のついた鏡臺が置いてあつたが、香水の薫りがほのかに其處から流れてくるのである。桃色の壁と黄色い絨氈それに彼女の寄りかゝつてゐる小さい書き物机の上の青磁の花瓶、――すべてがこの部屋の空氣に相應はしいものであるが、唯一の若强ひてこの部屋に調子外れのものを求めるならば、それは戸棚の上に置いてある、並はづれて大きい銀の置時計であらう。その置時計の針が克彦の頭の上で今ちやうど一時五分前を示してゐる。

「上海へは何か支那を背景にした小説でも書きにいらつしやるんですか？」仁科が一寸身體をくねらせるやうにして問ひかけた。

「いや、ほんの氣まぐれに行くといふだけなんですよ。行きあたりばつたりの旅ですからね――」

克彦は自分が少しも此場の雰圍氣に拘わつてゐないことを示すために、わざと朗かな聲で言つたがしかし、相手の眼が明かに自分に對して武裝してゐることを感ずると急に言葉を噤んでしまつた。思ひがけない不安が彼の心の中にひろがつてきたのだ。――それにしてもこの男は何のために此部屋で女を待つてゐるのであらう？いやそれよりも一體何者であらう？女の留守中に、しかも、こんなに夜が更けてから平然として坐りこんで待つてゐる男は――？

しかし、その疑問を彼は無理にも自分の胸の底から拂ひ捨てなければならなかつた。ときごき彼の方を偸み見る女の瞳が、哀願するやうにかう囁く、――とんだ奴が來てしまつたのね。だけど、どうぞわたしを信じて下さい。あとで直わかることですから。

克彦の頭には數時間前の夢のやうな場面が幾度となく現はれてきた。さうだ！この男が彼女とどんな關係であり、そしてよし、假りにこの男が何かの野心をもつて女に臨んでゐるとしたところで、そんなことが何であらう。いや、むしろ、かういふ男を自分の友人として待遇しなければならないことも時には女優としての彼女の生活に必ずしも必要でないと云へないから。

克彦はその場の苦しい不安から逃れるために無理にもさう考へざるを得なかつた。するとその氣持に應ずるものゝやうに女が常談らしい、しかし、何處か嚴肅な口調で言つた。

「仁科さんも隨分圖々しいのねこんなにおそくやつて來て人の家に上りこんでゐるなんて、少し不良

過ぎるわね」

「いや僕ね、――もう二時間も待つてゐるんですよ。おそくなつたから歸らうかと思つて電燈を消したところへ燦珠さんの足音が聞えたでせう。だから――」

仁科はおど〳〵した口調で言葉を濁しながら、ちらつと克彦の顏を見た。

「だつて、びつくりするぢやないの」

彼女は腰を屈めて窓枠の下の電氣ストーブに火をつけるためにスキッチをひねつた。そのとき漆黑の斷髪の房が輕く克彦の手の甲に觸れた。ストーヴが燃えはじめた。

「さあ、――もう一時ですね。僕は失敬しなくつちやあ」

不意に克彦が苛立たしさうに、しかし、幾分か彼の若い敵に對して肩を聳やかすために昂然として立ちあがつた。

如何してなの。だつて、未だ一時よ、――あと三十分位宜いぢやないの。わたし、どうせ二時過ぎでなけりや眠れないんですもの」

わざとらしく甘えるやうに言葉を裝ひながらも、燦珠の表情が一時に硬直したやうに眞劍になつた。

4

「でも、明日の朝が早いし、それに未だ荷物もすつかり出來てゐないんですからね」

「だから言つてゐるんぢやないの、――三十分、ね、それ以上どんなことがあつたつて止やしないわ」

「ぢやあ、三十分」

克彦も應揚に笑ひながら腰をおろしたが、その豫定の示威運動は結局、一人相撲をとることに終つてしまつたらしい。何かしら險惡な空氣が部屋の中を充しはじめた。

「それで、――船は何處からお乘りになるんですか？」

克彦の眼の前には一つの構へをもつた仁科の顏が冷然として輝いてゐた。

「長崎からです。長崎から行けば面倒がないですからね。最初は横濱から歐洲航路の船で行かうと思つたんですが、明後日とその次と二日續いて長崎から出る船があるものですからね」

「すると明日長崎まで汽車でゐらつしやるわけですね。――失禮ですが、朝の特急でせうか？」

「さうです」

「ぢやあ僕も是非見送らせていたゞきませう」

「ありがたう、――だが、何しろ九時半ですからね、早く起きてわざわざ來ていたゞくほどのこともありませんからね一

「いや、僕はこれで隨分早起きですよ、それに……」と、言ひかけてから、

「どうせ、燦珠さんも行くんでせう？」

仁科は意味あり氣な視線を女の顏の上に投げたが、急に自分の言葉を掩ひかくすやうに慌てゝ克彥の方を向いて、狡猾さうな笑ひを唇の上にうかべながら、

「でも上海は今大變ぢやないですか？」

その聲には媚びるやうな調子が籠つてゐた。敵は何時の間にか克彥の懷ろに喰ひ下つてきたのだ。

――ストーブのかゞには仁科の、焦茶色のダブルブレストが顫へるやうに動いてゐる。

克彥は、この小さな氣持の懸け引の中で、次第にたぢ〳〵と土俵際に押つけられてゆく自分の心を感じないではゐられなかつた。妙にこゞれた不快な感情のために彼は胸がつまるやうな氣がした。そして最後に、この部屋の中にゐる餘計者は仁科ではなくて自分であるといふ氣持が彼の心の上に掩ひかゝつてきた。

「さあ、――もうあと五分だ」

彼はうしろの時計を眺めて、退屈さうな欠伸をしながら立ち上つた。しかし、土俵際に爪立ちした

まゝ辛ふじて試みた最後の應酬も彼の身體を一層強く土俵の外へ彈き出したといふことだけに終つてしまつた。

「ぢやあ、僕も」

さう言ひながら仁科も慌てゝ立ちあがつた。一瞬間、燦珠の表情は石のやうに冷たくなつた。克彥は、扉をあける時、ついと仁科を先へ遣り過してから、自分の唇を待つてゐる女の顏に近づかうとしたが、さういふ行爲までが此場合何か卑屈な賤しむべきことのやうに思はれてならなかつた。そこで彼は接吻のかはりに力强く女の左手を握りしめた。燦珠の聲を扉の中に殘して外へ出ると雨はすつかり上つて、白夜の道は朝のやうに明るかつた。しかし、門の外で坂の上へあがつてゆく仁科とわかれて一人きりになると克彥の胸には再び新しい幸福感が漲ぎつてきた。

何でもない、――要するに何でもないことだ。彼は心にさう呟きながら、砂利を踏んで消えてゆく仁科の靴音に耳を澄ました。その音は深い闇の中に消えていつた。そして、彈力に充ちた、女の乳房吸盤のやうな唇――夢のやうに迫つてくる數時間前の陶醉だけが生々しく彼の記憶の中を彷徨ひ始めた。そのとき、何處かの家の軒下にでも眠つてゐたのであらう一匹の大きな痩犬が、毛並もわからぬほど、びしよ濡れになつて、すゞ〳〵と人の臭を懷かしむもののやうに、しきりに鼻を鳴らしながら隨いてきた。

「おい、あつちへ行け？おれの心は今お前を憐れむことが出來ないほど大きな幸福に惱んでゐるのだあつちへ行け！」

彼はしきりに兩手で追拂はうとしたが、この不吉な哀れな動物は悲しさうに鼻を鳴らしながら益々彼に近づいてくる。

5

うす曇つた晩秋の朝の陽ざしが荒い縞のやうに東京驛の入口の低い階段の上に流れてゐた。――一人の男が寒さうに首を外套の襟の中に埋めて、忙しさうに息を吐きながら正面の廣場を突切つてやつてきた。その男はカラアもネクタイも着けてはゐなかつた。黒いソフト帽には塵がうかび痩せた頰には無精鬚がざらざらに伸びてゐる。彼は正面の大時計を見上げると一瞬間、どきつとしたやうに立ちどまつたが直に、ふゝんとせゝら笑ふやうに頰をゆがめた。その大時計の長針が漸く九時三十分を過ぎやうとしてゐる。彼は屈託のない姿勢で開札口の方へ歩みながら外套のポケットの中からバットの箱をとりだすと、そつと一本ぬき出し、無雜作な手つきでマッチを擦つた。

そこへ、ホームの方から改札口をめがけてやつてくる群集の足音が聞えてきた。彼は傍の圓柱によりかゝりながら見るともなしにその方を見てゐると、きれぐ〜に續いてゐる人の顏が明るく生々と

小さな波をつくつて狹い改札口からこぼれるやうに散つていつた。そのさまぐ〜な顏の流れの中程に思ひがけなくも暗紅色の婦人帽子がぽつかりとうかびあがつた。やがて四五人の若い男にとりまかれた深紅のスカートが輕く飜へりながら改札口の前まで來たとき、彼は急に視線を凝らすやうにその方をぢつと見詰めた。それが女優の月岡燦珠であることはすぐわかつた。女もまた彼を認めたらしい、緊張した視線が彼の顏に迫つてきた。僅か十間足らずの距離であるが、女は慌てゝ頭を下げてから彼の方へ近づいてきた。

「――まあ、南里さん。何をしてゐらつしやるの？」

「いや、時間がおくれたんです。柄にもなく人を見送らうなぞといふ氣になるとろくなことはありませんね」

南里はぶつきらぼうな調子で、しかし流石に少し頰を赧らめながら太い濁み聲で言つた。

「今からすぐお歸りになるの？」女は彼女を待つためにうしろに立ちゞまつてゐる四五人の輕快な洋裝をした青年たちの方をちらつと顧みながら言つた。

「さあ、――どして？」

「わたしたちね、今からみんなで淺草の方までドライブしようと思つてゐるところよ。よかつたら貴方も一緒にゐらつしやらない？」

「いや、そいつはお斷りしませう。たつた今も柄にない眞似はしまいと思つたばかりのところですからね」

男の不機嫌な表情に對して、燦珠も急にむつとしたらしく

「それぢやあ——貴方は柄に合つた人と酒場にでもゐらつしやるがいゝわ」

女はそのまゝ踵をめぐらして自分を待つてゐる青年たちの方へ歩いていつた。南里は冷然として、いさゝか自嘲的な微笑を厚い唇の上にうかべながら、自分の前を通り過ぎてゆく新時代の若い一團を見送つた。燦珠とならんで歩いてゐた丈の高いタキシードを着た青年が彼の方を向いて輕く會釋しようとしたが南里が急に視線を横へ外らしたので青年はついと傍にゐた男のかげに身を隱した。

そこへ、學生らしい紺絣の着物を着た一人の青年が唯一人とり殘されたやうに慌てゝ改札口を出てきたが、人波の去つた空虛な構内につくねんと立つてゐる南里の顏を見ると、帽子をとつて嬉しさうに笑ひかけた。

6

青年の顏を見ると南里も上體をゆすぶるやうにして笑ひながら——

「——朝飯も喰べないでやつて來たんだぜ。カラアもネクタイもこの通りさ。たつた一足違ひでおくれちやつたわけだ。つまり緣が無いのかね」

彼は上着のポケットから皺くちやになつた黑いネクタイを出して見せた。

「だが、荒川も馬鹿だね。あんな女優たちにまで見送られていゝ氣になつてゐやがる姿を想像するとやつぱりおくれてよかつたといふ氣がするよ」

南里は青年とならんで出口の方へ歩きながら

「ところで俺は未だ朝飯を喰べてゐないんだぜ。何か手つとり早く濟ましてしまふから丸ビルの地下室まで一所に行つてくれないかね」

「どうぞ」

青年は愼ましさうに會釋をしてから、急に四邊を見廻した。

「だけど、荒川さんも隨分隅に置けませんね。見送りに行つたおかけで、ひどい場面を見せつけられましてね」

「すると、相手はあの女優かね、——しかしあの女も今は「近代劇場」の花形ださうだからね。だから荒川のやうな舊式なピユリタンとはどうせ相撲にはなるまい」

「ところがね、とんだ濡れ場を見せられてしまつたんですよ。何しろ商賣柄だけに芝居がゝりでゆくんですからね、——手に入つたもんですよ。さあ何といふか、無言劇といふやつですかね。しかし最

後の幕切れだけは少し新派悲劇になりすぎてゐましたがね」

青年は南里の顔を覗き込みながら愉快さうに笑つた。二人はもう電車通りを横切つてゐた。厚い雲の切れ目から射してくる弱い陽ざしが冬の近いことを思はせる。

丸ビルの前には人集りがして維新時代の志士といつた風采をした木綿の黒紋付を着た青年が通行人をあつめて、かすれたやうな聲で演説をしてゐるところだつた。その傍には同じ風采をした二三人の男が太いステッキを持つて立つてゐるのである。南里が近づいてゆくと一束の紙切れを抱えてゐた男が儼然とした態度で一枚のチラシをわたした。それには、初號活字で「モダンガールを撲滅せよ、斷髪は國辱なり。報國義團」と書いてあつた。南里は先に歩いてゆく青年に近づいて——

「おい、中澤——、恐ろしい時代が現はれたね。これは一種の武斷派だ。つまり、モダンボーイに對するブダンボーイだね。だからさ、モダンボーイが新しいといふ意味では無論ブダンボーイも新しくないとは言へないね。時代の英雄の二つの型だからね」

彼は皮肉さうな微笑をうかべてチラシを青年の手に渡した。

「いやどうも、——恐ろしい時代錯誤ですね」

「時代錯誤？」

南里はぢろりと青年の横顔を覗きこみながら

「だがね、ブダンボーイはことによるとモダンボーイよりは新しいかも知れないね。何故かといつて功利主義に徹してゐる點において、實行力を持つてゐる點において、それから、どうだ——もう一つテンポの素晴らしく早い點において、……」

「いやにブダンボーイの肩を持ちますね。」

二人は地下室に通ずる階段の入口に立つて顔を見合せて笑つた。

7

丸ビルの前で南里が本郷へ歸つてゆく若い大學生の中澤とわかれたのは晝過ぎ頃だつた、「ブダンボーイ」の一味はもう其處にはゐなくて彼等のゐた同じ場所に、救世軍らしい黑い袴を穿いた若い女が通りかゝる一人々々に丁寧にお辭儀をしては宣傳用のパンフレットらしいものを差し出してゐた。南里はその甲斐々々しい姿を報國義團との取り合せに妙な皮肉を感じながら、空つ風の寒い大通りを有樂橋の方角へ歩いていつた。

空が少しづつ曇つてきた。橋をわたると街の騷音がどつと押寄せてくる。一人きりになると不意にけつそりした氣持が何處からともなく湧いてきた。——彼の眼の前には落莫たる午後の街がひろがつてゐる。

あらゆるものを溶解した、慌しい人間の渦が層をつくつてゐるのだ。南里はその烈しい騒音の流れの中に沒入するやうに銀座の方に向つて歩いてゐた。「すべての人間が一つの目的をもつて歩いてゐるのだ。――それだのに何の目的もなく歩いてゐるのは貴様だけではないか！」――心の隅で一つの聲が叫んでゐるやうな氣がする。さうだ。俺だけだ！」

誰れに對してともなく、さう力みかへすやうに呟きながら彼は大きく胸を張つて歩いた。大通りへ曲る頃から雨が少しづゝ落ちてきた。彼は其處から尾張町まで歩いた。そして、街角のカフエーの前までゆくゝ吸ひこまれるやうに扉をあけた。――

何時ものやうに隅つこのテーブルに腰をおろすと、彼は無愛想に近づいてきた女給にジョニ・ウオカを命じた。默々としてウイスキーのグラスを重ねてゆくうちに、新しい客が入り替はり立ち替はり彼の前に現はれてきた。宵が靜かに襲つてきたのだ。彼は呻るやうに飲みつゞけた。厚い窓ガラスを傳つて流れ落ちるかすかな雨だれの絲がカーテンのすき間から見え、人の笑ひ聲や、生々とした靴の音が絶え間なく彼の耳に近づいてきた。そのとき、ふと醉ひ疲れた彼の頭の中を荒川克彦の蒼褪めた顏が通り過ぎた。すると妙な懷かしさが胸の中にひろがつてきた。彼は一枚の紙幣をテーブルの上に置いてそのまゝよろ〳〵と立ちあがつた。

一人の紳士が半啖るやうな態度でぬつと彼の前に立ち塞がつた。――

「南里君！愉快ぢやないか。今夜は？――だが、君は何だつて何時も隅つこのテーブルにおさまつてゐるんだね。いやに哲人ぶつてさ」

それは月岡燦珠のゐる近代劇場の經營者である袋井信策だつた。

「――俺が哲人であることが何か君の名譽にでも影響するのかね、俺が隅つこに腰かけてゐるのはつまり、君のやうな馬鹿野郎と伍したくないからだけなのだが！」

すると相手の眼には異常な殺氣が現はれ彼は洋盃を握つた手をぶる〳〵顫はせた。

「何――、貴様は俺を侮辱するのか！」

「侮辱！」南里は傲然として右の拳を握りしめたが、しかし相手が醉つぱらつてゐるのを確かめると、

「おい自惚れるなよ。何の理由があつて君を僕が侮辱するのだ。――さあ、君はまん中の役者なのだから一隅の哲人なぞを氣にかけないで勝手に愉快になり給へよ」

彼は袋井の肩を輕く叩いて外に出た。彼は嘯くやうに空を仰ぎ、それからべつ〳〵と唾を吐いた。布の破れた全集本の立看板が無慘にも電柱のかげに倒れてゐるのを彼は苛立たしさうに靴の先で蹴飛ばした。遠い軒燈の渦が彼の視野を掩つてゐた。冷たい雨の中を何時もの梯子酒の癖で二三軒行あたりばつたりに飲み歩いたが、彼は少しも醉へなかつた。

十時近くなつて、彼が蹌踉として新橋の袂まで來たとき手提鞄を抱へて顔を深く外套の襟に埋めた若い男が足早に歩いてきたが彼と擦れ違ふとき南里は不意に呻めくやうな聲をあげた。——

「荒川！」

その男は棒のやうに立ちどまつた。

8

「おい——君は？」

南里は思はず兩手を上てゐた。それから、喪心したやうに突立つてゐる克彦に近づいて彼の肩をしつかりと抑へるやうにしながら、

「君は如何したんだ。——朝、君は東京驛から發つた筈ぢやなかつたのか。へんだね。僕はもう大阪あたりを通り過ぎてゐる頃だと思つてゐたんだが、さつぱりわからんな。一體如何してこんなところをうろついてゐるんだ？」

「いや、僕はね……」

克彦のうるんだやうな眼には次第に烈しい苛立たしさと絶望とが現はれてきた。彼は慌てゝ何か言はうとしたが唇が顫へて物を言ふことが出來なかつた。

南里は不思議さうに克彦の顔を見詰めてゐたが、しかし突然幻想の中から現はれてゞも來たやうに彼の眼の前に立つてゐる若い友人の暗鬱な表情の中から何事を探ることも出來なかつた。

「如何したのかね、一體？俺は今朝、君を見送るために東京驛へ行つたんだが一足遠ひでおくれちやつたんだ。……だが、おかしいね。まるで幽靈にでも會つてゐるやうな氣がするぢやないか！」

彼には默々として立つてゐる蒼ざめた克彦の顔が次第に幻怪なものゝやうに思はれてくるのであつた。

「僕はね、沼津から歸つて來たんだ。何のためにと訊かれても返事をすることが出來ないほど僕の頭は今狂つてゐるんだ。だが此處でひよつこり君に會はうとは思はなかつた。若僕に酒が飲めるなら今夜だけは亂醉してへべれけになつてしまひたいと思ふんだけれど……」

克彦の聲は未だ顫へてゐた。彼は悵然として深い溜息を吐いてから、

「全く僕は幽靈だ。つまり一口に言ふとね、僕は女にふられたのだ。命を懸けて惚れた女にね。唯それだけのことだ。」

深い自嘲を籠めて克彦は敲きつけるやうな聲で言つたが、不意に一つの忌はしい感情の重みに堪へないものゝやうに、しきりに眼をしばたたいた。

南里の唇にはかすかな微笑が浮かんだ。彼は克彦の肩を抑へてゐた兩手を離して、先に立つて新

橋の方へ歩きながら、

「何だか一向わからんね。君は兎に角今、昂奮しすぎてゐるぜ。昂奮しすぎてゐる人間を見るのは醉ぱらひすぎてゐる人間を見るよりも見苦しいからね。帽子をとつて冷たい風に吹かれることが何よりも一番必要らしいな。この勢ひで失戀の嘔吐を吐かれたら全くやりきれないからな」――

南里の聲には七分の冷嘲と三分の親しみとが雜つてゐた。克彦はよろ〳〵と歩き出した南里のあとから追ひ縋るやうにして、

「そのとほりだ。僕はほんたうに君に會ひたかつたのだ。そして何も彼も洗ひざらひ話をしてしまひたかつたのだ」彼は手きびしく迫つてくる南里の毒舌に一種の快感を覺えながら力を籠めて、さう言つた。

「厭に哀れつぽい聲を出すなよ。偶には失戀でもしてくれなけりややりきれないぜ。色男の罰だからね。――」

南里は突つ放すやうに言つてから、凭れかゝるやうに克彦の肩につかまつた。

「さあ、行かう。こんなところで愚圖々々してゐたら誰につかまるかもわからないぜ、兎に角、俺の家まで行かう」太い南里の聲が爽かに晴れた夜空に消えていつた。

低い丘がうね〳〵と續いてゐて丘をめぐる新しい砂利道が白い帶のやうにうかんでゐる。その帶が半圓を描いた高原に向つて伸びてゆく果に池上本門寺の森がゆるやかな傾斜面に黑い影を投げて聳えてゐた。その森のうしろの雜木林にかこまれた窪地のへりに南里玄作の家があるのだ。――それは地震當座に建てられたバラックの一つを思はせるぞんざいなトタン屋根の四疊と六疊二タ間の平家であるが、しかし、三十も既に半を過ぎた南里玄作が、たつた一人きりの閑寂な生活を始めてからもう何年になるであらう。彼は空をわたる鳥が休息の場所を求めるやうにときどき思ひ出したやうに亂醉の身體を自分の家へ運んでくるのである。家――さうだ若假にこれが家と名づくべきものであるならば。

ほとんど掃除をしたこともない部屋の中は亂雜に積み重ねられた洋書の上に塵が堆高く積つて、雨戸をあけるとすぐに古い壁の臭がむかつくやうに迫つてくる。

しかしその夜は珍しく、雜木林にかこまれたこの家の雨戸が明いて、雨氣を帶びた雜草の上に電燈の灯かけが搖れてゐた。時間はもう一時を過ぎてゐるにちがひない殺風景な部屋の中には七輪の火を挾んで南里と克彦とが向ひ合つて坐つてゐた。疊の上には酒の一升罎が罐詰の空罐とゝもにころがり

ところどころに裂け目の見える壁の上には二人の影法師が雨だれの汚點のやうに黑く浮き出してゐた

――

「それで、――一體君は何のために歸つてきたのだ？」

南里が急に赤く火照つた顏をあげたとき、遠くで梟の鳴く聲がした。その悲しげな鳴き聲が克彥の胸に思ひがけなくも新しい感傷を喚び起したのである。

「梟が鳴いてゐるね――」

克彥は沈痛な聲で言つたが、すぐに言葉の調子を變へて、

「僕はね、自分の運命が恐ろしくなつてきた。僕のやうなハムレットは今の時代には生存する力が無いんだ。僕はね……」

彼はかう言つてから息を深く吸ひこんで、

「今夜、僕は自殺しようかと思つてゐたのだ！」

「自殺？」

克彥は銳く迫つてくる南里の視線を避けるやうに顏を俯せながら、

「僕にはね、幸福の絕頂に立つてゐるときほど恐ろしい不安がやつてくるのだ。あの女優の燦珠ね。――あの女と僕とは一年近い纖仲だつたが僕は今迄あの女の肉體には一指も觸れないで過してきた。

僕は纖愛に對してだけは時代おくれのピュリタンだからね。だがそれよりも僕は生理的に弱いのだ。この胸を見給へ。このうすつぺらな胸を。この胸は全く女を抱くための胸ぢやないよ。だから僕は二人の幸福が頂點に達することを恐れてゐたのだ。全く僕は女に對する優越權を失つてしまふのが恐ろしかつたからね。ところが、昨夜、到頭、僕は彼女から最後のものを奪つてしまつたのだ。――いやさう言ふよりもそれを受取らなければならなくなつてしまつたのだ。だが僕は幸福だつた。今朝も僕はその幸福感に醉ひながら汽車に乘つたのだが、汽車が橫濱を過ぎる頃だつた。僕の幸福は急速度に不安に向つて傾いてきたのだ――」

克彥は戰くやうに唇を顫はせた。

10

「――僕にはね、あの女と二ヶ月以上わかれてゐなければならんといふことが急に恐ろしくなつてきたのだ。それに僕は昨夜・帝國ホテルからの歸り途に女の家へ寄つたのだが、そのとき女の部屋に若い男が一人待つてゐたのだ。聲樂家の仁科といふ男がね……」

「あゝ仁科か。――彼奴は僕も知つてゐる。新時代の色魔だ。つまり彼もまた現代の英雄だからね」

克彥は慌てゝその言葉を壓へるやうに口籠りながら

「いや、そのときは何でもなかつたのだ。だが今朝東京驛へあの男が女と一所に見送りに來てくれたのだが、――僕は、ならんで立つてゐる二人の姿に急に不安を感じたのだ。汽車が動きはじめると、タキシードを着たあの男の颯爽とした姿が脅かすやうに僕の頭の中にひろがつてくるのだ。すると恐ろしい嫉妬があとからあとからと追駈けてくる。拂ひ退けようとすればするほど怪奇な幻想が僕の心を不安にするのだ。これは勿論病的な直感に相違ないのだが、しかし、僕はもうこの不安の重みに堪へられなくなつて、到頭沼津までくるとそのまゝ飛び下りてしまつたのだ。今でも僕の頭にはそのときの自分の姿が見えるやうな氣がする。蒼褪めて、よろ〳〵と沼津の驛におりた自分の哀れな姿がね……。それで、僕はもう一度女に會ふために東京へ歸らうと思つたさうするよりほかに仕方が無い女の膝に凭れてこの氣持を泌々と物語りたかつたのだ。――僕は自分の空想の恐ろしさから逃れるだけでも助かると思つたからね。それでトランクを驛へ預て僕は直次の汽車に乘つたのだ。新橋へ着いたのは夜だつた。今から女に會ひにゆくのだといふのに何故だか僕の心は深い谷底へ墮ちてゆくやうな氣がした。それでもね、タクシーが女の家の前で停つたときにはこの儘引返してしまはうかと思つたが。しかし、何時の間にか僕は門を潜つて暗い植込の中を歩いてゐたのだ。若ゐなかつたらあの部屋の中で何時までも待つてゐようと思つて――。」

湧き起つてくる感情を抑へることが出來ないものゝやうに克彦はしきりに聲を顫はせた。

「だがね、女の部屋には明りが點いてゐた。足音を忍ばせて青いカーテンに近づいたとき僕は部屋の中の情景を空想した。そのとき僕には現實と空想との境界が全く失くなつてしまつたのだ。この古ぼけた悲劇の主人公には全く僕は嵌り役だからね。ところが半分カーテンに掩はれた窓に寄り添つたとき僕はたしかに女の聲を聽いたのだ。もつれるやうな顫へ聲を、――その聲が終るか終らないうちに挑みかゝるやうな男の聲が聞えたのだ。僕はぢつと耳を澄ましたが言葉は少しもわからなかつた。だが、――何といふ皮肉だらう、僕のゐるカーテンのかけから斜に見える鏡に二つの顏が慌しく近いてそのまゝ彫像のやうにぴつたりと動かなくなつてしまつたのだ。男はやつぱり仁科だつた。だが、男が誰であるかといふことを知るよりも前に僕の心の中では一切が終つてしまつたのだ。それだけのことだ。あゝそれから僕が自分の意識に返つたときにはよろけるやうに電車通りを歩いてゐた。その男が仁科であらうと誰であらうと最早僕にとつては問題ぢやない。――唯、僕は絶えず運命の不安に脅かされてゐる自分が恐ろしいのだ。あの夢のやうな情景も運命が僕のために用意してゐた陷穽だとしか思へない。かういふ重荷を背負つて喘いでゐる男が一體何のために生きなければならないかと思ふと、僕は堪らなくなるのだ！」烈しい昂奮のために克彦の言葉は次第に亂れてきた。

夜風が板戸のすき間から泌みて來た。堅い蒲團をかぶつて二人がごろりと横になつたのは二時を過る頃であつたが、しかし、克彦は頭が冴へて眠ることが出來なかつた。彼は苦しさうに肩を動かしてゐた。そのとき南里が急に克彦の方を向いて、酒臭い息を吐きながら低い聲で言つた。

「――荒川、今夜はよく眠る方がいゝぜ。要するにだね、君は少し昂奮しすぎて居るよ。ぐつすり眠つてから人生に向つて新しい戰鬪準備をするんだ。……何しろよく眠らなくつちやあ」

言ひ終ると彼は再びくるりと向きを變えた。深い夜氣をすべつて遠く汽車の轢音がひゞいて來た。そのひそやかな音が克彦の頭に思ひがけなくも佗しい漂泊の旅を思ひ起させた。

「だがね」

克彦は眼をあいて、闇の中に南里の顏を探した。何といふこともなしに話しかけたい衝動を感じたのである。

「……若ね、假りに君が僕の立場にゐたとしたら如何するかね。燦珠の窓の下に立つてゐた男が僕ではなくて君だつたとしたら?」

「それは難しいね。何故かといつて、僕だつたら決して窓の下には立たないからな」

南里は輕く受け流してから、

「いやしかし、若僕だつたら何よりも自分の失戀の最後を見屆けるだらうね」

「見屆けるつて?」

「さうさ――窓の中へぬつと首を突つ込んでやるね」彼はさも愉快で堪まらないといつた調子に身體をゆすぶつた。そして、聲を立てゝ笑ひながら、

「尤も僕だつたら、それだけで萬事が終つたとは思はないね。問題はそれからだ。多分僕は復讐のために新しい情熱をかき立てるだらうね。いや假りに復讐は思ひとまるとしても君のやうに自分で自分の神經に敗北するやうなへまな眞似はしないね」南里は退屈さうに欠伸をしたが急に冷徹な聲で詰問するやうに言つた。

「それで、――君は結局如何するのだ?」

「やつぱり上海へ行くさ。失戀の殘骸を埋めるためにね」

克彦の聲は一種の悲調を帶びてゐたが、しかし南里は返事をしなかつた。そして、間もなく唸るやうな鼾が聞えてきた。だが、克彦は益々眼が冴えてきて眠れなかつた。無理に眠を瞑ぢると、遠い昔に讀み捨てた古い小說の中の挿畫でゝもあるかのやうに、今日一日の出來事が、うすくぼやけた色彩の中に目まぐるしい速さで廻轉し始める。闇の中にうかんでゐる燦珠の顏。そして溢れるやうな情感を湛えた黑い瞳が……。

どよめくやうに胸がこみあげてきて克彦はもうぢつとして居られなくなつた。彼はそつと起き上つ

て机の上に置いてあつた折鞄の中から慌てゝ一束の手紙をとりだすと、それを苛立たしさうに片ッ端しから引裂き、引裂いた手紙を再び皺くちやにして七輪の中へ投げ入れると急いでマッチを擦つた。それはこの半年あまりの間に燦珠から送られた手紙の全部だつた。——だが、昨日までこの呪ふべき手紙の束がいかに彼にとつて貴重な品であつたであらう。

火はたちまち手紙の一隅から燃え上つたが、しかし、彼の半年の記憶が燒き盡されてしまふまでには二分とかゝらなかつたこれで彼と燦珠との間に新しく架けられた橋は斷ち切られてしまつたのだ！。

克彦は何ものかに祈りたい氣持になりながら、冷たい空氣を吸ふために雨戸をあけた。夜が仄々と明けかゝつて居た。薄明の空の下に雜木林の丘の向ふにひらかれた高原が朝霧の中に涯しもなく續いてゐる。それはさながら彼の行くべき新しい人生を暗示するかのやうに。——

第二章　順風記

1

上海直航のN丸が午後の陽ざしの中を進んでゆく。——玄海洋が漸く盡きやうとするところであつた。

小さい二等船室の一隅には、荒川克彦が腕組をしたまゝ丸窓に凭れて、蒼茫と暮れてゆく海の色を眺めてゐた。——海の暮れるのは早い。晝少し過ぎから海面は少しづゝ荒れてきたが、しかし船體には何の微動も受けなかつた。列をつくつて押寄せてくる小さな波頭は絶え間なく跳ねあがつては赤く爛れた雲の色を吸ひこんだ。

視野の屆くところはすべて海だ。遠い地平の果にはすきとほつたやうな白い雲が長い層をつくつてうかび、陸地らしいものは最早片影すらも見ることは出來なかつた。

ぢつとして海を見詰めてゐるとすべての回想が、きれぎれに、しかも慌しく遠い潮鳴りの中に溶けてゆく——前の夜一睡もしなかつたゝめに克彦の頭は、引つ切りなしに、ぎし〳〵と痛んだが、しかし、それにもかゝはらず彼の心は深い悲しみのために冷たく澄みとほつてきた。

おれは今こそ完全に日本から離れたのだ。そして、あの呪はしい戀愛の記憶からも。——克彦は無理に自分の心に鞭うつやうに、さう考へようとしたけれども、しかし彼の耳の底には未だかすかに燦

珠の聲の響きが殘り、ゆたかな肌のかほりまでが何處からともなく漂つてくるやうな氣がする。

克彦の胸には新しい苛立たしさがこみあげてきた。おれは泥土に投げ捨てた戀愛の記憶を振り捨てて何處へ逃げて行かうとするのか？

彼の頭には、燦珠の家の窓の下に忍び寄つて、ぢつと息をころしてゐた自分の姿がふたゝび鮮かに描き出されてくる。

おれは何故、燦珠の面前で、「賣女！」と叫んで唾を吐きつけなかつたであらう。何故、二科の胸先へ短刀を閃かせなかつたであらう——。

克彦は倒れるやうにベットの上に腹這ひになつてぢつと眼を瞑ぢた。すると彼の頭には日本といふ國全體が、今は黑くもや〳〵とした小さな栗のいがのやうな輪廓になつて廣い平面の隅にぽつんと一つだけ映し出されてくるのであつた。しかもそれは最早再び近づくことのできない距離に……。そして、現實は一刻ごとに遠く離れつつあるのに、呪はしい記憶だけはます〳〵鮮かに生々と彼の胸の中にひろがつてくるのである。

彼は船脚を洗ふ浪の音に耳を澄ました。その音はさながら彼の悲しみに調を合すかのやうにたよりなくひゞいてくる。これがお前のうけとるべき運命だとでも囁きかけてゐるかのやうに。

長崎から同じ船室に一人の肥つた相場師が乘合はせてゐたがその男は娯樂室へ出かけたきり未だ歸

つて來なかつた。——克彦はそつと立ち上つて入口の扉をあけた。ボーイが正面の大食卓に夕飯の準備をしてゐるところだつた。そのうしろを通りぬけて甲板に出ると寒い海風がどつと頰に吹きつけてきた。そのとき彼の頭の上の娯樂室の窓から思ひがけなくも、ひそやかなピアノの音が流れてきた。

2

克彦は娯樂室に相客の相場師のゐることを思ひ出して急いで梯子を上つていつた。だが、彼が入口の扉をあけたとき、其處には相場師はゐないで、桃色のジャケツを着た一人の少女が、扉のあく音に驚いたのか、鍵盤に觸れてゐた指を慌てゝ離して、ピアノの前に立ち上つたところだつた。十六を越えてはゐないであらう、小麥色の皮膚が若々しい彈力に充ち溢れ無雜作に束ねた下げ髪も、頰の色のふくよかな清々しさに快よく調和してゐる、少女は克彦の顏を見ると恥かしさうに顏を赭らめたがしかし、次の瞬間、彼女は猫のやうに素早く克彦の横を擦りぬけて低い階段を駈け下りてゐた。

その若々しい動作が妙に生々とした感じを喚つた。誰もゐないのを見すましてから克彦はそつとピアノの前に行つて、ちやうど自分が一かどの音樂家でゞもあるやうにぐつと胸を反らせて、それから亂調子に指の先で鍵盤を敲きはじめた。その響きは思ひがけなくも彼の胸底に蟠まつてゐる深い嘆きを誘き出すやうに空虛な部屋の中に消えていつた。

二三度同じことを繰返してから、彼は急に立ちあがつた。鈍い電燈の光の中に彼の顏は蒼褪め、眼は妙に血走つてゐた。不意に兇暴な發作に襲はれた人のやうに、彼は荒々しく扉をあけた。——

海は漸く暗い色に包まれて、船室の小窓から洩れる帶のやうな薄明りの中に仄かに蒼黑い波の色が反射してゐる一等船室の前の甲板の上には二三人の外國人がスウエスター一つになつて、きやつきやつと騷ぎながら元氣よくゴルフをやつてゐるところであつたが、しかし、大部分の船客は船室の中にとぢ籠つてゐるので、何がなしに落寞とした感じが溢れてゐた。克彥が甲板を一廻りして、船室に通ずる梯子を下りやうとしたとき、出會ひ頭に顏を出したボーイが形式張つた言葉で食卓の用意の整つたことを告げた。

大食卓の一隅には十人近い船客の顏觸れがすつかり揃つてゐた。正面の席を占めた事務長らしい男が物馴れた親しみ深い調子で簡單な挨拶を述べた。克彥の向ひ側には、先刻の桃色のヂヤケツを着た少女が、その母であらう三十前後の眼鏡をかけた夫人とならんで腰かけてゐる。女の客はこの二人だけだつた。

明るい晩餐は誰の心にも靜かなゆとりを與へるものだ。——ゆくりなくも會つて、またゆくりなくもわかれてゆかねばならない人々が、それぞれ禮儀深さうに隣合つた同志で囁き合ひながら、やがて穩かな食事が終ると、果物が運ばれてきた。そのとき、少女がうれしさうに立ちあがつて果物の皿の

中から林檎を取らうとしたが危く彼女の手をすべつた林檎が、ころ〳〵と卓子をすべつて向ひ側にゐた克彥の手許にころがつてきたのである。

「あら——」

少女がかすかな聲をあげて立ちあがつた。二人の視線がぱつたりと觸れ合つた。少女の唇には無邪氣な微笑か泛んだ。克彥も微笑み返しながら眼の前にころがつてきた林檎をわざと食卓の上から少女の方へころがしてやつた。すると母親が眼鏡越しに彼の方を見て輕く會釋をした。それから少女の方を向いて、たしなめるやうに何事かを囁いてゐたが、少女はちらりと彼の方を見てから、おどけたやうな顏をして母親の言葉に答へてゐた。……「わたし、あの方を前から知つてゐるのよ、お母さん！」

その朗かな素振りは、さう言つてゐるやうに見える。無言のうちに克彥の胸の中にさゝやかな親しみが流れてきた。

3

晩餐が終ると、船客は新しい空氣を吸ふために、ぞろぞろと列をつくつて甲板へ出て行つた。克彥もその列に加はつて低い梯子を上つた。

星のうかんだ空が彼の頭の上にひろがつてゐる。――空は近く彼の鼻先に掩ひかゝつてゐるやうであつた。

甲板の隅には三等室に通ずる狹い梯子か洞穴の入口のやうに、ほのかな明りに照し出されてゐた。たぶんその洞穴のやうな三等船室の中でも夕飯が濟んだのであらうさまざまな姿をした船客がぞろぞろとあがつてきた。

克彦は左側のてすりに寄りかゝつて暗澹たる色に掩はれた海面を眺めてゐた。すると、急に甲板の上には時ならぬざわめきが起つたらしくゆつたりとして歩いてゐた人々が、ほとんど喚聲といつてもいゝほどの叫び聲を上げて右側のてすりの方へ雪崩ていつたのである。

二本マストの小さい商船が、同じ航路をN丸のうしろから近づいてくるのであつた。黑い船體が次第に近づくにつれて、欄干によりかゝつて此方の船を見てゐる人の形が白い電燈の光の中に、男も女も、眼鏡をかけてゐるのも、葉卷をくわえて居るのも、――その一つ一つの輪廓が鮮かに現はれてきた。

二つの船がすれすれになつた。

太い警笛が兩方の船から交るがはる鳴りはじめた。船體が少しづゝ右に曲りかけた。

欄干によりかゝつてゐる人々の前には、さながら一つの舞臺のやうに明るい甲板が現はれてきたのである。舞臺の上の一團の群衆が聲を揃へて叫びかけた。白いハンカチをつかんだ手がくるくると虛空にゆれてゐる。そして、異人の一團を乘せた外國船の甲板は徐々にN丸を追ひ越していつた。――

船客の一團はふたゝびざわ〳〵と崩れはじめた。克彦は甲板の隅に積み重ねた太いロップの山の端に腰をおろして腕組をしたまゝ暗い海面をだん〳〵遠く離れてゆく夢のやうな外國船の甲板を照らす燈火を眺めてゐたが、突然彼のうしろから忍び寄つてくる人の氣配を感じたので慌てゝふり向くと小柄な一人の男がシャツの上に上着をひつかけたまゝの姿で闇の中に立つてゐた。

「おゝ、やつぱりさうだつた。荒川君、――しばらく、僕だぜ」

色の黑い兩肩の張つたその男は親しげな聲で叫んだ。

「君は？」

克彦が不意をうたれてぎまぎしながら問かへすと、小柄な男は

「忘れたかね、北野だよ、北野」

低い聲で繰返しながら、いかにも屈托の無さゝうな輕快な調子で溢れるやうに笑つた。

「――さうだ、君だ、北野！」

それは彼が大學時代の級友である北野一郎にちがひなかつた。

「まるでわからなかつた。眞逆、君だとは思はないからね」

克彦は照れかくしにかう言つて三年以來全く生活の方向を異にして、會ふ機會もなく過ごしてきた舊友の顏をしげしげと眺めたのである。

「久しぶりだね、ところで君も上海へ行くのか？」

さう言つた克彦の顏を睨むやうにして北野一郎は彼を甲板の隅に押しつけるやうにしながら、耳元へ口を寄せ、しきりに背ろを振返りながらきれぎれに囁いた。

「大きな聲を出すなよ。——俺は世を忍ぶ假りの身だからね」

4

北野は克彦の瞳の中を一抹の不安がかすめ去つたのを見てとると急に愉快さうにけら〳〵笑ひながら、——

「影法師と一緒に旅をしてゐるんだからね、樂ぢやないよ」

「影法師と？」

「さうさ」

北野はふたゝび四邊を見廻してから、克彦の胸に兩手を吸盤のやうにべつたりとくつつけながら一段と聲を潛めた。

「僕はスパイに覘はれてゐるんだからね——だが今のところでは先方には未だ僕だといふことがわからないらしいんだ。船の中だけうまく胡魔化してしまへば世話は無いんだが、何しろ先方だつて一生懸命だからね」

早口にかう言ひ終ると慌てゝ身を躱して、わざとらしく磊落さうな高調子で笑ひだした。克彦の眼には始めて北野の姿が新しい姿をさつて映つてきた。——さうだ、この男は日本の若い共産主義者の團體である新社會聯盟の幹部として働いてゐた筈だ。してみるとこの男は彼等の運動を代表する新しい使命を帶びて日本をぬけ出してきたにちがひない。——その感じは、しかし、非常な速さで彼の腦底から親しむべき昔の級友の幻像を拂ひ退けてしまつた。何故かといつて、彼の前に今胸を張つて立つてゐるのは昔同じ教室の中で他愛のない冗談を言ひ合つてゐた色の蒼白い北野一郎ではなくて、全く別の、——颯爽として野望に燃えてゐる共産黨員としての北野一郎ではないか！

人生の難關を突破するに堪へるだけの强い意志を示した太い眉、何かしら莊嚴な深い希望に輝いてゐる窪んだ瞳。——その前に立つてゐる自分のみすぼらしい哀れな心とくらべてそれ等は何と高らかに驕り誇つてゐることであらう。假りにどんな人間が眼の前に現はれてきたとしても、今の彼はその前にひけ目を感じたにちがひないのだ、——それほどにわれとわが運命に恐れを感じないではゐられない克彦の前に軒昂として現はれてきた北野の姿が彼の心をふたゝび新しい絶望に導いてしまつたこ

とはいふまでもない。

北野は、しかし無雜作に脊をてすりに凭せかけたまゝ上着のポケットの中から、よれ〳〵になつたバットを一本とりだして指の先で弄びながら、

「――ところで、君は一體何しに行くんだい？　小説の材料でも探しにゆくのかい――それとも觀光といふわけかね」

「何のためか、自分でもわからないね、金のある間ぶら〳〵暮してあさは如何でもなれといふ氣持でゐるんだが――何しろ文學に精進する氣持なんか今の僕には失くなつてしまつたよ」

「そいつはどつちにしても結構だね、ぢやあ戀愛に精進してゐるといふわけかな」

北野は輕く應酬しながら、二三歩前に歩きだして、

「――僕もずゐぶん昔の友達に會はないな、ところで南里に會ふかい、あのやくざなニヒリストに……？」

「昨夜わかれたばかりだ」さう言つて克彦はちよいと暗い顏をした。

「するとやつぱり昔のとほりの格好で半眼に人生を睨んでゐるわけだね。僕もあの男のことだけはときく〳〵思ひ出すよ、――だが、あの男の一生も到頭、鳴かず飛ばずで終つてしまふといふわけかな」

北野は沈んだ調子で言つたが、急に愉快さうに笑ひだした。

「それより如何だね、三等室へ行つて昔の話でもしようぢやないか――實はね、君のやうな溫厚な紳士と知り合ひであるといふことはスパイの眼をくらます上からいつても非常に都合がいゝんだ。これも昔の交誼だからね、因果とあきらめて交際つてくれたまへ！」

彼は先に立つて三等室に通ずる梯子――ほのかな明りが足元を照してゐる洞穴の入口の樣な梯子をゆつたりとした歩調で一階一階と下りてゆく。

5

廣い三等船室の中へ入ると、とぢ込められた人いきれが、煙草のけむりのやうに鼻先に迫つてきた船客は大抵、自分のベットに寢轉んでゐたが、しかし、自由な伸びやかな話聲が部屋の隅々に充あふれてゐた。

船室の正面には車座になつて酒を呑んでゐる一團がある。鈍い電燈の光りが微燻を帶びた顏の列の上にぼやけた影を投げてゐるのである。その上の箱のやうに仕切られた共同寢臺には、出稼ぎにゆく淫賣婦であらう、こつてりと白粉を塗つた女が三人、伊達卷一つでしどけなくごろりと寢そべつてゐる。そして、とき〳〵下の醉漢の群を覗きこみながら大仰な恰好をしてはしやいでゐるのであつた。

その横には、五十近い頭の禿た老人が七つか八つになる海軍帽をかぶつた男の子の相手になりなが

ら、危ない手つきで蜜柑の皮をむいてゐるが、この混濁した空氣の中で痩せ衰へた老人の横顔だけが妙にくつきりとうかんでゐた。しかし、克彦の立つてゐる入口のすぐ左側の寢臺には興行師らしいでつぷりと肥つた赫ら顔の男が、その妾でゞもあらう銀杏返しの、何處か骨張つた感じのする女に肩を揉ませながら、低い濁み聲で義太夫を唸つてゐる。――

これは克彦の前に思ひがけなくもひらかれた、喜怒哀樂をならべた人生の風景であつた。さういふ感じは急に彼の心を明るくさせた。彼はひとりでにこみあげてくる微笑を壓へることができなかつた。

「こつちが僕の場所さ――寢臺と言ひたいところだが二等船客の前では少し氣がひけるからね」

北野はまん中の通路を右に曲つた。左側にならんだ寢臺の、隅から數へて二つ目が彼の席であつた彼の兩側にゐた客は甲板の方へでも出掛けてゐるのであらう。汚い毛布がいぎたなく投げ出してあるのが妙にけつそりとした感じを唆つた。つまり此處はこの船室の中の裏道か、露路といつた場所であつた。若正面の通路を本通りとすれば……。

北野は自分の毛布をひろげて二人の坐るべき場所をつくつた。そのとき、北野の荷物であらう小さなバスケットの横に見馴れない黑い大きな風呂敷包にくるんだ四角い箱のあるのがふと克彦の眼についた。

「隣の人は行商人らしいね」――彼は田舍の町でよく見かける藥賣りの姿を頭に描きながら何氣ない調子で訊ねた。だが、北野の顏には全く意外な表情が現はれたのである。彼は唇をすぼめながら聲の調子を落して、

「何だ、――これか、僕だよ、僕のだよ」

北野は何時の間にか風呂敷包を足元へいざり寄せてゐた。無恰好な手つきでその結び目をほどくと中から小さな柳行李が出てきた。驚くべきことにはその行李の横腹には見覺えのある北野の達筆で黑黑と「天神堂行商部」と書いた文字がうかんでゐるではないか、しかし、克彦を驚かしたのはそれだけではない、北野の手が勢ひよく柳行李をあけると、中にはセルロイドでつくつた小さな人形がぎつしりと詰めこまれてあつた。

「どうだね、――かうやつて坐つてゐると立派な夜店商人には見えないかね」

彼はかすれ聲で囁きながら柳行李を膝の上に置いて、セルロイドの人形の一つをとりあげた。下のボタンを輕く押すと虛ろな人形の身體の中が燃えるやうにぱつと明るくなるのである。それは二三年前に銀座の夜店で流行つたものだつた。

「さて、――この口上が難しいのだ」かう言つて應揚に笑ひながら四邊を見廻したとき北野の顏色が急に變つた。

北野は硬ばつた様な微笑を唇にうかべたまゝで、しかし眼だけは異常な緊張を示しながら、——

「あれだ、あれだ、ほら君のところから斜めに、まん中の通路を越たベットの右の方に板壁に凭れかゝつてこつちを見てゐる奴があるだらう、ちよび髯の生へた、口の尖つた、——ね、あれがスパイさ。今まで、あんな眼つきで僕の方を見てゐたことは無いんだがな、ことによると君を連れて來たのが反つてこつちの目算外れだつたかもしれないな、仕方がない、君は知合の旦那といふやうなことにしておれは行商人になり切らう」

克彦も何氣ない素振りでその方を見た。ちよび髯の生へたその男は、そのときにやりと笑つて立ちあがつたところである。それは、うまく化けやがつたな、といふ感じにもとれるし、もつと、あつさりと、却々面白いことをやつてゐるな、といふ感じにもとれるけれども、しかし、いづれにしても、その男が船室の一隅に席を占めた若い行商人に新しい注意を向け始めたことだけは最早疑ふべくもなかつた。

「おい、こつちへやつてくるぜ」

克彦の聲は不安のために顫へてゐた。だが、それには無頓着で北野は朗かに笑ひながら、一段と聲

を張上げた。

「何しろひどい不景氣で御座んすからね、わたしたちも日本にゐたんぢやあ生きてゆかれませんよ。といつて、上海に良い儲け口があるといふわけでもないんですがね……」

北野は平然として、すつかり聲の調子を變へながら兩手に持つたセルロイドの人形のボタンを交るがはる押ては明かるくして見せた。そこへ茶色の洋服を着たちよび髯の男がスリッパをひきずりながら近づいてきた。

その男の顏にはスパイらしい感じは何處にもなかつた。その眼はむしろ一脈の善良さを漂はして、いかにも何十年勤續の下級官吏とでもいふべき實直な感じに充ちてゐた。

「面白さうですね、——一寸」

その男は屈託の無い聲でさう言つて腰を屈めながら北野の手からセルロイドの人形を大事さうにうけとつた。

「なるほど、これは面白い、良い儲けになるでせうね」

「いや、どうして、日本ではもう廢り物でさあ。日本ですつかり喰ひつめてしまつたもんですからね、夜逃け同樣にして出稼ぎにゆくんですが、こんなものでも當座の潛ぎの足しになるかも知れないと思つてね」

少しの不安も殘さずにかう捲し立てゝゐる北野の顏を見ると克彦の胸の底を不意にうそ寒い感じが通りぬけた。克彦は思はずきつとした。その感じが北野に反射しては思ひがけないところからスパイに感ずかれないものでもない、――彼は此場合自分が座を外すべきが至當であると思つた。

「どうもありがたう、ぢやあ、おやすみなさい！」

彼はゆつくり立ち上つた。そして殊更平氣を裝ほひながらかう言つたが語尾がかすかに顫へてゐたしかし、そのまゝ後を振返る勇氣もなく急ぎ足に三等船室を出て甲板に上つてからほつとしたやうに深い溜息を吐いた。

夜空は高く澄んで星がまばらに輝いてゐる。遠い潮鳴りの音が彼の胸をえぐるやうにひゞいてくるしかし、彼が左側のてすりに近づいて、ぢつと空を見上げようとしたとき、横の方の機關室らしい部屋の丸窓から洩れてゐる一筋の灯影の中に、今此方を向いて歩いてくる二人の人間の姿がうかびあがつたのである。向うでも彼を認めたらしい。不意に立ちどまつた。半身だけがくつきりと闇の中にうかんで、眼鏡をかけた夫人の顏と桃色のヂャケツを着た少女の顏とが深い翳に彩られた彫像のやうにならんでゐる。

少女はぢつと闇の中をすかすやうに彼の姿を見詰めて居たが、その顏には急に安心したらしい表情がうかんだ。――そこに立つて居るのが彼であるといふことはすぐにわかつたらしい。輕く會釋をしてから母の手によりすがるやうにして近づいてきた。

克彦は少女の方を向いて、しかし、二人のうちの誰に對してともなく行人の禮儀ともいふべき態度で丁寧にお辭儀をした。

「御散歩ですか？」

「えゝ、――眠られないもので御座いますからね」

だが、さう言つたのは少女ではなくて眼鏡をかけた夫人だつた。その聲には人なつかしい物馴た調子がひそんで居た。夫人は彼の二三歩手前のところで立どまり、無心にスカイライトの山に眼を落しながら

「でも、いゝ航海でございますわね」

その、もつれるやうな細い聲が克彦の耳になめらかにすべりこんで來た。

「――こんなことは滅多に無いさうですね」

彼は輕く夫人の言葉をうけとめてから、何か言ひたけに身體をくねらせて居る少女の顏をのぞき込んだ。

「お嬢さん、――上海えは始めて居らつしやるんですか？」
「いゝえ、もう始終、行つたり來たりしてゐるんでございますのよ」
肩をすくめながら慌てゝ母の顏を見て笑ひかけた少女のかはりに夫人はきつぱりとした聲で答へた。
「――わたしたちは上海に住んでゐますの、去年まで夫があちらで商賣をしてゐたものでございますからね」
「すると、上海へお歸りになるわけですね？。」
「いゝえ」――さう言つた夫人の聲には思ひがけなくもかすかな憂愁がこもつてゐた。
「わたしたちは東京に暮して居りますの上海には母とこれの弟さがゐるものですから、毎年一度づゝ行くことにしてゐますの」
「すると、御主人は東京にゐらつしやるわけですね？」
「いゝえ――夫はもうずつと前に亡くなつたんでございますの」
夫人は一層沈痛な表情をして彼の言葉を遮つた。その言葉は重々しいひゞきをもつて克彦の胸にのしかゝつてきた。
「すると？」

「えゝ、――でもそんな……」夫人は克彦の瞳の中にひらめいた好奇の感情を見逃さなかつた　彼女は淋しさうに笑つてから急に自分の言葉をまぎらすものゝやうに朗かな調子にかへつて、
「そんな話を今更したつて仕方がございませんわ、そのことをおもひだすと何が何だかわからなくなつてしまひますの、――ほんとにつまらないことをお耳に入れて……」
遠い潮鳴りの音が冬の夜の更けてゆくことを思はせた。そのとき夫人の話の方向を大きく轉廻させるために親しみに充ちた聲で言つた。
「失禮でございますが、あなたは荒川さんでゐらつしやいますのね？」
克彦は思はずぴくつとして兩肩を顫はせた。その言葉は唐突といふよりもむしろあまりに意外だつた。
「さうです、だが、どうして僕を御存じですか？」
夫人は、しかし、克彦の狼狽を愉快さうに眺めながら、
「わたしよりもこの子の方がよく知つてゐるんですのよ、ねえ美和子！」
すると、少女は娘らしい嬌羞を滿眼に漾はせて母の胸にかぢりつくやうによりそつた。
「駄目よ、お母さん、わたし船客名簿を見たゞけなのよ……」
かう云つてから、くるりと彼の方を向いて、

「あなた、さつきピアノを彈いてゐらつしたでせう？」
彼の前の小さな美しい敵は到頭新しい逆襲をはじめた。

8

克彦は内臓が一時に燃えあがるやうな氣がした。……してみるとこの少女は自分がこつそりピアノの前に坐つて鍵盤を敲いてゐたのを扉のすき間からでもこつそりのぞいてゐたのかも知れない。
「でもこの子はね、あなたのお書きになつたものを讀んでゐるんでございますのよ、だから、さつきからあなたのことを言つてははしやいでばかりゐますの」
窮地に追ひつめられた克彦の心を救ひあげるために、穩かな調子で夫人が言つた。
「どうも少し意地がわるすぎますね、僕がピアノを敲いてゐるのをこつそりのぞいてゐたりなんかして——しかし、おぼえてゐらつしやい、今にきつと讐をとりますからね」
少しどきまぎしながら、しかしそれがこの場合の彼にとつて精一ぱいの應酬だつたが少女は返辭をするかはりに肩をすぼめて小氣味良さゝうに笑つた。ひとりでに進行していつた二人の間の親しさにもうすつかり安心しきつてゐるかのやうに。
夫人は氣まぐれな會話から逃れるべき潮時をはかるためにそつと腕時計を見た。

「おや、もう九時よ——それでは失禮してやすみませう」
だが、さう言つてからふと思ひ出したやうに、
「失禮ですが、上海へゐらつしたら是非おたづね下さいまし、いろ〳〵御案内いたしますからね、北四川路の安達洋行の裏さ仰ればすぐわかりますから、——新公園のすぐそばでございますからね」
「えゝ、ありがたう、是非」
そこで、夫人はいかにも良家の主婦らしい態度にかへつた。そして愼み深く身體をかゞめて船室へゆくために彼の前を通りすぎた。
「ほんたうよ、——ゐらつしやらなければ、わたし迎ひに行くわ」
美和子がすつかり馴れきつた聲で言ひながら肩をゆすぶつた。やがて二人の姿は船室につゞくタラツプの中に吸ひこまれた。
次第に消えてゆくその足音にぢつと耳をすましてから、彼は上體を前にのりだすやうにして暗い海面に視線を轉じた。
冷たく冴えた夜空は海面とすれすれになつてゐるやうに見えた。——その前に立つてゐると底知れぬ不安の中にゐるやうな氣がする。ぢり〳〵と自分の心が深い海の底に誘ひこまれてゆくやうな氣がして彼の身體は次第に前へ〳〵とかたむいていつた。遠くから押寄せてくる白い浪がしらの列は最後

の努力をもつて船脚にぶつかるとたちまちおそろしいひゞきを立てゝ砕けるのである。すると新しい浪の山はふたゝび遠くからもりあがつて挑みかゝるやうに近づいてくる。このまゝ一息に眼を瞑ぢて鐵棒を握つてゐる兩手を離してしまへばそれまでだ——二十八年の生涯が海の底に消えてしまつたとしてもそれが何であらう、——莊嚴な自然の前に唯ひとり立つてゐる人間が、感情のクライマックスにおいて幻想の中に感ずる悲壯な死を彼もまた渺茫たる夜の海を前にして感じてゐた……。

だが、彼の頭の上には悠久の天地をまもるために星座が冷たくうかんでゐる。その蒼くすみとほつた光だけが、かすかに彼の行手に向つて新しい希望を投げかけるかのやうに小さく瞬いてゐるのである。そのとき眼鏡をかけた夫人の沈痛な顏が深い霧を通して見るやうに頭の中に現はれてきた。——すると、克彦は夫人の話が彼女の身の上に觸れかけたとき、慌てゝ言葉をそらしたときのあの暗鬱な表情を思ひうかべながら、氷のやうに冷たい大氣を吸ひこんだ。

9

船室へ歸つてくると、相客の肥つた相場師は狹いベットの上に窮屈さうに身體をくねらせて眠つてゐた。克彦も上着をぬぎ、カラアとネクタイをはづしたまゝでごろりと横になつたが、肉體はぐつたり疲れてゐるのに神經だけは冴えかへつて、頭の中は何時の間にかとりとめのない妄想で埋まつてゐ

た。新しい昂奮が彼を追駈けた。拂ひ退けようとすればするほど彼の心は慘めな回想の方へひきもどされる。——

眼を瞑ぢると、すべての想念の上に、唯、燦珠の肉體だけが蛇のやうにのたうち廻つてゐるのである。彼の魂を夢幻の底へ誘ひこむやうな新鮮な抱擁の記憶が、きれぎれに、しかし異常な强さをもつて彼の情感を驅りたてる。……

「燦珠！」

さう彼は無意識のうちに小さい聲で呼んでゐた。すると、彼女とわかれた最後の晩、豪雨の中を自動車で走つていつたとき、あの夢のやうな惱ましさが微風のやうに彼の胸を充しはじめた、燦珠の甘つたるい聲のひゞきが一つ〳〵彼の頭に滲みるやうにひろがり、自動車の彈動につれて彼女の肩が彼の腕の中に戰くやうに顫へてゐた。

——そんなに弱氣ぢやカルメンのスキートハートにはなれないことよ。

おゝ、そのとき燦珠の何氣なく言ひ捨てた言葉の切れ端しが、今や一つの暗示を含むものゝやうに新しく彼の頭の中に甦つてくるではないか！

十二時を告げるタイム・ベルが一つ、夜の寂寞をやぶつてひゞいてきた。その音は妄想に疲れた彼の頭の中をすべつて、絶え間なく船脚に殺到する夜の潮鳴りの中に消えていつた。

彼は少しうと〳〵としたが、しかし、すぐに眼が醒めた。だが一時半を告げる四點鐘が悲しい音を立てゝ鳴りひゞいたとき、彼は始めて淺い眠りに陷ちていつた―。

幻怪な夢は幾つとなく彼の眠りを襲つてきた。暗い沙漠のやうな平原をおそる〳〵模索する足どりで彼はしきりに何事かを聲高く叫びながら歩いてゆく。闇はたちまち彼の行手に黑い絶壁となつて聳えてゐた。その壁を何回となくよぢ登らうとしては彼はすぐにすべり落ちた。

眼が醒めると克彦は汗びつしよりになつて頭の上の鐵棒を兩手でぎつしりと握りしめてゐた。枕がところどころしめつてゐるのは夢の中で泣いた涙が滴り落ちたものであちう。――船窓にうつる海の色は早くも曉闇のほの明るさを漂はせてゐる。

夢の中で出來あがつた一聯の詩のやうな文句が彼の頭の中に雜然として交錯してゐた。その一節だけが寢醒めかゝつた意識の中にくつきりとうかんでゐた。

「青きは鯖の肌にして
黑きはひとの心なり。」

その不可解な文句を彼は小さく節をつけてうたつてみた。すると何かしら自分の心の奥にかくされた一つの微妙な感情に觸れるものがあつた。

彼がベットの上に起きあがつたとき、扉が靜かにあいて、同室の相場師が寢卷姿のまゝで楊子をくわえたまゝ入つてきた。

「お早う、――もう甲板を一廻りしてきましたよ。出てごらんなさい、ヂャンクが澤山うかんでゐますから」

その清々しさうな顏に輕く會釋しながら、彼も上着を引つかけて甲板へ出た。淺い霧が海面を掩ひ朝の光に照し出された波の色は茶褐色に變つて船はほの〴〵と兩側に泛ぶジャンクの帆をわけながら呉淞の沖を進んでゐる。――

10

朝食が濟むと、船客はもう荷物の準備を始めた。大きなトランクが幾つとなくボーイによつて運び出され、順序よく甲板の上に積み上げられた。その騷ぎの中を潛るやうにして克彦は舳の方へ廻つた前樓（フォーアキャスル）に近いところに事務服を着た一人の船員が立つてゐたが彼の姿を見ると崩れるやうに笑ひながら、

「ね、ほら、見えるでせう、向うの方に黑いものが」

と言つた。霧はすつかり晴れて朝の太陽が濁流の上に落ちてゐて蒼々と澄んでゐる海の色は最早何處にも見ることが出來なかつた。兩側には、くすんだやうな帆をあげたヂャンクが、その奇怪な姿を

水面に泛べ、帆の層を越えて、環をつくつて空間にぶら下つてゐる白い雲の下に親指ほどの黒い輪廓がたしかに見えるのである。

克彦の視線はその黒點に向つて集中した。船が近づくにつれて、それは人間の銅像のやうにも、あるひは何かの立札のやうにも見えてきた。船をとりまく周圍の風色は刻々に大きな變化を示した。高い堤防を越えて三角形の赤い屋根の塊が見え、右と左に同じほどの距離にひらけた海面を挾んで、兩岸に立ちならんだ楊柳の並木が見えた。

無數の舢板が筏舟のごとく連つて、少し離れた水路を横切つていつた。船は楊子江に入つたらしい——立札のやうに見えた輪廓は次第に大きくひろがつてきた。横長い海軍帽が見え、やがてその大きな胸に「仁丹」と書いた文字が細々と、しかし鮮かに彼の視線の中に溶けてきた。

彼のうしろには何時の間にか數人の船客が集まつてゐた。克彦は彼の周圍の群集の眼が一樣にその廣告塔に集まり、そして不思議な感激に顫へてゐるのを見た。——稻妻のやうに彼等の愛すべき鄕土が人々の記憶の中に甦つてきたのである。莊嚴な親しみをもつた彼等の日本が……。

克彦の心はそれを感じた。すると群集の感激が彼の胸に呪はしい親しさを反射した。煙のやうに朦朧とかすれた惱ましい思ひ出が再び彼の頭にからみついてきた。そのとき前樓に寄りそつてゐた船員が背ろをふり向いて叫びかけた。

「楊子江へ入つてあいつを見つけたときほどうれしいことはありませんね、だがわつしの考へぢやあんなものがあるから排日運動が起るんですね。何しろ外國の奴等が見たら眼ざわりでさあ。ごつちにもいゝといふわけにはゆきませんからね」

船は次第に速力をゆるめた。すると急に舷側にあたる風波が荒々しい音を立てはじめた。右岸に續いた高い堤防の上から、やがて、市街の一角が見えてきた。水路は次第にゆつくりと、その堤防に沿ひはじめた。青い上着を着た支那人が堤防の上を悠々として歩いてゐる。煉瓦を積んだ荷車が動いてゐる。

克彦はそわ〳〵した氣持になつて、下船の支度をするために船室に通ずる梯子を駈け下りた。しかし、彼が慌てゝ扉の把手に手をかけたとき不意にうしろから駈けよつてきた一人の男が苦しさうに息を吐きながら彼の肩をつかんだ。

「荒川——頼みがある、一寸入つてくれ！」

土色になつた北野一郎の顏が彼の肩の上で顫へてゐるのを見濟ますと彼を突き入れるやうにして扉を閉めた。

「大變なことになつたんだ！」

沈痛な聲で北野は扉に氣を配りながら言つた。

「如何したのだ？」

「いや、ゆつくり話をしてゐる暇がない。荒川、――これをね、當分預つてゐて貰ひたいんだ。內容は君のためにも言はない方がいゝと思ふ。だがね、君が何處の宿屋に泊つてゐてもきつと探し出して貰ひにゆくから、それ迄保管してゐてくれ」。

北野は上着の內ポケットの中から白い角封筒に入つた手紙風のものをとりだして、素早く克彥のポケットの中へねぢこみながら言つた。

「だが、一體君は何如したのだ？」

「危くなつたのだ、――おれの身邊が。どうも警戒がすつかり行屆いてゐるらしい、おれは敵の重圍の中に陷つてしまつた形だ。だがこれからだがね、面白い芝居は……」

やつと安心したやうに常の語調にかへつて、せゝら笑ふやうな微笑を唇の上にうかべたが、しかし直に緊張した顏になつて、

「ぢやあ賴むから、ね――左樣なら！」

深い響のある聲を殘して彼は逃げ去るやうに扉の外へ出ていつた。克彥は北野の殘した封筒――そ

の表には何の文字も書いてなかつた――をとり出し、素早くチョッキの內ポケットの中へ隱した。

小さなトランクと手提鞄とを持つて彼が梯子を登つたときには甲板の上は上陸の用意を整へた人たちで埋まつてゐた。船はもう動いてゐるのか、それとも動いてゐないのかまるでわからないほどの速さで進んでゐた。唯、しゆつ、しゆつと水をわけてゆく音だけが慌しくひゞいてきた。

すぐ下には郵船の碼頭が見え、其處には群集の頭が雪崩を打つて犇めいてゐた。船は除々に群集の渦に近づいた。太い綱が投げ下されて、その端しに結ばれた舳板が轉がるやうに水面をすべつていつた。克彥は妙に氣怯れのした自分の心を勵ますやうに下つ腹にぐつと力を入れ、眼を据ゑて群集を見下ろした。何百とも知れない顏の海のさころどころに短い棒を持つた支那巡捕の立つてゐるのが見える。やがて、綱を曳く苦力の掛け聲が、ざわめきの間から傳はつてきた。そして、船體はそのまゝぴつたりと碼頭に吸ひとられた。――

克彥はレールによりかゝつてならんでゐる船客の列の中から、しきりに自分を探してゐるらしい安達夫人の顏を見つけると急いでその方に近づいていつた。美和子は灰色の外套を着て、群集に向つてハンカチを振つてゐたが、克彥の姿を見つけると勢ひよく彼の腕に飛びついた。

「荒川さん、隨分探したのよ、あなたのお泊りになるの何處、――豐陽館？それとも萬歲館？」

「いや、未だはつきり決めてゐないんですがね……」

克彦が慌てゝ少女に答へようとしたとき、甲板のうしろの方で時ならぬざわめきが起つた。一人の船員が血相を變へて彼の前を走つていつた。行列はたちまち左右に崩れた。一瞬間、不吉な豫感が彼の頭をかすめた。

「何ですか　一體？」彼の横にゐた鳥打帽の紳士が、あとから駈つけてきた船員に問ひかけた。

「身投げです、――よくあるやつですよ、税關を胡魔化すためにね。」

若い船員は厚い唇に皮肉さうな微笑をうかべた。その聲を聞くと克彦の身體は射すくめられたやうに堅くなつた。そのとき猿のやうに舷梯をよぢて旅館の客引がどやどやと登つてきたのである。

第三章　夜霧の街

宿屋の名前の入つた帽子をかぶつた日本旅館の客引が、聲高く叫びながら船客の列をとりかこんだ克彦は急に眼界がぼうとかすんできた。今、船から川の中へ飛びこんだのは北野に相違ない、――だが彼はうしろを振返る勇氣もなかつた。ほとんど立つてゐることが出來ないほど彼の兩足は烈しく顫へてゐる。いけない、いけない……おればもつと落ちつかなければ。

彼は昏倒しさうになる自分をやつと支へながら、舷梯に近づかうとして犇き騷いでゐる人々の間を潜りぬけて左手の欄干の方へ出てゆくと、一人の客引が彼の前に立ちふさがつた。

「月明館で御座います、――いゝ部屋が御座いますから」

丈の低い唇の尖つた客引の男は何時の間にか彼の手からトランクを奪ふやうに取つて、流れるやうにすべつてゆく船客のあとから先に立つて舷梯を下り始めた。彼も默つてそのあとから蹤いていつた。どうでもいゝ、唯なるやうになれ、といふ氣持のほかには自分を支へてゐる力は何も無かつた。客引は稅關の役人の前に出ると愛想のいゝお仕儀をして彼のトランクを細長い臺の上に置いた。英國人らしい、でつぷりと肥つた髯の生えた役人はちらりと役の顏を見たが、そのまゝ一寸形式的にトランクの蓋をあけたゞけで、次の船客の方に視線を轉じてゐた。

税關の外へ出ると、客引は群がるやうに殺到してくる黄包車夫に「不要、不要」と、痛高い聲で怒鳴りつけながら、廣場の隅に屯してゐる馬車屋の集團に向つて手をあげた。二人乗りの馬車が一臺、列をめけて走つてきた。

二人が並んで乗ると馬車は勢ひよく駈出した。客引は勿體さうにポケットの中から吸ひかけの葉巻をとり出して火を點けながら。

「宿の馬車が何處へ行つたか見當らないものですからね、――こんな穢ないのでも我慢なすつて下さい」

と言つた。相手を見透したやうな狡猾さうな笑ひを尖つた唇の上に泛べながら。

「それで、旦那様は何か視察にでもいらつしやつたんで御座いますかね？」

「いや、一ト月ばかりぶら〳〵したいと思つてね」

さう言つてから克彦は少し不安になつた、この客引の容貌や、わざとらしい言葉から考へても、月明館といふ宿屋があまり上等でないといふことだけはわかる。だがしかし、馬車は早くも廣い電車通りを越えて、鈍い初冬の陽ざしの中を驀ぐらに走つてゐた。新しい街が次々に現はれた。やがて馬車は古めかしい西洋建築に挾まれたひそやかな通りへ出て、右側にならんだ細長い一棟の煉瓦建の高い建築の前で止まつた。その建物は四つの構へにわかれ、その一つ〳〵に同じやうな恰好の鐵柵にかこ

まれた門がついてゐた。

二つ目の家の三階の屋根から、青地に白く月明館と染ぬいた小さい看板がぶら下つてゐるのが見える。トランクを提げて入つてゆく客引のあとから克彦もその家の門を潜つたが土間は妙にうす暗く、それは宿屋といふよりもむしろ倉庫に近い感じだつた。克彦は靴のまゝ木造の階段を上つて、三階の街路に面した一間に通された。日本風の疊の敷いてある部屋だつた二聯窓が街に向つて開いてゐたがしかし、黒い斑紋のうき出した古い壁は外の光のために一層陰惨な感じをかき立てゝゐる。――この部屋へ入るとすぐに妙に不吉な豫感が彼の神經をかすめた。

2

上海へ着いて二日目の夜が來た古い倉庫のやうな月明館の三階で克彦が浅い眠りに入つたのは十時を過る頃だつた。夕食のときに飲んだ老酒が疲れた五體に痺れわたつて、そのまゝ女中の敷いていつた冷たい蒲團の中にもぐりこんだが、頭の芯には錐で刺されるやうな痛みを覺えた。――

さあ、これから愈々ひとりぼつちだぞ、克彦は自分に言ひ聞かせるやうにさう呟きながら火照つた額を抑へてゐたが、しかし、幻想はわけもなくひろがつて、燦珠の姿が現はれるかと思ふと船の上から行方を晦ました北野一郎の聲がありゝ〳〵とまだ耳の底に殘つてゐた。あの男は無事に逃げ終せた

であらうか？それにしても、冷たい楊子江の波を乗切つてゆく彼の姿は、人生の波濤を一つの目的に向つて突進してゆく人間を思はせるではないか。その姿は愛慾の惱みに溺れて身動きのとれなくなつてしまつた自分とくらべていかに美しく晴れやかであらう。さうだ、おれはこの灰色の壁をやぶつて新しく姿勢を立直さなければならない！

彼は悪靈にとり憑かれた人のやうに蒲團の上によろ〳〵と起きあがり、電燈のスヰッチをひねつて鞄の中から書簡箋をとり出し、ふたゝび腹這ひになつたまゝ顫へる手つきで萬年筆を走らせてゐた。

「珠よ、一度だけ戀人の資格をもつてかう呼びかけやう。これはわたしがあなたに送る最後の手紙だ。わたしはこの手紙とゝもにあなたから與へられた一切のものをあなたにお返しする。わたしはあなたから愛情の破片を貫ひたくないのだ、左樣なら永久に——。

彼はそれだけを一氣に書いた。それを封筒に收めて、宛名を書いてしまてから、やつと落ちついた氣持になつて靜かな眠りに入るために眼を瞑ぢた。窓の外には上海の夜の街が漸く深さを加へつゝあつた。遠くから潮のやうに押寄せてくる騷音を彼は痺れた頭に快よく聽きながら、うと〳〵と眠り始めた。

十一時を少し過ぎたころ、一つの靴音が曲りくねつた階段を上つてきた。靴音は彼の部屋の前でとまつた。

扉を輕くノックする音が聞えるその音を克彦はかすかなまどろみの中に聽いたのである。彼が慌てて起き直つてぢつと耳を澄ますと今度は前よりも強いノックとゝもに太い聲が聞えてきた。

「荒川さん！荒川さん！」

それは全く聽き馴れない聲だつた、克彦が低い聲で答へると、扉が大きくあいて黑い洋服を着た一人の男が立つてゐた。

「夜分、お寢み中のところをあがつて失禮ですが、わたしは領事館警察の者です」

その男は明快な口調で言つた。克彦がスヰッチをひねると、その男の鋭い視線が彼の顏に向つて注がれてゐた。

「荒川さん、——あなたですね、荒川さんは？」

その男は念を押すやうに言つてから、法律そのものゝやうな嚴然とした態度で、

「今から御面倒でも領事館まで御同道が願ひたいのです。」

「領事館まで？」

「さうです」

その聲は克彦の胸に反撥をよび起すよりも以上に一種の小氣味良さを注ぎ入れた。

「——だが一體何んの用です？」

そのとき克彦の頭の中を北野一郎の姿がよろめいて通つた。

3

「さあ、――それは、わたしからは何とも申上げられないですね、そのことは警察へ行つてからお話下さればわかるでせう、わたしには唯、あなたをお連れするだけの義務しか無いんですからね」

「だが何の事だかまるで唐突過ぎるぢやないですか、――それにこんなにおそくなつてから警察へ曳かれてゆくといふことは宿に對しても一寸へんですしね」

「いや」その男は大きくうなづいて見せながら自信に充ちた聲で言つた。

「そのことなら、あなたの御名譽だけは充分保證する考へです」

「さうですか、ぢやあ、兎に角行きませう」

さう答へるよりほかに仕方がなかつた。

彼は急いで洋服に着替へたが、事件が北野に關するものであることは寸分の疑ふ餘地もないらしい。

――一瞬間、彼はチョッキの内ポケットに隱してある手紙の處置について思ひ惑つた若し思ひがけない行掛りから身體檢査を受けるやうな場合があるとしたらいや、自分は唯、船中でめぐり遇つた一人の舊友から保管を托されたに過ぎないといふ理由によつて充分辯解は成立つとしても、しかし、若こ

の秘密書類？が官憲の手に渡つたとしたら、北野にとつては尠くとも死活に關する問題だといつていゝであらう。だが彼は何時の間にか外套を着て帽子をかぶつてゐた。

「どうもお待遠でした。ぢやあ」

かう言ひながら四邊を見廻したとき、ふと、眠る前に燦珠に宛てゝ書いた手紙が枕元に置いてあるのが眼についた。すると不意に一つの考へが彼の腦底に閃いたのである。彼は慌てゝそれを拾ひあげながら、何氣ない調子で、

「一寸待つて下さい、船の中で書いた手紙をついでに出してゆきますからね」

彼は悠然としてチョッキのポケットから白い角封筒をとり出しその表に走り書きの文字で「上海北四川路、新公園附近、安達洋行内安達美和子様」と書きそれから裏に宿屋の番地と名前とを書いてしまつてから二つの手紙を重ねて上着のポケットへ入れ、退儀さうに立ちあがつた。それは刑事の眼に少しの不審も感ぜしめなかつたほど自然な素振りの中に行はれた。

自動車が一臺門の外に待つてゐた。

夜更けの街には狹霧が流れてゐる。自動車は霜に氷つた大地をすべつて郵船碼頭の方角へ走つていつた。

「寒いのに御迷惑ですね、――しかし、用件が濟めば直ぐにお送りいたしますから」

刑事は親しみと敬意とのこもつた氣毒さうな眼差を彼の方へ向けた。自動車の窓にうつる霧の街は美しく、克彦は薄絹に描かれた畫繪のやうにぼかし出された、その異國的な風景に見惚れながら、眼の前に一つの危難が横はつてゐるといふ感じよりも。むしろ新しい不安の中に突進してゆくことに一種の生甲斐をすら感じてゐた。

自動車が停ると刑事は彼を導くために入口の階段を上つていつた。そして奥まつた小さな部屋に通してから輕く會釋をして出ていつた。そこへ、入れ替はりに入つてきたのは頰骨の出た四十恰好の一癖ありさうな、別の「高等視察」だつた。

4

丸い卓子を挾み、「高等視察」と克彦とは向ひ合つて腰をかけてゐた。

「それでどすね、北野一郎といふ共産黨員が變裝して上海へやつてくるといふ通知が入つてゐるのですが、その人物らしい嫌疑者が偶然にもあなたのお知り合ひだといふことがわかつたのです。その男はN丸が准山碼頭に着いたとき海に飛びこんで姿を晦ましたといふわけですが直ぐに捕縛しましたそれでどすね、つまりその嫌疑者とあなたとの人事關係をお訊ねしたいんです。豫め申上ぎて置きますがね、あなたには絶對に御迷惑はかけませんから眞實のことを仰しやつて下さい。さうでないと此方でも、したくない詮索まであなたに對してしなければならなくなりますからな」

「高等視察」の眼は執拗に克彦の顏に注がれてゐるのであつた。

「それで、その男の名前は何と言ふのですか？」

「自分では高岡といふ行商人で密輸入のためにやつて來たんだと申立てゝゐるんですがね」

「はゝあ、――それでやつと思ひ出しました。N丸の三等室にゐた男ですね、あの男ならわたしの小學校時代の友人でしてね」

冷汗が脇の下ににぢみ出てきたそれを一生懸命に堪えながら克彦は虚心らしい笑ひを泛べた。

「高岡何といふ名前ですかな、そのあなたの友人は？」

相手の視線は益々冷やかに彼を追窮してきた。――

「それは、はつきり思ひ出せませんね、何しろ隨分古い話ですからね――それに唯同窓だつたといふ以外にはもちろん何の交渉もないし……僕との間には人事關係などといふものはまるでありませんよ」

しかし、克彦の顏には少しづゝ隱し了せない狼狽が現はれてきた。一瞬間、彼は「高等視察」の鼻先が顫へるやうに動くのを見て、しまつた！と思つた。それはある種類の人間が、自分の計畫の當つたときの得意さを抑へて、ふゝんとせせら笑ふときの、あの一癖ある表情に似てゐたから。

「すると、高岡といふのは本名なんですね、それで諱いやうですがその男とあなたとの御關係は唯小學時代の同窓生であるといふだけなんですね」

「さうです、――だが、何かその男のことについて僕が疑はれなければならない理由があるんですか？」

「理由？」

「高等視察」は改まつた聲でかう言つてから、到頭抑へてゐた冷嘲を滿面に泛べた。

「理由といふやつは何處にでも探せばあるものですよ、――若あなたが如何しても理由を知りたいと仰しやるならお眼に掛ませう」

「高等視察は意味あり氣な言葉を殘して出ていつた　だが、しかし、歸つて來たのは十分と經たない間だつた。扉があくと彼のうしろに數人の警官に護られた丈の低い男が立つてゐる。それは言ふまでもなく北野一郎であつた。

「この男があなたの小學時代の友人ですね？」

「高等視察」は教壇に立つた教師が生徒に向つて質問するやうな態度で言つた。

「えゝ」

「しかしですね、この男の說明によると、あなたとこの男とは唯、船の中で知り合つたゞけだといふことですが……」

言葉の上の駈引よりも、むしろ二人の素振りの中から何事かを感付かうとする意圖があり〳〵と見えた。

5

北野の顏はむくんだやうに膨れ右の頰から首にかけて、擦り傷のあとが未だ血の色も生々しくうかんでゐた。彼は高等視察の言葉の終るのを待つて、傲然として前へ進み出てきた。

「――僕が出鱈目を言つたんだこの人に迷惑が掛つてはいけないと思つたから。だが僕の掏留はもう言わ渡されてゐるのにどうしてこの人を呼び出すのです」

「何を君は言ふのか――君に訊ねてゐるんぢやあない、默つてゐる方が君の得だぞ、明日日本から報告が來れば一切のことが解るんだから……」

高等視察は傍に立つてゐた警官に眼くばせした。興奮のために蒼ざめた北野の顏は電燈のほ影の中に顫へてゐた。彼は唇を嚙みしめてぢつと卓子の上に視線を落してゐたが。しかし彼の兩側に立つた正服巡査の逞しい腕は兩方から挾むやうに彼の肩を抑へつけてゐた

「ぢやあ、これで、左樣なら――久しぶりで會つてこんだ御迷惑をかけましたね」

北野は巡査に引立てられてゆくとき、異常な情熱に充ちた眼で克彦の顏を見詰めた。彼等の靴音が部屋の外に消えていつたとき高等視察は腕時計を見ながら——

「もう十二時ですね、いやごうも失禮しました。兎に角、今夜はお歸り下さい、あなたの名譽に對してあなたのお言葉を信ずることにしませう。しかしですね、正直に言へば、あの男が共産黨員の北野であるか、それとも行商人の高岡であるかといふこと位の見當はついてゐるのです。われ〳〵だつてこれで飯を食つてゐるんですからね。だから、調査がもつと進んできたら、あふたに御迷惑をかけるやうなことが出來るかも知れませんが、兎に角、今夜はお歸り下さい」

「しかし、夜中の喚問は閉口しますよ……今夜のことなぞはまるで要領をつかむことが出來ませんからね。上海へ着いた早々嚇かされてしまつて」

克彦は少し捨鉢な調子になつてさう言つた。

「要領〳〵さう言はれると、こつちも態度を明瞭しなければならなくなりますね、僕はね、君の名譽を重んじてお歸りなさいと言つただけですよ、それが惡いといふことになれば無理にお歸りにならなくとも良いです」

高等視察の聲の調子はがらりと一變してゐた。

「いや、唯、迷惑だと言つたゞけです」

「餘計なことは言はない方がいゝよ。必要があれば何時でも喚問するんだからね、兎に角、今夜は歸り給へ！」

高等視察は威丈高な表情をして痛癖らしい眉をぴりゝと顫はせた。克彦の顏には烈しい憎惡がうかんだが、彼はかすかに唇を動かしたゞけで、荒々しく扉をあけて出ていつた。背後から呼び止めるであらう高等視察の聲を心の底に豫期しながら。

だが、背後には何の聲も聞こえなかつた。入口のところには先刻の刑事が待つてゐた。

「ぢやあ、お送りしますから」さう言つて輕く頭を下げたのをふりむきもしないで、

「いや、結構です。僕は歩いて行きますから」

彼は階段を駈下りて、次第に濃くなつてゆく。夜霧の中を何處といふ方角も見定めずに歩きだした。

6

克彦は霧の中を歩きつゞけた。何かしら眼に見えない一つの力に向つて身體ぐるみぶつかつてゆきたいやうな衝動が胸の底に湧き起つてゐた。冷たい夜風が霧の流れを吹き散らすと、きれ〳〵に高い建物の輪廓だけが、ぼうと彼の視野の中にひろがつてきたが、しかし新しい霧の流れはすぐに行手を塞いでしまつた。

彼の身體はともすると中心を失つて前後にぐらつきかゝる。今や彼の頭は何を考えることも出來ず方角も最早どつちに向つてどう歩いてゐるのかまるでわからなくなつた。ときぐ、牛の吼えるやうな汽笛の音がすぐ間近に起つたそれから岸に碎ける川波の音が……。

かうやつて歩いてゐるうちに、いづれ見廻りの巡捕か誰かに會ふだらう。そしたら道を訊いて歸ればいゝのだ。若誰にも會はなかつたら、――そのときは歩きつゞけてゐるうちにいずれ夜が明けるだらう。

寒い川風がとつと正面から吹きつけてきた。街並が途切れたらしい。波の音が足元の大地を搖ぶつてひゞいてきた。彼は霧の中で透かすやうにして時計を見た二時である。

アーク燈が二つ白々と霧の夜空に映つてゐる。それで、彼は眼の前に橋があることを感じた。その前で彼は思はず立ちどまつてゐた身に迫る危險を冷々とした大氣の中に感じたからである。

その時、彼の耳は、深い寂寞の中から近づいてくる靴音を聞いたのだそのよろめくやうな靴音は正面の橋を渡つてくるらしい。ふと、彼は夜中の支那街を徘徊してゐる强盗の姿を、想像すると兩足がわな〳〵と慄へてきた。

このまゝ引つ返さうか、――いや、さうすると自分のゐることが、かえつてはつきりと相手に見定められるに相違ない。それよりも、此方の方から勇敢に前に向つて歩いて行かうか?。

克彦が、しきりに逡巡してゐるうちに靴音は早くも彼の眼の前に迫つてきた。

霧の中から一人の男の姿がぬつと現はれたのである。――克彦が驚くよりも以上に、棒のやうに道のまん中に立つてゐる彼の姿を認めた先方の男はもつと驚いたらしい。慌てゝうしろに身を引いた。だが、その男は、もう一度たしかめるやうに彼の姿を見てから今度はゆつくりと近づいてきた。

「日本人ですね、君?」

それは思ひがけない穏かな聲だつた。マドロスパイプをくわえた痩せた一人の男が彼の前に立つてゐるのだ。

「さうです」

克彦はその男の酒臭い息を感じながら答へた。この寒空の下に外套も着ないで貧相な姿をしたその男の肩の上に、ぐる〳〵に卷きつけた茶色の襟卷の毛絲の房が昧氣なくゆれてゐた。

「――びつくりしたね、こんなところに銅像のやうに立つてゐるんだから」

その乾からびた身體つきにも似合はず、その男はふくらみのある聲で言つた。

「いや、道がわからなくなつたんです、宿屋へ歸る道が……。僕は文路へ行くんですがね如何行つたらいゝんでせう?」

「文路――?」

その男は、さう言ひかけて、もう一度彼の顏を見上げてから笑ひだした。

「文路の何處です？」

「月明館といふ宿屋ですが」

「ほう――ぢやあ僕に蹤いてゐらつしやい、實はね、僕もその月明館へ歸るところですよ――」

7

克彥はその男とならんで川沿ひの道を右に進んでいつた。

「隨分、寒い晩ですね、――君は上海へ來て間が無いんですね？」

その男が正面を向いたまゝぞんざいな調子で問ひかけた。

「今朝、着いたばかりです」

「それにこんな夜更けまで、何をしてゐたんです。今頃は一番危險な時刻ですよ、――僕はまたあんなところに突立つてゐるものだから的切り辻强盜だと思つてね」

彼は氣忙しさうに笑ひながら

「しかし、辻强盜といふやつは辻のまん中に立つてはゐないからね――」

敲きつけるやうに言つて、べつべつと唾を吐いた。その聲の調子と、妙に人を喰つたやうな態度が

克彥の頭に思ひがけなくも南里の姿を思ひ起させたのである。年齡は、ずつと老けては見えるけれども彼より二つか三つ多い位のものであらう。――この男の正體は、明瞭りつかむことは出來ないが、しかし、いかゞはしい人間で無いといふだけはわかる。その感じが克彥の心に、ある安定を與へた。

「あなたはもう上海に長くゐるんですか？」

「いや、長いといふ程でもありませんが、さあ、それでも、もう三年になりますかね」

「それで――失禮ですが、何をしてゐらつしやるんですか？」

「さあ、それがです。わからないんですよ。――それがわかればね、こんな恰好をしてぶらついてゐるまんよ」

おどけた調子で言つたが、聲の底には淋々として哀感が潜んでゐた。克彥は、ます〳〵南里に似てゐるな、といふ感じを强くしながら……

「ぢやあ、月明館にはもうずつとゐらつしやるんですか？」

「えゝそれも長いと言へば長いですね。だが、泊つてゐるといふよりも飼はれてゐると言つた方が。――四階の屋根裏で始終追ひ立てを喰ひながら殘飯を貰つてゐるんですからね。人間といふよりも先づ犬ですよ。尤も最初の二ヶ月ばかりは、君と同じやうなお客樣でしたがね」

零落した人間が世間に對して肩をそびやかすときによくやる、妙に感情を誇張した態度で　彼は笑

ひながら酒臭い息を吐いた。

「すると、あなたは、つまり放浪者といふわけですね」

「如何いたしまして、そんな立派な商賈ちや御座いませんよ。自分を放浪者だと名乗つてゐる人たちは一つの哲學を持つてゐるわけでせう。ところが僕にはそんなものは無いからね、——若僕の生活が一種の放浪生活だとすれば僕も放浪者といふ事になるでせうがね。しかし僕は決してそんな生活を望んではゐないんですよ。」

この男の言葉は一々逆説的トリックによつて固められてゐた。だが、克彦の頭には、だん〳〵此男の正體がはつきりしてきた。尠くとも輪廓だけは、この男の出鱈目に近い口説の中からひとりでに現はれてきたのだ。最初に頭が見えそれから肩が見え、やがて全身がうかびあがるといつた風に。……

二人は何時の間にか二つ目の街角を曲つてゐた。霧は少しづゝうすれてはゐたが、それだけに大氣は前よりも冷たくしめつぽくなつてゐた。その街角にある赤いポストがふと克彦の心に上着のポケットの中へ入れたまゝになつてゐる二通の手紙を思ひ出させた。——何の危難もうけずにやつと無事に濟んだといふ感じが、始めて彼をほつとさせたのである。そこで彼はもう一度右手をポケットの中へ突つ込んでみた。

克彦は未だ切手を貼つてない二通の手紙をそつと手に觸れてみた——どつちが燦珠への手紙であるかといふことは、もちろんわからないにしても、しかし、今自分の指が燦珠への絶縁狀に觸れてゐるといふことが何故ともなく彼の心をけつそりとした感じに導くのであつた。

だが彼はともすれば、頭の中にうかんでくる燦珠の姿を、無理にも美和子の幻像によつて拂ひ退けやうとしてゐる自分を感じてゐた。美和子——あの若鮎のやうに生々とした美和子と自分との關係は唯、人生のある瞬間を船の上で共に過したといふだけのことであるとしても、そしてもちろんあの少女に對する彼の感情は夢にも戀愛と名づくべき性質のものではないとしても、しかし、あの清楚な明るい姿に爽かな思慕を寄せてゐなかつたとは言えないであらう。——愛慾の波の中に溺れかゝつてゐる人間にとつて美和子は正しく一本の藁であつた。克彦は思ひ切つて二通の手紙をポケットの中からとりだすと、警官を胡魔化すために書いた美和子への封書だけをふたゝび元のポケットへ入れて、燦珠宛の手紙を素早くポストの中へ投げ入れた。霧の中に冷たく氷つた彼の指の先が小さく顫へてゐるのが見えた。

そのとき、肩から銃をぶら下げた一人の印度巡捕が彼等と擦れ違つた。その大きな眼が彼等に向つ

てきらりと輝いたが、しかし、それだけで行き過ぎていつてしまつた。

「——君も危いときにやつてきましたね、今に上海は兵禍の巷になるかも知れませんよ」

その男は、ぶつきらぼうな調子で言つてから寒さうにくさめをした。

「するとよほど危險が迫つてゐるわけですね？」

「いや決して、それほどぢやありませんが、先づせいぜい月明館の三階のガラス窓に砲彈の響きが傳はるくらいのものでせうね」

その男は輕くうけ流してから、急に彼の顏を見上げた。

「——そら、もう來ましたよ、如何です。ついでに一寸僕の部屋を見物して行きませんか？」

うすれてゆく霧の中に、月明館と書いた看板の文字が空間にゆれてゐた。鐵柵にかこまれた門はすつかり閉つてゐたが、その男は横の鐵棒に片足をかけ馴れた腰つきで輕く飛び越えた。——克彦も同じやうにして門を乘り越えた。

ベルを押すと、しばらく經つてから支那人のボーイが眠さうな顏をして扉の間から顏を出した。

「さあ行きませう！」その男は階段の方へ克彦を遣りすごしてから、一塊の鋼幣をボーイの手につかませて、

「濟まないがね、料理場でこつそり紅茶を沸かしてくれよ」

と言つた。支那ボーイはさういふことにはすつかり馴れてゐるらしく、につこりと笑つて見せた。うね〳〵とつゞく長い階段を上つてゆく二人の忍びやかな靴音がやがて森閑として建物の古い壁に反響した。

四階の廊下には電燈が點いてゐないので眞つ暗だつた　それにいかにも天井裏らしい濕つたかびの臭がぷうんと強く鼻に來た。その暗い廊下を突當つたところで、その男は大きな音をさせて扉をあけた。

「電燈が無いからね、——かはりに蠟燭をつけるから待つてくれたまへ！」

さう言つて手さぐりに前に進んでいつたがやがてマッチを擦る音が聞えた。

「さあ、入りたまへ」

青白い蠟燭の光がゆら〳〵と無氣味な部屋の中を照しはじめたのである。

9

その小さな部屋はたぶん物置か何かのためにつくられたものであらう、正面に空氣抜きと思はれるほどの小さな窓が一つあるだけで黑く煤けた壁はところどころ剝げ落ちてゐるし、しめやかなかび臭いにほひは廊下にゐたときよりも一層強く彼の鼻に迫つてくるのである。

克彦の眼の前には蠟燭の焔が蒼白く搖れてゐた。そのたよりない明りに照しだされた陰慘な部屋の中には、右側の壁とすれずれに古ぼけたカンプベットが一つ置いてあるがそのほかには脚の高い小さなテーブルと、椅子が一脚あるだけで、ほかにはこの男の荷物と思はれさうなものは何もなかつた。

「さあ、どうぞ、――その椅子におかけ下さい。椅子といつたところでそいつは腰かけるためにあるんぢやないんです。だから、なるたけ身體を輕くするやうにして、……つまり、つまりあなたのために椅子があるわけぢやなくて、椅子のためにあなたがあるわけですからね」

彼は茫然としてゐる克彦の顏の上に輕快な笑ひを浴びせかけて、自分だけはカンプベットの端しに腰をおろした。

克彦は椅子の背を握つて二三度前後にゆすぶつてゐたが、思はず笑ひだした。

「なるほど、これは大變ですね、折角ですが僕は立つてゐませう、命懸けで椅子に腰かけなければならんといふわけもありせんから」

「ぢやあ、このカンプベットへならんで腰かけて貰ひませうか、――ところが、こいつがまた怪しいんで、何しろ後脚が壞れてゐますから、二人ならんだら忽ち潰れてしまひますよ」

彼は兩腕に力を入れてカンプベットをぎしぎし鳴らせて見せた。

「――まるで化物屋敷へ入つたやうですね、仕方がない、ぢやあ僕も椅子と運命を共にしませう」

克彦も何か屈托のない輕口を言ひたいほどの心のたるみを感じてきた。

「さうして貰ひたいね、――なんぢ等、脚の壞れたるカンプベッドを知らずや……か、そは人生のごとく二人の愛人に席を與へざるなり、なんてバイブルにでもありさうぢやないか。いや全く冗談ぢやないね。ところで、今夜の二人の運命を記念するために、君に一杯の酒を獻じやう」

彼はついと腰を屈めた。そしてベッドの下からとりだしたのは赤茶けた素燒の壺と大きなコップであつた、それを、テーブルの上に大事さうに置いた。

「切角ですが、僕はそんなに強いのは駄目です」

「飲めないですか？、ぢやあ、僕が代りに頂戴しませう」

彼は素早く壺の栓を拔いてゐた透明な液體がコップの中にとろとろと流れはじめると、不意に強い高粱酒の臭がむかつくやうに漂つてきた。

「それよりも、如何です、お互ひに紹介し合ひませう、――僕は荒川克彦といふ者です」

「荒川君と仰しやるんですか、いやどうも失禮、ところで僕はこの紹介といふことが大嫌ひでね、何も始めて會つたからといつて武者修業のやうに名乘り合はなければならんといふ法は無いでせう。それに自分の名前なぞは出來るならば一日も早く忘れてしまひたいと思つてゐるんですからね。――しかし、君が堂々と名乘りを上げて來たんだから仕方がない、それほど名前といふものが君にとつて

必要ならば僕は當分、黒上晗介といふことにして置きませう」

さう言ひながら、ぐつと高粱酒のコップをかたむけた。そのとき蠟燭の火が慌しくはためいて左手の壁を照した。その壁のまん中から仕切る柱のそばに、思ひがけなくも小さな寫眞の貼つけてあるのが、さながら壁の汚點かと思はれるほどうすくぼやけて見えた。それがたしかに女の寫眞であることを見定めると克彦の視線は次第にその方へ吸ひよせられていつた。

10

「おや、——これは？」

克彦は思はず頓狂な聲をあげた。彼の顏は眞蒼になり、身體が妙に顫えてきた、そしてだんぐ〜壁の方へ近づいていつた。

「如何かしたんですか？」

「いや、——何だか口を切るのが恐ろしい氣がするんです、僕とあなたとがかうやつて向ひ合つて話をしてゐるけれども、しかし實際は、僕でもなければあなたでもないといふ氣が……」

「といふのは？」

「それが、口を切るのが恐ろしいのです」

「すると、——それは、君の話が何か僕の過去の秘密にでも關係してゐるといふことですか？」

黒上の眼はそのとき異様な輝きを帶びてきた。だが、しかし彼はすぐに和いだ表情にかへつて、

「大丈夫です。どんなものでも、多分今の僕を脅かす力は無いでせう。——さあ、君の言葉を一息に吐き出して下さい！」

「いや、そんな大したことぢやないんです。唯、僕のやうな宿命論者にとつてはすべてのことが恐怖の對象になるといふことを考へて下さい。——僕はね、自分の戀人が部屋の中でほかの男から接吻を強要せられてゐるのを見たゞけで、もう人生に絶望を感ずるほどの男ですからね」

克彦は彼の身邊に犇々と迫つてくる重苦しいものを感じた。すると彼の心は急に緊張してきたのである。

しかし蠟燭は既に半、ゆがみかゝつていた。小さな焰のゆらめくごとに壁の上の寫眞の輪廓は次第にしつとりと彼の瞳の中にひろがつてきた。——

それは少女の半身を寫したものであつたが、豐にたるんだ頰の輪廓、ゆるやかに肩を這ふ下げ髪、——それに鼻から唇にかけての線のあとが、あまりにも燦珠の横顏に似てゐるではないか！だがしかし、この部屋の中に如何して燦珠の寫眞のあるわけがあらう。

克彦の視線はその寫眞に定着したまゝ離れなかつた、黒上は冷然として克彦の顏を見詰めてゐたが

急に、にや〳〵笑ひながら立ちあがつた。

「君は宿命論者ですつて、――ぢや一つ僕の運命について判斷を與えて貰はうか、そこにある寫眞の女が僕の少年時代からの戀人ですよ、僕に殘された、たつた一つの美しい記憶です。この女はクリスチャンでして、それに素晴らしいロマンチストと來て居ましたからね、だから、もちろん戀愛を語るには絶好の相手でした、――この女とわかれてもう四年になりますが、しかし、僕にとつては永遠の戀人です。僕は夜になるとこの女の寫眞と話をするんですからね、つまりこの部屋は僕の幻想の拷問室といふわけです」

「ぢやあ、その人はもう生きてはゐないんですね？」

「いや、どうして、――恐らく立派に生きてゐるでせう、さあ今年はもう二十四五になりますがねきつと隨分華やかな生活をしてゐるでせう。だが、僕はふたゝびこの女に會はうとは思ひませんね。會つたところで昔の戀人の姿を見出すことは出來ないにきまつてゐるし、それに第一僕は永遠の偶像をぶち壞したくないですからな」

きれ〴〵の言葉で喋舌りながらテーブルのぐるりを廻つてゐる黑上のひよろ長い影がうすく壁の上を這つてゐた。克彥は默つて寫眞の方へ近づいていつた。それは細い枠をとつてべつたりと壁に貼りつけられたものであつたが、このうす薄い部屋の中に女の横顏だけは生々とうかびあがつてゐるでは

ないか彼はぢつと視線を凝らすやうにして眺めてゐたが不意にあわたゞしく黑上の方をふりかへつて

「それで、この女は今、何をしてゐるんですか？」

その痛高い聲は、制しきれない心の動搖をかくしてゐた。

「さあ、それは僕にもわからないよ、だが、多分 女優になつてゐるでせう、――芝居の好きな女が女優になるのは當然でせうから、そして今に天下の人氣をあつめるでせう、それも今の僕には關りのないことですがね、唯僕は、數年前の彼女の相手役を勤めた人生の大根役者であつたといふ記憶に誇を感じてゐるだけでしてね」

黑上は皮肉さうに 唇 をゆがめた。克彥の顏は一瞬間、眞つ蒼になつた。しかし、黑上はその表情の變化には少しも氣付かないらしくゆつたりとした調子で、

「――こんな話は止しませう、それよりも如何です、近いうちに僕と一緒に賭博場へ行きませんか？賭博ほどわれ〴〵の人生觀をひつくりかへすものはありませんよ、――賭博場は上海の心臟ですからね、佛租界にある「シーコ」の賭博場で一つ君の全財産を賭けてみたら如何です？」

「それも面白いですね、しかし、それよりも僕は前の話を聽きたいのです――それで、この女とあ

なたとは如何いふわけで別れてしまつたんですか？」

「それは御免蒙りたいな――君の興味のために僕の（悲戀の曲）を提供する理由は先づ無いからね」

「いや、ところが、その理由が僕の方には充分あるんです――もつとはつきり言へばですね」

克彥はかう言ひかけて、言葉を落付かせるために唾液を嚥みながら、

「この寫眞は僕の知つてゐる女に似てゐるんです」

「なるほど、そして、その女は女優といふわけでせう、……いやこれは面白くなつてきた。この少女に似てゐる女はおそらく世の中に二人とはゐますまいからね、――すると、今度は僕の方から問ひかけなければならなくなつてきましたよ」

「失禮ですが」と、克彥は、もう我慢がしきれなくなつたらしくきつぱりとした口調で言つた。

「もつとはつきり言はせて下さい。この女はね、月岡燦珠といふ女優に似てゐるんです。いや、似てゐるといふよりもそのものだと言つた方が早いでせう」

「それで、その女は？」

「僕の戀人でした――」

「おや、おや」

黑上はテーブルの上の高粱酒をぐつと呷つた。

「そこで、つまり君の宿命論が立證されるわけですね。すると、君はまるで僕の過去を發くために現はれたやうなものですね、だが、この話はこの邊で打切らうぢやないですか」

黑上は新しい蠟燭に火をうつしながら靜かな聲で言つたが、蠟燭を握つた左手は妙に顫へてゐた。そこへ忍びやかに階段を上つてくるスリッパの音が聞えて、ノックもなしに輕く扉をあけて入つてきたのは、先刻宿の玄關に立つてゐた支那ボーイだつた。彼は小さな盆の上に紅茶の茶碗を大事さうにのせてゐた。ボーイはそれをテーブルの上に置くと、そのまゝ物も言はないで出ていつてしまつた。

「さあ、もう夜が明けますからね、そろ〳〵御歸館を願はうか、……それで近いうちに如何です、ほんたうに賭博場へ行きませんか？」

「えゝ、是非、だが、僕は一文無しになりさうですね」

「いや、そのときは、君にこの部屋を提供するよ、永遠の偶像と一緒にね、そして僕はいよ〳〵屋根の上に出るよ――」

黑上の笑ひ聲が高く天井にひびいた。それから彼は正面の窓に近づいて、小さな鎧戸を外した。黎明の大氣とともに蒼白い朝の光が流れてきた。

第四章

花園橋（ガーデンブリッヂ）の灯

雑踏の上に流れ散る明るい電燈の光が月明館の三階の街に向つてひらかれた窓によりかゝつて居る荒川克彦の痩せた顔の上に深い陰影を刻んで居た。

宿の向ひ側になつて居る煙草屋の、屋根からぶら下がつた大きな厚い看板をかけにした店頭の土間には低いテーブルが据えられて、そのぐるりにあつまつた一家の人たちの間に支那式の食事が始まつて居るところである。

かういふ情景は旅びとの胸に新しい愁ひを喚び起すものだ。うす曇つた空の下には高い建築が削り立つた斷崖のやうにそびえたち、それ等の建築の層の上に唯ひとつ、嶄然として教會堂の、少しゆがみかゝつた圓塔が宵闇を貫いて空につゞいてゐるが、しかし、見よ、黄昏の大氣の中に、うすくぼやけて見えるその赤茶けた色ほどに深い佗しさを湛えてゐるものがあらうか。——克彦がこの窓に凭れかかつて、しつとりと空の闇の中に沈んでゆくこの圓塔を眺めながら涯知らぬ哀愁の中に夕ぐれの數十分を過ごす習慣がついてから、日は慌しく流れ去つてゐた。……

同じ屋根の下に住んでゐる、あの不思議な放浪者、黒上聆介とは一週間近く經つのに一度も會ふ機會がなかつた。しかし、上海の生活は一日ごとに克彦の心を、夢ともつかず、現ともつかぬ物狂はし

さによつて充しはじめた。

四馬路の夜――美しい支那の賣笑婦たちが縫靴の音も輕く、ほのぼのと脂粉のかほりを漂はせて、羽蟲のごとく忍びよつてくる艶めかしい露地の空氣は、わけもなく彼の心を古めかしい陶醉に誘ひこむのであつたが、しかし共同公園の海に沿つたベンチに腰かけて黑いガウンに身を包んだロシアの淫賣婦のむれに彼は涙を流した。かつては古き帝政の下に人生の不幸をよそに、戀と夢を追うて暮してきたであらうところの昔のおもひでを深く輝やいた瞳の中に宿して、行きすがる人々の上に流離の悲しみを湛へて佗しくも媚びを賣つてゐる哀れな姿に――。

それから、街角に鳴る胡弓の哀音、――兩足をもぎとられて樽のごとく街から街をころがりながらなほ一塊のパンを求めるために聲の嗄れるまで叫びつゞけてゐる乞食のむれ！

克彦の頭の中には、さまゞ〜な人間の姿がちやうど古き寺院のそれも半、色を失つてしまつた壁畫でも見るやうに怪しいかたちとなつて現はれてくるのである。

しかし、街はすつかり夜になつた。黃包車かわだちの音がそろそろと窓の下を通つてゆく、遠い電車通りには、雜踏を整理するために赤と白に染わけた小さな棒を振り廻してゐる印度巡捕の大きな身體が自働人形のやうに階調をつくつてうごいてゐた。

「……荒川君、ゐますか」

そのとき、低い聲が不意に扉の外で聞こえた。彼が返辭をするよりも早く扉をあけて入つてきたのは一週間前にわかれたきりの、そして、そのときと寸分違はない身裝をした黑上聆介だつた。

「今夜は、少しばかり景氣が良いから一つ君を僕の情人のところへ案内しようと思つてね」

黑上は上機嫌だつた。彼はもう何處かで一杯ひつかけてきたらしい。酒臭いにほひを快活な言葉とともに吐き出した。

「情人――？そんなものがあるんですか、あなたに、――だが、あなたの情人では高が知れてゐますね。それよりも如何です、今夜は約束どほり僕を賭博場へ連れていつてくれませんか？」

「それもいゝな、お望みならばね、それにしても街を少し歩いて行かう！」

黑上はポケットをさぐつて葉卷を一本とりだした。彼がマッチを擦らうとしたとき、支那ボーイが克彦に宛てた一通の手紙を持つて入つてきた。黑上はその水色の封筒を素早く自分の手でうけとりながら、――

「これは――僕の觀るところによれば如何も立派な艶書らしいぜ、さういふにほひがするね。江南七日既に峨眉を得たりといふやつだ……何しろおそろしい速力ですな」

黑上はほんと一つ克彦の肩を敲いた。

「いや、そんな」

しかし、克彦にとつても、自分のところへ手紙がくるといふことは全く思ひがけないことにちがひなかつた。

2

封筒の宛名はたしかに細い女文字で書かれたものだつた。裏をひつくり返すと、日附の下にM、Aといふ二字が大きくうかんでゐる。M・A、M・A、――彼は頭の中で幾度びとなく繰返してゐたが急に思ひ出したやうな大聲で笑ひだした。

「なるほど、これも　あなたの筆法で言へば僕の情人に類するものかも知れませんね、さァこの艶書を一つ公開しませう。底を割つてしまへば、船の中で知合になつた少女ですよ、――」

克彦は封を切つて、きちんと折疊んである書簡箋を二人の間にひろげながら言つた。

荒川先生。到頭、見つけてしまひましたのよ。明日電話をおかけしますわ、わたし昨夜、オリンピック、シャアタへ行つて先生に素敵によく似てゐる俳優を見て來たのよ、誰だかおわかりになる？この二三日は先生を探すのにまるで探偵小説そつくりでしたの。でも名探偵は到頭惡漢を捕縛しました。御免なさいね。それでは、さよなら

美和子

荒川先生おんもとへ

手紙を挾んでゐた二人の顔がばつたり會ふと、流石に克彦は妙なきまりわるさを覺えたらしい。といふのは、あの少女から送られた手紙が、このやうな馴々しい文字によつて綴られてゐやうとは夢にも想像しなかつたから。――

しかし、黑上の顏には持前の皮肉な冷嘲よりも、むしろおどろきの色がうかんだ。

「おい、おい、かうなると、荒川先生とこの少女との關係を想像するためにわざ〳〵僕の筆法を借りる必要もあるまいね。この手紙の中に戀愛の出發を感じない奴があつたら楊子江へでもはまつて死ぬ方がいゝからな。如何です、荒川先生、君の宿命論でゆくとこの素晴らしい幸福はいかに解釋すべきものでせうか？」

「冗談ぢやないですよ、僕はそんなことに何の關りも持つてゐませんよ、第一相手は無邪氣な少女です。あんな無邪氣な少女に戀愛があるなんて、……」

克彦は苦しさうに辯解しながらも、胸の底に殘滓のやうな不快なものが溜つてしまつたやうな氣がした。――彼には黑上の顏が急に堪へ難く下品に見えてきた。そして、彼の言葉によつて、自分の心の底に秘めてゐた非常に美しく尊嚴なものがすつかり傷つけられてしまつたといふ氣がしてきた。その感じはすぐ黑上に反射したらしかつた。

「何だか感情を害してしまつたやうだね、だが、僕は君の公明正大に報いたゞけのことなんだが、

しかし、事實が發展するかしないかは僕の知つたことぢやないよ。そいつは君の宿命論の領分だからね。唯、この處女地は素晴らしい若君に種子を蒔く意志があればね……」

「いや、もう、あなたには兜をぬぎますよ、僕は戀愛のピユリタンですからね」

克彦は眞つ赤になつてゐた。彼は手紙を皺くちやにしてポケットに突込んでから、

「ぢやあ、兎に角出掛けませう——その、あなたの情人のところへ」

「出掛けませう。だが妙だな、かう何だか僕の方が機先を制せられてしまつたやうな氣がしてね」

さう言ひながら、彼は先に立つて階段をおりた。

街へ出ると黑上は手をあげて黃包車を呼んだ。二人をのせた二臺の黃包車は吳淞路の方角へ走つていつた。

夜空の下に冬の街が氷りついてゐた。やがて俥は川ぞひの道を走つてゐた。モーターボートが一隻黑い水面に音を立てゝ花園橋の下をすべつていつた。對岸のブートンは星あかりに曇つて、高い建築の窓から洩れる小さい灯影がまばらにゆれてゐるのである。——

3

花園橋の袂で黃包車を捨てた二人の男の影坊師が砂塵を捲く夜風の中にゆれてゐた　二人はほと

んど無言のまゝで歩きつゞけた。

黑上が小さい露路の前で立ちどまつた。

「此處を通り抜けるんだ、近道ですから」

それは狹い石疊を敷いた道だつたが兩側は倉庫の壁によつて挾まれてゐるので、やつと身體を動かすことが出來るほどであつた。

露路の出口のところに一人の乞食女が莫蓙をひろげて坐つてゐるたよりない手つきで胡弓を鳴らしながら、きれ〴〵のかすれた聲で唄つてゐる。——暗い裏街には歩いてゐる人もなかつた。

二三町歩いてから、また右に曲ると街は一時に明るくなつた。大きな硝子窓にカーテンをおろした家が五六軒ならんでゐる。

黑上はその中の一つの窓に近づいて、靑いカーチンのすき間からぢつと息をころして覗きこんでゐたが、すぐに克彦をふりかへつて低い聲で囁いた。

「ね、ほら、あそこの壁に三人の女が凭れてゐるだらう。あの右の端しにゐる女さ。あいつはボリシエビイキ革命のときにほかの貴族たちと一緒に上海へ逃げてきたんだ。未だに昔の夢に憧れながらあゝやつて年をとつてゆくんだね。——革命の殘骸だ。あの女は革命の晩にモスコーのダンスホールから逃げ出したのさ。今だに片言まぢりの英語で、綿々たる怨を語るんだ。」

その部屋は一種の張店とでも言ふべきものであらう、――まん中に綠色の布をかけたテーブルが置いてあり、そのうしろの長椅子に三人の女がもたれかゝつて居るのである。右の端に居る肥つた大柄な女は身動きもしないで俯むいて居る。耳の上には赤茶けたちゞれ毛が戰くやうに顫えて居るが――それは眠つて居るやうに見えるし、泣いて居るやうにも見える。ぢつと見詰めて居ると、芝居の舞臺面を前にして居るやうで、淫賣宿の窓の前に立つてゐるといふ氣は少しもしなかつた。エロチックな感じよりも、むしろ、緣日に出る可愛想な見世物の前に立つてゐるやうな、淋々とした哀感が迫つてきた。彼はふと、革命の後に愛妻をつれて上海へ逃れてきた舊ロシアの貴族たちが、愛妻に賣笑生活をさせて暮してゐるといふ話を聽いたことがあるのを思ひ出すと急に胸がふさがるやうな氣がした。

「もう僕はこれで澤山です。それよりも早く賭博場へ行かうぢやないですか！」

克彥はほとんど衝動的に、入口の扉に手をかけてゐる黑上の肩をうしろへ引戻すやうに抑えつけてゐた。

「うん、――それも、いゝね、ぢやあ、一寸挨拶だけしてゆくから」

彼は力强く扉を押しあけた。その音におどろいたのか、三人の女が一齊に立ちあがつたが、飛びつくやうに黑上に近づいてきたのは右の端に居た肥つた女だつた。黑上は體を擦り合はすやうにして低い聲でひそ〳〵と話し合つてゐたが、やがてポケットの中から一握りの銀貨をつかみだすとそれを女

の手にわたした。

「さよなら！」

すると女が寂しさうに笑ひながら調子はづれの日本語で叫んだ。

「さよなら！」

その聲は何時までも克彥の胸に殘つてゐた。二人はまた元の道へ引返し、大通りへ出ると黑上は手をあげて遠くの方にゐる黃包車を呼んだ聲に應じてがら〳〵と二臺の俥が霜夜の道をすべつてきた。

4

支那街が途切れて佛租界につゞく大通りは霜に乾いて、街路樹の落葉が風に鳴つてゐた。

その街角で黃包車をおりた二人は、うすく地上にほやけたアーク燈の光の中をよろけるやうに歩いていつた。一町ほどゆくと狹い道が右にひらけてゐる。その曲り角に帽子をかぶつた支那人が眼を光らせながらたつてゐた。

「――」

黑上の顏を見るとその男は小さい聲で早口に呟て輕くお辭儀をした。前からの顏馴染らしい。その道を右に進むとこんどは突きあたりが袋地になつてゐる。そこにも一人の支那人が闇の中に眼を光

らせてゐた。その男の立つてゐるすぐうしろには洞穴のやうな抜け道がある。二人は默々としてその中へ入つていつた。道の中程に鐵の門のある古い家がある。その前にも一人の支那人が立つてゐたが彼等の足音を聞きつけると默つて横の潜り戸をあけた。

槐樹の幹が兩側にならんで、その正面の入口に扉が見えた。——黑上はちらつとうしろを振返つて闇の中に克彥の顏を見定めてから、しずかに扉をあけた。

部屋の中には煙草のけむりが濛濛と立籠めてゐた。けむりと人いきれとに密閉された廣い部屋の中はまん中の四角いテーブルをかこんで二十人あまりの人間があつまつてゐたが、しかし四邊はしいんと靜まり返り、すべての顏の層が極度に緊張した儘動かなかつた。そして無數の視線が骰子振りの指のかすかな動きを見逃すまいとするやうに、テーブルの上に集まつてゐた。

部屋の隅の一段高いところには嚴めしい髯の生えた男が、長い煙管で煙草をふかしながら、今入つてきた新しい客の上に胡亂さうな視線を投げてゐる。それよりも、おどろくべきものは、手垢で光つてゐるまん中のテーブルであつた。そのテーブルの上にある骰子を振る箱のぐるりに堆高く積みあげられた紙幣束の山であつた。

骰子振りの眼は凄いまでに緊張してゐた、竹筒の中に鳴る骰子の音は神秘といふよりもむしろ幽玄な響が湛へてゐた。——さながらそれは地の底から洩れる怪奇な運命のさゝやきでゞもあるかのやう

に。

到頭骰子が投げられた。テーブルのぐるりに垣をつくつた人の波がどつと崩れた。吼えるやうな獄聲が起りその中にまぢつて深い絶望を籠めたうめき聲が猶高く顫へながらごよめきの中に消えていつた。

箱の中には、一と三の數を示した二つの骰子が運命の決定權を握るやうにころがつてゐるのであつた。テーブルの上の紙幣束の山は片つぱしから壞れていつた。胴元の左側にならんだ一團の人々の手が生々と紙幣束に向つて伸びてゐた。——

この凄じい光景は克彥の胸に思ひがけない情熱を喚び起した。彼はしきりに咽喉が乾いてならなかつた。其して、彼の右手には何時の間にか汗にまみれた百圓紙幣がぎつしり握りしめられてゐた。

「どうだ、——張るか？」

黑上が耳のそばで囁いたが彼は返辭をしなかつた。兩肩がわくわくと顫へてきた。

會場の整理がひとわたりすむと、部屋の中はふたゝびしいんとなつて、新しい勝負が始まつたのである。紙幣がぞろ〳〵とテーブルの上に投げ出された。

「三！」

克彥は群衆の間をわけて、ちやうど胴元の正面にあたるテーブルに向つて進んでいつた。その眼は

自分の前のテーブルの上に輕く飜りながら落ちてゆく皺くちやの百弗紙幣を一心に眺めながら。

5

黑上はそのときかすかな嘆聲をあげた。彼は克彥の眼が血走つてゐるのを見たのである。

おや、この男は如何かしたのぢやないかな、――克彥のうしろに立つて不安さうに瞬いてゐる黑上の眼はさう言つてゐるやうに見える。彼にはこの若い小說家が憑きものでもしたやうにこの場の空氣にあてられてしつかり逆上してしまつてゐるこれよりも、むしろ百弗紙幣がみす〳〵と彼の懷中から消えてゆくのを急に見るに忍びないやうな氣がしたらしい。

だが、骰子振りの手は早くも竹筒をつかんでゐた。克彥は全身の顫へを抑へるために力强く唇を嚙みしめたが、腋の下は汗のためにねつとりとにぢみ、頭はぐらぐらつとして前にのめりさうになつた。彼の眼の前には群集の視線が入りみだれ、やがてそれは挑みかかるやうにぢり〳〵と骰子振りの握る竹筒の上に集中していつた。

一瞬間、骰子振りの手がテーブルの上に烈しく動いた。部屋の中は水をうつたやうにしいんとなつた。そして克彥は耳の底にかちりといふ音を聞いたのである。

だが、そのまゝすべての情景が彼の視野から消えて了つた……。

「おい、しつかりしろ！」

次の瞬間、彼はうしろから强く自分の身體を後へ引戻さうとする黑上の手を感じた。そして、そのまゝ彼の上體は黑上の腕の中に抱すくめられてしまつた。

「出よう、――兎に角、此處の空氣ば君に良くないぜ、それに君は少し緊張しすぎてゐるからな……」

「今の――今の勝負？」

「負けたんだ――今夜は博運が惡いらしいから、いつそ引上げることにしよう」

「いや、大丈夫、僕は未だ二百弗持つてゐますよ」

克彥はよろけるやうに黑上の腕をくぐりぬけ、胸を敲いて見せた。テーブルの上の紙幣束の山は世話人の持つ小さな竹棒によつて選りわけられてゐた。そして境內は烈しい混亂に陷つてゐた。その喚き聲の中にまぢつて、おろ〳〵とすすり泣く聲が聞える。入口に近い壁にもたれて頭の禿た老人が兩手で顏を掩つてゐるのであつた。その前にはシャツ一枚になつた色の黑い男がでッぷりと肥つた男の胸倉をつかんで怒鳴つてゐた。しかし、そのそばには長い辮髮を蛇のやうにうねらせてゐる眼の窪んだ男が一束の紙幣を數へながらゆつたりと葉卷をくゆらしてゐた。

「さあ、――もう一勝負やりますからね、これで一文無しになつたら返つてさつぱりするでせう、

僕もいゝ加減自分に愛想が盡きてゐますからね」

「それにしても今夜は歸らう、こんな晩にはきつとろくなことはないよ」

「いや、僕は愉快です」――克彦は剛情にさう言ひ張つて、ふたたび元の場所へ進んでいつた。

次の勝負はすぐに始まつた。箱の中に落ちた二つの骰子は四と五の數を示してゐた。彼は自分の投げた二枚の大きい紙幣が、竹の棒によつて引きよせられてゆくのを一種の感慨をもつて眺めてゐたがすぐに彼の横に茫然として立つてゐる黑上のいかにも當惑したらしい表情にぶつかると、妙に引きつつたやうな、しかし、それにもかかはらず元氣のいゝ聲で言つた。

「さあ歸りませう、――何しろ息が詰りさうで苦しい。……外へ出ようぢやないですか?」

アーク燈の鈍い光りをうけた大地は霜に白く輝き黃包車の轍のあとが折重なつて遠く續いてゐた。街路樹の葉がざわ〳〵と風にゆれてゐる。――その葉づれの音は彼の動きに調を合すかのやうに悲しげに鳴つてゐるではないか!

克彦はそのまゝ駈出したい衝動を感じてゐた。何か一つの見えない障碍物を突破したやうな、喜びともつかず悲しみともつかぬ感激が胸の底から疼くやうにのぼつてきたのである。

彼のポケットの中には、もう一弗足らずの金しか殘つてゐなかつた。だが、そんなことが何であらう、――おれは今夜から新しい生活を始めるのだ。裝甲車のやうにおれは盲滅法に人生に向つて突進

するのだ!

だが、しかし冷たい夜風は一歩一歩彼の昂奮を拂ひのけていつた。新しい生活、……彼は心の中で幾度となくさう繰返したがその聲はだん〳〵うすくかすれてゆくばかりだつた。

「寒いね、黃包車でもゐないかなあ」

黑上が首をかゞめながら、苦しさうに力のない咳をした。そのぼやけた長い影が、ひよろ〳〵と彼の影にもつれかゝつて、さながらそれは、――おい、こゝにも君の新しい生活の見本があるぜ、と囁きかけてゞもゐるやうに見える。

二人は默々として足早に暗い道を歩いていつたが到頭一人の黃包車夫にも出會はなかつた。道の要所要所には劍のついた銃を捧げた二三人の支那兵が立つて居るばかりだつた。そのいかめしい警戒が今南京を中心にして渦まいてゐる風雲の俄に急を告げはじめたことを感じさせた。克彦は煙草を喫はうとしたがマッチが何處にもなかつた。

「ね――マッチを持つてゐませんか?」

すると、黑上は返辭するかはりに默つて首を儀に振つた。そのまゝ二人はまた默々として歩きつゞけた。

しかし、幾つかの四つ角を曲つて、やつと花園橋の明りが見えだしたとき、黑上が慌てゝ彼のそば

に寄つてきた。

「此處から君は道を知つてゐるね、――宿へ歸る？」

「えゝ、知つてゐます」

「ぢやあ……」黑上はいそいで帽子をとつた。

「――僕は此處で失敬しよう、寄るところがありますから」

「今から？さつきの情人のところですか？」

「いや、冗談ぢやあない、僕はもう君とおわかれしようと思つてゐるんだ。僕たちはお互に少し親しくなりすぎましたからね」

克彥は無精鬚のざら〳〵にのびた黑上の頰の肉が痙攣的にぶるぶるつと顫へるのを見ると、不意に强く何ものかに敲きつけられたやうな氣がした。

「何かお氣にさわつたんでせうか？」

「いや、そんな、決して――何卒、僕を誤解しないでくれたまへ。僕は充分君に感謝してゐますよだが、兎に角、今夜は此處でおわかれしませう！」

「すると月明館へはもうお歸りにならないんですか？」

「歸らないかも知れませんよ――多分」

「しかし、僕はこのまゝあなたを見失ひたくはないのです」

克彥は嘆願するやうな調子で言つた。

「だが、――君が僕を見失ひたくないより以上に僕は自分を見失つてしまひたいですからね」

彼は突放すやうに言つて續けさまに咳をした。二人は知らぬ間に花園橋を渡つてゐるのであつた。

黑上は橋をわたりきつたところで立ちどまつてまた帽子をとつた。

「ぢやあ、左樣なら――ほら覺えてゐるでせう。此處はこないだの晩、君と會つたところです。この道を眞つ直にゆけば吳淞路の電車通りですからね、ぢやあ、お大事に」

そこから斜に見える日本領事館の二階の窓から明るい光が黃浦江の水面に落ちてゐた。その光の綾が黑い水面に碎けて、たよりなく漂つてゐるのを見詰めながら、克彥は自分の運命の上に襲ひかゝつてくる、一つのおそろしい凶兆に觸れたやうな氣がした。

そのとき遠く汽笛の音がうめくやうにひゞいてきた。

第五章

風雲來

二月も末に近づいてゐた。――遠く蘇州のあたりを中心にして行はれてゐた兵亂は次第に上海に近づいてくる文路から吳淞路にかけて日本人の生活區域である虹口一帶はカーキー色の軍服を着た義勇兵によつてかためられてゐた。爲替相場は新しい兵亂の報道が傳はるごとに異常な狂ひを示した。街の辻々にむらがる黃包車夫のむれは次第に氣が荒くなり、支那新聞の社會面には强盜、凌辱等等の呪ふべき文字が急に生々と動きはじめた。その混亂に乘じて茶館の食堂では共產主義系統の宣傳員が西瓜畑のやうにのつたりとしてテーブルに落ついてゐる太平の逸民どもの頭の上から熱烈な煽動を浴せかける。商店は宵の口から大戸を下ろしてしまつた。夜は俄にひつそりとして乘客のない空電車が刻々に迫る危險に脅えながら、悲しい音を立てゝ疾走した……。

さういふ雰圍氣の中で冷たい楊子江の濁流をわたつてくる風は嚴寒の中にも一脈の春を含んでゐた夜、十一時を過ぎたころ、吳淞路の電車停留場の前の大通りを左に折れた露地の隅に、もう巖丈な格子戸に鍵を下ろして眠つてゐる「川西質店」と書いた丸い軒燈のぶら下つてゐる家の前で、蹌踉としてよろめきながら一人の男が大聲で怒鳴つてゐた。

「おい！開けてくれよ――賴む、賴む」

しかし家の中はしんとして何の物音も聞えなかつた。

「おい、開けてくれよ、一寸でいいんだ、開けなければ何時までも敲いてゐるぞ！」

その聲は辛ふじて店の間に薄い蒲團をひつかぶつて眠つたふりをしてゐた番頭にある安心を與へたらしい。——彼はむく〳〵と起きあがつて、やつとのことで咳を堪えながらぢつと表口の聲に耳を澄ましてゐたが急に、困つたな！といつた風に眉をひそめた。

「おい！開けてくれ頼む、頼むよ、おい！」

番頭は到頭起きあがつた。

「どなたでございますか、——店の御用ならば何卒明朝にしていただきたいんで……」

「おれだよ、月明館に泊つてゐる荒川だよ」

表口の聲が言つた。

「——荒川さん、」番頭はさう繰返してやつと思ひだしたやうに舌舐めずりをしながら、

「酔狂にも程度がありますよ、もう金庫はすつかり鍵がかゝつてゐるし、店には鐚一文殘つてゐないんですからね、何を持つてゐらつしやつたつて駄目ですよ」

「おい、ひどいことを言ふなよ。せつぱ詰つたからやつて來たんぢやないか、大した金ぢやなし、十弗あればいゝんだからね」

「その十弗がわたしの力では動かせないんですから、——明日になれば必ず何とか都合をつけますから今晩はどうぞ……」

番頭はあとの言葉を口の中でもぢやもぢやとしやべつてしまふこぞく〳〵つとくる寒さに首を縮めながら蒲團の中へもぐりこんでしまつた。鐵の格子戸を敲く音はしばらくつゞいてゐたが、中から何の返事も聞えないのにあきらめたのか、靴音はふだゝび石疊の上をよろよろとすべつて大通りの方へ消えていつた。

吳淞路の通りは店々の軒燈のほかげが虛しく路上に落ちてゐたがしかし、星のない空は重苦しくその上に垂れ下つてゐた。

兩手をしつかりと外套のポケットの中へ突つこんで、悄然として歩いてゆく克彥の影が薄く氷ついた鋪道の上に伸びてゐる。——彼のポケットの中には今は一枚の銅幣も殘つてはゐなかつた。さあ、これで愈々最後のどんづまりが來たのだ、と彼は幾度となく心の中で呟きながら、宿のある方角へ歩いていつた。上海へ着いて二ヶ月足らずのうちに彼の生活は全く一變してゐた。かつて盃を手にしたことのなかつた男が今は進んで高粱酒のコップをぐい〳〵と呷るやうになつてゐたし、茶館から賭博場へ、賭博場から賣淫窟へと彼の生活は水を吸ひとる海綿のやうに一日ごとに荒みつゝあつた。

右側のベビーガーデンの中の廣場は深い闇に包まれてゐた。克彥はぐつたりと疲れた身體をその低

い木柵に凭せかけたがそのまゝしく〳〵と泣きだした。

2

不安にとざされた上海の街へ、楊子江の朝霧をわけて日本郵船のY丸が上つてきた。碼頭近くはひつそりとして出迎への人もすくなく、船の上から吐きだされた少數の旅客がいそ〳〵と旅館の客引にみちびかれて、それ〴〵の方向へ去つてしまふと、あたりはしんとなつて岸壁を洗ふ波がしらにほの〴〵とあける朝の空がうつゝてゐた。

同じ日の午前十時ごろ月明館の二階の部屋で荒川克彦は催眠藥によつてやつと得たばかりの淺い眠りをそれも悪夢に襲はれつゞけてまんぢりともしなかつたのを續けざまに扉を敲く音に破られた。眼をあけると、宿の番頭が一癖ありげな顏に微笑をうかべて細目にあけた扉のすき間からのぞいてゐるのであつた。

「お目醒めですか――朝つぱらから厄介なことをお願ひにあがつたんですが……」

わざとらしく頭をかいてゐる番頭の顏がうすくあけた克彦の眼にうつゝた。その顏が何か一つのたくらみをかくしてゐることを克彦はすぐに感じた。

「厄介なことだつて？」

克彦は半身を蒲團の上にもたけたまゝ、相手の底意をたしかめるものゝやうに、おど〳〵とした態度で言つた。

「いや、それがですな、誤解のないやうにお願ひしたいんですが……實は今朝急にお客樣が四五人はいつたわけなんで、それが何しろこのとほり部屋數のすくない家でせう、だもんだから……」

番頭は空咳をしながら、急に聲を低めた。

「――だから、宿でも本來ならお斷りを願ふところなんですが、それが又ずゐぶん古いお馴染でしてね、いや實は御存じの、ほら――天中軒伽羅丸さんの一行なんですがね」

「難しい名面だね、――寄席藝人かね、その人は？」

「御ぞんじないんですか、浪花節の天中軒さんを？それが何しろ古いお馴染なんで、如何しても何とか都合をつけなければならんといふことに……いや手前どもの立場もほんとうに苦しいんですが、何しろそんなやうなわけでまことに申兼ねますが、ほんの二三日で結構ですから」

番頭は立てつゞけに、とき〴〵當惑したらしい表情を示しながら知らず知らずのうちに話の要領を相手に納得させるねつとりとした巧な話術でまくしたてた。

「それで――僕に出てくれといふわけなんだね？」

「いや、そんな……」

彼は、言葉の上の懸け引がやつと思ふ壺にはまつたといふ得意さを、いかにも心外だといつた調子でごま化すために右手で柱を輕く敲きながら——

「すぐさう思はれるから困るんですよ。——宿の主人が假りに何と言つたとしてもですね、わたしが月明館にゐるかぎりは、かりに一ト月やそこら宿賃が溜つたからつて、そんな無法なことは言ひませんよ——唯、今日のところだけはまつたく、わたしが板ばさみになつて閉口してゐるわけなんで一つわたしの顏を立てゝやるとお考へになつて二三日それもほんの二三日でいゝんですから、部屋を代つていたゞきたいんで——」

番頭は相手の心がだんゞ〳〵自分の術中に陷つてくるのを感ずると急に正面から開き直つてきた。

「なるほどね——そりやあ、場合によつちやあ代つてあげたつていいがね、しかし、一體僕のうつる部屋といふのは何處だい？」

「さあ、そこなんですよ、わたしの口からもこんなことはとても言いにくいんですが、此處のところは一つ御勘辨なすつて、あの四階の前にあなたのお友だちの黑上さんが、あの方のゐなすつた部屋を御ぞんじでせう、四階の——」

克彦はわれ知らずぎよつとした。それはほんの一瞬間にしか過ぎなかつたが、しかし、克彦の眼には今自分の前でしきりにもみ手をしながら馬鹿丁寧な調子で物を言つてゐる番頭の顏が何か一つの眼

に見えない不可思議な力をもつて自分に臨んでゐる人間のやうに思はれてきた。その力に克彦はひた押しにぢり〳〵と押されてゆくよりほかに仕方がなかつた。

「ぢやあ早速うつることにしやう！」

彼は思はずさう言つたが、しかし、その顏は石蠟のやうに蒼ざめてゐた。

3

克彦が輕いトランクを支那ボーイに持たせて、うす暗い四階の部屋の扉をあけたのはそれから間もなくだつた。

正面の小さい窓は鎧戸が外してあるので鈍い午後の陽ざしが、白いペンキの剝げ落た窓枠の上に落ちてゐたが、しかし、そのために部屋の中は反つて落莫とした感じに充たされてゐた。

カンプベッドは、左手の壁とすれずれに置いてあつた。それから古ぼけたテーブルの前には、彼が始めて黑上と會つた晩に腰をかけてゐた、脚の壞れかゝつた椅子が前と同じ恰好で置いてあるし——それから、柱のそばに壁の汚點のやうにうかんでゐた燦珠の寫眞は依然として同じ場所に貼りつけてあるではないか！。克彦はひとわたり部屋の中を見廻はしてから窓の方へ近づいていつた。

窓は高く、やつと彼の肩と擦れ合ふほどであつたが、しかし、そこから見下ろす裏街の風景は、三

階の部屋の窓から見る街の雜踏とは全く變つてゐた。眼の下には傾斜の急な坂道が白く輝き、その兩側は長屋のやうな煉瓦づくりの二階家にかこまれて、街路樹の葉かげに見える青いバルコンの欄干が夢のやうに空間にうかんでゐる。

その坂道の盡きるところは高い倉庫の屋根によつて劃られてゐるので、この一廓だけには街の雜音も流れて來なかつた。ひつそりとした坂道を上から見下ろしてゐると歩いてゆく人間の姿が、ことごとく、帽子は笠のやうに大きく、身體はその下に小さく縮まつて、何とも知れず滑稽な異樣な風態に見えるのであつた。——

彼のうしろで扉のしまる音がした。ふりかへると部屋の中には、もう支那ボーイはゐなくて、テーブルの上には袋に入つた蠟燭が置いてあつた。——その蠟燭はふと克彦の頭に、あの不思議な放浪者黑上の顏を思ひ起させたのである。ゆら〳〵とはためく小さい灯かけの中にあの蒼白くやつれた顏を輝かせて、綿々たる情懷を語つてゐた、あの陰影の深い不思議な人間を……。

それにしても、あの男は何處へ行つてしまつたのであらうか？その疑ひは新しく克彦の心に燃えあがつてきた。あの男はまるで幽靈のやうに、解きがたい一つの謎を彼の前に殘したまゝで何處かへ消えていつてしまつたのだ。——克彦は最初の晩、黑上が、何氣ない調子で「永遠の偶像と一所にこの部屋を提供するよ」と言つた言葉を今更のやうにおもひだした。

だが、そのとき、カンブベッドの脚の上の方に細く折りたゝんだ紙きれのやうなものが結びつけてあるのが眼についた。彼は飛びつくやうに急いでその結び目をほどいてみた。テーブルの上でひろけると、茶色の書簡箋の上に惡戯書きをしたとしか思はれないほどの亂雜さで鉛筆の走り書きがしてあつたが、その曲りくねつた文字を一つ一つひろつてゆくうちに彼の頰は次第に痙攣的に顫へてきた。

（僕は長い間この部屋の中で君を待つてゐたといふ氣がする。僕の存在はほろびても、僕の運命は多分君の人生の中にもぐりこんでゆくだらう。われ〳〵は同じ方向に向つてほろびてゆく人間なのだ！）

書簡箋の上の文句はそれだけで終つてゐたが、この手紙ともつかず覺書ともつかぬ文章が克彦に對して書かれたものであることは最早寸分の疑ふ餘地もなかつた。克彦はわれ知らず唇を嚙しめた。それから、テーブルの上の紙きれを右手の中に握りしめたまゝ、氣を失つた人のやうに、ぐつたりとカンブベットの上に倒れてしまつた。

「おれはもう駄目だ！」

彼は大きく呟いたが、しかし、またよろ〳〵と起きあがつて、右手にまるめた紙きれを敲きつけるやうに床の上に投げつけた。

克彦は其まゝ扉をあけてゐた。だが彼の足が部屋の外に一歩踏みだしたとき、階段を駈のぼつてくる小さな靴音が聞こえてきた。その瞬間、克彦の身體は凝着したやうにかたくなつた。靴音は次第に近づいて、やがて四階の暗い廊下にぽつかりとうかんだのは、思ひがけない美和子の顏だつた。

「あら、びつくりした、――いやな先生ね、如何してそんなところにゐらつしやるの？」

ほがらかな、晴ればれとした聲に、克彦は始めてわれにかへつたやうに、ぢつと美和子の顏を見据えたが、不意に苦しさうな微笑を唇の上にうかべた。

「僕はね、またあんまり荒々しい足音が聞えたもんだから、何か悪者でもやつてきたんぢやないかと思つたんですよ、――だが、あなたでよかつた」

つとめて輕快な調子で言葉をまぎらさうとしたが、しかし、聲が咽喉にからまつて、如何しても笑へなかつた。

「ずゐぶんね、――先生の方がよつぽど惡者よ、だけどへんね、こんなうす暗い部屋へ何故引つ越してゐらしたの、わたし、前のところだとばかり思つてゐたのよ、だから先生をびつくりさせてやらうと思つて、そつとあの部屋の扉をあけたのよ、そしたらね」

少女はこゝまで一息にしやべつてから、さも可笑しくてたまらないといつた風に肩をゆすぶりながら轉げるやうに笑ひはじめた。

「何かあつたんですか、一體？そんなに笑つてゐないで僕の部屋へおはいりなさい」

「だけど、お可笑いわ、へんな人がたくさんゐたんですもの、髯の生えた、頭だけ章魚坊主のやうな人が、眞つ赤になつて唄をうたつてゐたわ、――あの人たち一體何でせうね？」

「何だ、……ぢやあ浪花節語りが僕の前の部屋を占領したんだな、いや、あの人たちは日本倶樂部で浪花節の大會をやるんです、それで僕のやうな貧乏旅客は部屋を追ひ出されてしまつたといふわけですよ。」

その言葉は僞りきれないある眞實を含んでゐたので彼のおどけた言葉の中から、かすかに閃いた異樣な感情を美和子は素早く汲みとつてゐた。彼女は急に笑ふことをやめてしまつた。その明るい瞳はやつと何も彼もわかつたといつたやうに、氣の毒さうな、しかし無邪氣な哀感を湛えてゐた。

「――それよりも、美和子さん、あなたはもう直き日本へお歸りになるんぢやないですか？」

克彦は美和子を部屋の中へ追ひやるやうにして扉をしめた。

「えゝ、さうなのよ――この次の船で歸るのよ、そのとき先生も一緒にお歸りにならない？」

「僕？」

かう言ひかけて、克彦は急に狼狽したやうに言葉を濁しながら、

「――僕にはね、未だ仕事が殘つてゐるんですよ、それが濟むまでは一寸歸られないんです、今、大事のところですからね」

「どんなお仕事なの？」

「それがね、あなたには說明したつてわかりませんが、――ほら、何時かあなたと一緒に「オリンピックシャタ」で活動寫眞を觀たことがありましたね、自分の影に追つかけられて、何處までも何處までも追ひつめられてゆく男を……、つまり僕はあの影のかはりに自分の幽靈に追つかけられてゐるんです。さういふことがあなたにもやがてわかるときが來ますよ」

美和子は默つて克彦の言葉を聞いてゐたがしかし、冷たく澄みとほつた瞳は明かに一つの言葉を囁いてゐるやうに見える。

「……わたし何でもわかるのよ、ほんたうに先生は氣の毒な方なのね」――こでも言つてゐるやうに。

しかし、彼女は急にほがらかな聲で叫んだ。

「あら、こんなところに寫眞が貼つてあるのね、これどなた？」

美和子は利頭燦珠の寫眞を見つけてしまつた。

「それですか、それはね、前からあつたんですよ、きつと誰かゞ惡戲に貼つたんでせう」

「でも奇麗な方ね」

美和子は壁に身體を擦よせるやうにしてぢつと寫眞を覗きこんでゐたが、すぐに彈づむやうに腰をうかせながら、うしろへひよいと身をひいた。

「……知つてゐるわ、わたしこの女の人、誰だか知つてゐるわ」

「ほう、――そいつは不思議だ。美和子さんの知り合ひの方ですか？」

「さうぢやないのよ、此人はね有名な女優なのよ、先生だつて御存知のくせに」

「いや、僕は知りません、だつて、今この部屋へうつゝてきたばかりぢやないですか！」

「でも、名前を言つたらきつと、知つてゐらつしやるわ、月岡燦珠よ――わたし、きつとさうだと思ふわ」

「月岡燦珠――なるほど、聞いたことがありますね、ぢやあ、雜誌の口繪か何かに出てゐたのを切り取つて貼つたんでせう」

「さうぢやないのよ、たしかにほんたうの寫眞よ……」

彼女がさう言ひながら、もう一度燦珠の寫眞を見るために、えびのやうに腰を曲げたとき、おそろしい響きが突然大氣の中をすべつて、古ぼけた四圍の壁を一時にがたがたと搖るがせたのである。

美和子はその瞬間、兩手を胸の上にひろげたまゝ、何時の間にか克彦の腕にすがりついてゐた。おそろしい響きはあとから〳〵と、きれ〴〵に傳はつてきた。

「大丈夫ですよ、――大砲の音は案外大きく聞えるものです。それに、上海はもう陸戰隊も上陸してゐるし、何しろ警備が行屆いてゐますからね、日本人には絶對に危險はありませんよ」

克彦は、小さく顫へてゐる美保子の肩をしつかりと抱しめながら言つた。しかし、窓の外には遠く倉庫の屋根を越えて、黑い煙が次第に大きく空に向つてひろがつてゆくのが見える。おそらく上海に近い何處かの村落が兵火の難を蒙つて燒き拂はれてゐるのであらう、――戰局は明かに上海に向つて近づいてきたのである。

だが、美和子の兩肩を抱きしめた克彦の腕には次第に力が加はつてきた。彼の心は何時の間にか、うつとりとした夢見るやうな陶醉の中を彷徨はじめた。新しい衝動が堰を切つた水のやうに彼の胸の中にあふれてきた。

數分間、克彦は同じ姿勢を保つたまゝ眼を瞑ぢてゐた。……さうだ、おれはこの少女に戀してゐるのだ！

その感じは始めて彼の頭に、はつきりとしたかたちをとつて現はれてきた。愛慾の奔流の中に溺れかゝつた克彦にとつて、かつては一本の藁であるにすぎなかつた美和子の姿は今や彼の身體を縛りあげる一筋の太綱となつて現はれてきたのだ。

「美和子さん！」

彼の聲はやつと咽喉をとほりぬけて唇を顫はせたゞけであつたが、しかし、ほとんど無意識といつてもいゝほどの速さで彼は前屈みになり、わな〳〵と顫へる唇は一心に少女の唇を探し求めてゐるのであつた。だが、それもほんの一瞬間にしか過ぎなかつた。やうやく燃えあがつてきた彼の情熱はたちまち理性の眞に陷つてしまつた。

いけない、いけない！お前はこの少女の運命に干渉する資格はないのだ！

少女を抱しめた腕の力はぢりぢりゆるんできた。そして、最後に彼はついと美和子の身體から慌しく離れながら、

「若ものことがあるといけませんからね、早くお歸りなさい、――おうちの前まで僕がお送りしますから」

彼はやつと、喘ぐやうな聲で言つた。

美和子は眼を瞑ぢたまゝ石のやうに動かなかつた。

遠く上海郊外に迫つてきた戰局はだん〳〵急を告げてきたらしく砲彈の音は前よりも激しくひゞいてきた。爽かに晴れてゐた午後の空は次第々々に黑い砲煙によつて掩はれ、鈍い陽ざしは半光りを失つてゐた。

「若ものことがあるとお母さんにすみませんからね」

克彥は同じ言葉を繰返しながら促し立てるやうにさう言つた。數分間前に彼の胸の底に萠えはじめた情熱の芽は今や完全に冷たい理性の重石によつて壓えられてしまつた。

「いゝわ、わたしひとりで歸れるわ」

美和子は、そのとき始めて克彥の顏を見上げたが、しかし、うつとりと輝いた瞳は、未だ醒めきらぬ夢の中をあて度もなくさまよつてゐるかのやうに一種の物悲しさを湛えてゐるのに、その聲はかすかにある怒りを含んでゐた。

「でも僕は義務としてお送りしますよ」

「義務として?——わたしそんなことをしていたゞく權利なんか無いわ、ひとりでたくさんよ」

子供らしい無邪氣さはその聲の何處にも殘つてはゐなかつた。克彥は自分の心が急に遠くへ彈きとばされてしまつたやうな氣がした。美和子はそのまゝ窓にもたれて、一刻ごとに砲煙にうづまつてゆく空を見詰めてゐたが不意に頭を窓枠の上にのせたまゝ、咳きこむやうに泣きはじめた。

「如何したんです、一體?」

克彥の手はふたゝび知らぬ間に美和子の肩の上に置かれてゐた。すると、美和子がくるりとうしろをふりむいた。涙をうかばせた眼は何とも知れぬ深い感情によつて彩られてゐたが、それにもかゝはらず、彼女はきつぱりとした聲で言つた。

「先生、もう失禮しますわ、——もうこれぎりでわたしお訪ねしないわよ」

彼女は飛び立つやうに部屋を横切つて扉の把手に手をかけてゐた。

「一寸待つて下さい、——一體如何したんです?」

克彥は氣が遠くなるやうな絕望的な感情をやつと壓へながら、しつかりと、うしろから美和子の身體を抱しめた。

「ね、言つて下さい、何が——一體何があなたを傷つけたんです?」

しかし、美和子は返辭をしないで、慌てゝ克彥の腕の下を潛りぬけやうとしたが、力の及ばないのを知ると、そのまゝぐつたりと彼の胸に全身の重みを投げかけながら彼を見詰める瞳はかう囁いてゐ

た――わたし、先生を愛してゐるのよ、――でも、先生はほかのことを考へてゐらつしやるのね、もうこれでおしまひだわ――

美和子の涙が克彦の上着のボタンを傳つて流れ落ちた。一瞬間、克彦の眼の前の壁の上には燦珠の寫眞が燃え立つやうにうかんできた。彼は思はずぎつとして眼を閉ぢてしまつた。

激しい葛藤が彼の胸の中に起つた。彼は最初に全身から湧き起つてくる愛情ともつかず情慾ともつかぬ一種の不可解な感情の中に閉ぢこめられたが、しかし、その激しい感情の流れは何時の間にか堅い殼によつて包まれてしまつてゐた。――今だ、今だ、……

此處におれの生涯を決定する鍵が横たはつてゐるのだ！

彼は自分の情熱を唆しかけるやうに、さう心の中で叫びつゞけたが、しかし、身體は妙に冷たく硬ばつてゆくばかりだつた。

「さあお歸りなさい、――おうちまでお送りしますから」

到頭彼はきつぱりと、さう言ひ切つてしまつた。郊外から傳はる砲彈の響きはます〳〵大きく、太陽の光はまつたく冬晴れの空から消えかゝつてゐた。

自分を支へる力を失つてしまつた美和子はぐつたりと柱によりかゝつた。その儘眼は無限の哀感を湛えてぢつと克彦の顏を見据えてゐた。克彦の唇は戰のくやうに顫えた、潮のやうにこみあげてくる感情のために胸は大きく波をうちながら高鳴りはじめた。

彼はべつとりとあぶら汗に濡れた兩手を胸の上に組合せてゐた。

彼の胸の中には二つの聲が鬪ひ合つてゐるのである。しかし、今だぞ！今だぞ！といふ聲は、何かしら妙な道德的な感情をよび起した。――お前にはこの清純な少女の運命に關與する資格は無いのだ！といふ聲のために、彼の心はぢりぢりと壓えつけられていつたのである。

「……！美和子さん、若ものことがあつたらほんとに如何します」

彼はふるえ聲でさう言つたが、しかし、自分が何をしやべつてゐるのかまるでわからなかつた。彼は美和子の眼が悲しさのために顫へてゐるのを見た。しかし、その瞳の底には何時の間にか憎しみとも輕蔑ともつかぬ小さな感情の動きがひそんでゐた。そして、彼女の眼はもう克彦の顏を見てゐるのではなく、茫然として、まるで自分の前に立つてゐる一人の男の存在を意識しないかのやうに放心の中をうろついてゐるのであつた。

その感じは、克彦の胸の中に壓えつけられてゐた衝動に反撥の機會を與へた。今だぞ！今だぞ！烈しい情感はたちまち殼をやぶつてはぢき出されるやうに彼の全身に燃えひろがつてきた。

「……美和子さん」

克彦の兩手は挑みかゝるやうに美和子の肩を抱しめた。

「あなたには僕の氣持がわからないんです。僕は……僕はあなたを愛してゐます。だが僕は――」

しかし、そのとき、美和子はくるりと向を變へて、入口の柱によりすがるやうにして泣きだした。

克彦は思はず兩手を離してゐた。もう駄目だと思つた。彼は一つの會い――それをおそらく一生に二度と得ることのできないであらうところの機會が瞬間のうちに何處か遠いところへ逃れ去つてしまつたことをあり〳〵と感じた。萬事が終つてしまつたのだ！あゝおれは何といふ慘めな男であらう――このおれといふ男は？

彼はそのまゝぐつたりとカンブベッドの端しに腰をおろした。胸の中にはさま〴〵な感情がこんがらかつて、何かしら鋭利な刄物で臟腑の中までひつかき廻されてゐるやうな氣持だつた。

窓の外は夕ぐれの近づいたやうにうす暗く大砲の音はもう聞えなかつた。しかし、調子を亂した小銃の響は前よりも一層烈しくなつてゐるのであつた。

「――美和子さん、さあお送りしませう、萬一のことがあると大へんですからね」

彼は慌てゝ立ちあがりながら、はつきりした聲で言つた。われとわが心をかういふ窮境に追ひつめてしまつた男の誰れでもが、自分をごま化すために考へるのと同じやうに彼もまた、心の中の誘惑に

うち克つたと考へることによつて一つの神聖な義務を果したやうな氣持になつてゐたのである。

彼は美和子に近づいて、うしろからその右腕を抱えこんだ。途端に彼女が顏をあげた。美しい瞳にはもう涙のあとも殘つてゐなかつた。懷かしげに彼女は克彦の顏を見上げながら、聞こえるか聞こえないほどの低い聲で言つた。

「……先生は不幸な方ね、わたしほんとうに先生を幸福にしてあげたいわ」

瞬間、克彦は頭がぐらぐつとしてきた。そのまゝ彼の顏は美和子の顏の上にしつかりと掩ひかゝつてしまつてゐた。

8

北四川路の街はづれにある「安達洋行」の裏口まで美和子を送つてしまふと、克彦はほつとしたやうに身輕に難踏の中をくゞるやうにして元來た方角を歩いてゐた。二三間歩いてから彼はうしろをふりかへつて堅くとざされた「安達洋行」の二階の窓をなつかしげに見上げた。彼の胸は新しい喜びのために高鳴つてゐる。空を傳はつてくる小銃の響きも、街上の賑えくりかへるやうな混亂も、苛立たしく動いてゐるすべての空氣が、今は彼の心のどよめきに快よく調を合せてゐた。

電車通りは、義勇兵と陸戰隊とそれから行くべきあてもなく逃げ惑つてゐる避難民とで埋まつてゐ

る。埃と汗にまみれて土色になつた顏の列が右から左に、左から右にうろ〳〵と流れてゐる危險は一刻ごとに迫つてゐるらしい。文路への曲り角まで彼は群集とともに押し流れてきたが、月明館の門を入ると急に今までの緊張がぐつたりとゆるんで兩足がふらふらとするのを覺えた。

「大變なことになりましたな、――どうも今度は一騷ぎ始まりさうですな」

帳場の前の椅子に腰をかけてゐた番頭が彼の入つてきたのを見ると不安さうに眉をしばたゝきながら言つた。

「ところで戰爭の始まつてゐるのはごのあたりかね？」

「何でも龍華の近くださうですが――まあ、このへんは心配ありませんよ、もう陸戰隊も來てゐるし……」

帳場のテーブルの上にある邦字新聞の號外には、六三園附近で山東軍の殘兵千四十名が日本陸戰隊によつて武裝を解除されたといふ報道が出てゐた。彼はその大きな活字をちらつと流し目に讀んでから階段をあがつた。部屋へ入るとやつと落ちついた氣持になつたがしかし、彼の腕には美和子の體溫が未だかすかに殘つてゐるやうな氣がする！

彼の心は自分の得た小さな幸福を何ものかに祈りたいやうな氣持で充たされてゐるのであつた。

この處女地は素晴らしい、若君に種子をまく意志があればね――彼はたわむれにさう言つた黑上の

言葉を何時の間にか唇の上にうかべてゐた。それから彼は、壁に貼つてある燦珠の寫眞に近づいて兩隅を爪ではぐしながら、片つぱしからむしりとつた。それをもう一度細かく引き裂いて窓の外に投げ捨てた。細かい紙きれはたちまち微風に煽らながらたそがれの大氣の中に消えていつた。そのまま彼はカンブベットの上に横になつたが、しかしきれ〴〵にひゞいてくる銃聲のために甘い幻想は幾度びとなく破られた。

小一時間も經つたころ、起きあがると窓の外には宵闇が迫り、坂をかこむ家々の窓には早くも夜の燈火が街路樹の葉かげにきらめいてゐた。騷亂の中の靜けさが底知らぬ不安を湛えて窓外の眺望の上にひろがつてゐるのである。――

そのとき、彼の腦底を、黑上聆介の姿がよろ〳〵と通り過ぎた。それにしてもあの男は何處へ姿をかくしてしまつたのであらう。……ことによるとあの男は自殺したのかも知れない、――克彥は亡靈のやうな黑上の死顏を想像するとわれ知らずぎよつとした。

彼はテーブルの上の蠟燭に火を點けた。しかし焰がゆら〳〵と燃えあがつたとき、入口の扉がぎりぎりと前に押開かれてゐた。彼はどきつとして一瞬間、胸が詰まりさうになつた。黑上がこつそり歸つて來たのではないか？

しかし、その不安に應ずるやうに忍びやかにぬつと顏を出したのは、まつたく見馴れない一人の紳

士だつた。鼻眼鏡をかけて、あご髯を生やした紳士は黒い外套の、ラツコの襟に首をうづめながら、呆然として立つてゐる彼の顏を見てにや〳〵と笑ひだした。

「僕だよ、——おい僕だよ！」

9

「あなたはどなたですか——？」

ふるえ聲でさういつた克彥の顏を、その鼻眼鏡をかけたひげ男は面白さうにぢろ〴〵眺めながら、がつくりと聲の調子を落とした。

「——おい、そんな顏をするなよ俺ぢやないか！」

その男は笑ひながら素ばやく鼻眼鏡を外したのである。それから兩手であご髯をしごくやうにしたかと思ふと、房々とした髯は見る間に、そのまゝそつくりその男の右手に握られてゐるのであつた。

「未だわからないかね、——ぢやあもう一つ外づさう」

その男は慌てゝ口髯を外づした。すると、克彥の眼の前には少しく酒に火照つた正眞正銘の北野一郎の顏がにや〳〵笑つてゐるではないか？

「何だ——おどすなよ、僕はまつたく眞劍に考へてゐるんだぜ」

「いや、失敬——、だが僕はもつと眞劍なんだからな、命がけの變裝ぢやないか……しかし、兎に角君に會へてよかつた、ずゐぶんしばらくだつたね、それにしても、おかしな宿屋へ泊つたもんだね、一體こんなところで小說の材料でも探すといふ寸法なのかね……」

北野は不思議さうにぢろ〴〵と部屋の中を見廻した。

「材料を探すどころか、おれの方が材料になりかけてゐるよ、だが材料としてもこんなしみつたれた男の性格はもう古いね——ところで、君はあれから如何したんだ？」

「送りかへされたのさ、日本へ、しかしおかげで助かつたよ、あの警察の部屋で君と引合はされたときには如何なるかと思つたがね、何しろ疑ひのたねになる證據物件が無いから、そのまゝ危險人物として日本へ追ひかへされるといふだけですんだよ」

「すると一度日本へ歸つたわけだね？」

「勿論——半月あまり東京でぶらぶらして、それからかういふ素晴らしい恰好をしてやつてきたんだ！」

北野は扉の方に氣をくばりながら慌てゝテーブルの上の髯をつけ、鼻眼鏡をかけてしまふと、急におどけたやうな調子になつて、

「……ところが東京ではたつぷり材料を仕込んで來たぜ」

彼は自分のもたれてゐる脚の壊れかゝつた椅子をぎしぐ〜鳴らしはじめた。

「何のことかい――それは？」

「まあ、そろそろ始めるよ」

彼は外套のポケットをさぐつて銀の卷煙草入の中から、太卷のスリーキャツスルを一本ぬきだした

「おい妙なことを言ふね、僕が何をしたといふんだい？」

克彦は北野の言葉につりこまれるやうに、思はず眞顏になつてゐた。その顏を北野はほがらかな眼で眺めながら、

「君のロマンスにあやかつたといふだけのことさ、――實はね銀座のカフエーでひよつこり南里と會つてね」

「南里と？」

「さうだ、何年ぶりかな、――五年、いや六年になるかな、あの男は昔と同じだ。カフエーの隅つこに、ひとりきりで、ちびり〳〵ウヰスキーを飲んでゐたよ。それに近頃はあいつの毒舌もめつきり冴えてきたね、――僕もその晩は久しぶりでずゐぶん醉つたよ」

「それで――南里が何か言つたのかい、僕のことについて？」

「いや、その前に一人の美女が數人の取卷にかこまれて僕等のすぐ横のテーブルを占領したことか

ら話す義務があるね、その女は南里の顏を見るとつか〳〵と立ちあがつて僕等のテーブルへやつてきたといふ始末なんだが、その女が南里の顏を見るといきなり、ね南里さん――荒川さんの住所を御存じでせう、と言つたもんだ……」

「いや、もういゝよ、その話なら――さういふ艶聞はもう時効にかゝつてゐるよ」

克彦は苦々しさうに横を向いた。

10

「いや、ところが――僕は戀愛の債權者としてのその女から君に傳へるための言葉を托されて來てゐるんだから」

「ありがたう、だが、その言葉も今の僕には受けとる義務がなささうだね」

「おい、おい、――いやにそつぽを向いて氣どるなよ、南里が最初にその女を僕に紹介したんだからね、これが荒川を失戀させた月岡燦珠といふ當代第一のモダンガールだつて……」

しかし、克彦は返事をしなかつた。彼は何か發作の起りかける前のやうな氣持になつてゐた。その苛立たしさを抑えつゝるために彼は駄つて立ちあがつて、うしろの窓をしめた。

「……すると、女が、かう言つたよ、そんなことはわたしの知つたことぢやないわ、たとへばあの

人が失戀しやうと自殺しやうと、それが如何して、わたしがさせたことになるの――だつてね、さてそれからだ、女はへんに昂奮してきてね、南里が君の宿屋を知らないもんだから、話の都合で到頭僕が口を挾むことになつてしまつたんだが、ことによると僕は近いうちに支那へゆくかもわからないからそのとき若荒川のゐるところがわかつたら知らせてあけやうといふことになつたんだ」

「それで――」

克彦は何時の間にか前に進んで兩手でテーブルの端しをつかんでゐた。

「それからさ、いやそんな必要が無いと女は言ふんだ、唯ね、若會つたらこれだけ傳言してくれといふんだ……女の心の底を見透すことの出來ないやうな男に失戀する資格なんか無いつて、――さう言つてくれさへすればいゝといふのさ、すると南里が、すつかり感嘆してね、なるほど君は舞臺度胸が出來てゐますね、といふと女が到頭怒りだしたよ、――人生こ舞臺とどれだけ違ふの、あなたなんぞにわたしの誠實が疑はれる理由は少しも無いわ――つて。そのまゝわかれたんだが。」

克彦は急に呼吸の苦しさを感じてきた。彼は自分の身體が深い陷穽の中へ眞つ逆樣に落こんでゆくやうな氣がした。

「だからさ、――かういふ女を自由にすることが出來なかつたといふことは、すくなくとも君の不德だと言はれても文句は無いね、どうだ、荒川、もう一度日本へ歸つて一勝負やつたら……？」

北野は、磊落さうに笑ひながらぢつと正面の窓を見詰めてゐたが、不意に顏色を變へて立ちあがつた。

「――おゝ、やつてゐるな、遠くから見るとちよつと凄いなあ」

彼のゆびさす方角には、遠く郊外の地平の一角を染めて、焰が高く空にのぼつてゐるのであつた。

「何だか、おそろしいことになつたね、ずゐぶん遠いやうだが、どのへんだらう？」

「さあ、まるで見當がつかんね、――しかしどつちにしてもこの二三日のうちに上海は大混亂に陷ることだけはたしかだ、孫傳芳はもう日本へ亡命でもするより仕方があるまい、南軍は完全に上海を包圍してゐるといふかたちだからね――待つてゐたまへ、今にこの窓から大芝居が見られるから」

北野はチョッキの隱しの中から小さな金時計を出して見てゐたが、

「もう七時だね、僕はこれから一仕事しなければならんから、――失敬しやう、それからこの前預けた書類があるね、あれを返してくれたまへ――、おかげでほんたうに助かつたよ」

克彦は上着の内ポケットに忍ばせてあつた封筒――その上に美和子の宛名の書いてある――をとりだして、默つて北野の手にわたした。

「いや、ありがたう」北野はその上書を見やうともしないでポケットの中へおさめてしまつてから、

「ところで、面倒だがね、――もう一つ預つてもらいたいものがあるんだ、二三日經つときつと取

りにくるから」

さう言ひながら、彼がテーブルの上に大事さうに置いたのは一挺のピストルだつた。

「ぢやあ、左様なら——命があつたら、またお目にかゝらう」

北野は眼鏡越しに克彦を見てにやりと笑つた。それから、入つてきたときと同じやうに輕く扉をあけた。

「左様なら、——うまくいつたら、うんと御恩がへしをするからね」

彼は低い聲で、それはまるで冗談口でも敲くやうな調子で言つたが、何故かその聲はへんにけつそりとしてゐた。克彦は北野の靴音が忍びやかに階段をおりてゆくのにぢつと耳を澄ましてゐたが、しかし その顏は何時の間にか剃刀のやうな冷たさによつて彩られてゐた。

空にうつる焔の色は、赤黑く濃淡を雲にぼかしてひろがつてゐた。

テーブルの上には、實彈を塡めた一挺のピストルが置いてある。——彼はそれをとりあげて、うす氣味のわるい重みを指の先に感じながら、そつと短い銃身を握りしめたのである。そのまゝ壁にもたれて、考へこむやうに眼を閉ぢたけれども、しかし、實際頭の中には何の考へも起らないのであつた赤い空の色が窓ガラスにうつゝてゐるので部屋の中は何時もよりもずつと明るい。——彼は不意にいきむやうに頬をふくらませた。それから部屋の中をぐる〳〵歩き廻つた。しかし、すぐにたちどまつ

てまた力なくぐつたりと壁にもたれかゝつた。

テーブルの上の蠟燭は、ぢッぢ——ッと、かすかな音を立てゝ、やうやく燃え盡きやうとするところだつた、そのとき何か強い力がもや〳〵と彼の心の底に湧き起つてきた。彼はピストルの銃口を高く眼の先へつけて、小さな穴の中をのぞいてみた。この引金さへひけば……？

それだけで一切のものが滅びてしまふのではないか。——さあ、ほんの一瞬間だぞ！

ピストルを握つた彼の右手は知らぬ間に銃口を眉間の眞正面にあてがつてゐた。だが、心の中は水をうつたやうに靜かになつて、不思議に何の悲しさも騷がしさもなかつた。けれども彼はすぐにピストルをポケットの中へねぢこむやうに入れてしまつた。それから慌しく帽子をかむり、唇を嚙みしめたまゝ部屋の外へ出ていつた。ぱたんと強く扉をしめる拍子に、白蠟を溶かしつくした蠟燭の焔は前後小さくはためいたがしかし、そのまゝそれも消えてしまつた。

二階の階段をおりるとき、彼は自分の元ゐた部屋の中から、高い笑ひ聲にまぢつて、ぱちつ、ぱちつときれ〴〵にひゞいてくる、花札を敲きつけるやうな音を聽いた。無聊に苦しんだ浪花節語りの一行がきつと車座になつてあそんでゐるのであらう。その賑やかな高笑ひをうしろに殘して傾斜の急な階段を駈けおりると、

「ごちらへ——今頃？」

洋服を着た番頭が不安さうに眉をしばたゝきながら、ぬつと彼の前に立ちふさがつた。

「――ちよつと茶屋へ行つてお茶を飲んできますよ」

「茶屋？冗談ぢやない、――今頃あいてゐる茶屋が何處にあります、それに今夜はことによると暴動が起りさうだといふぢやあないですか？」

「いや、大丈夫――そのへんまで行つてすぐ歸つてくるからね」

彼は逃げるやうに門の外へとびだした。大股に呉淞路の方へ歩きだしたが、街はひつそりとして窓をあけてゐる家は一軒もなかつた。街路樹の葉が、ざわ〳〵と彼の頭の上で鳴つてゐる。彼の足はひとりでに碼頭の方角に向つて歩いてゐた。空の明るみの中に、遠く南京路のあたりであらう、――高い建築の屋根の上にそびえてゐる廣告燈が、斷續的に赤と青の色の空間にうかばせてゐた。その二つの色はさながら、生と死を表象してゐるかのやうに、不安にみたされた都會の空に瞬いてゐるのであつた。彼は、ぢつとその光りを見詰めてゐたが急に右手を上着のポケットへ突込んで、ぎつしりとピストルを握りしめたまゝ、決然として靜まりかへつた大道を歩いていつた。

第六章　女優燦珠

1

うらゝかな早春の陽ざしが、青いカーテンに沁みてゐた。

朝、十時——燦珠は自分の居間と壁一重に隔てられた細長い寢室のベットの中に羽根蒲團のふくよかな肌ざわりを感じながら眼を醒ました。彼女はしばらく横になつたまゝ、うつとりとした眼つきで天井を眺めてゐたが、しかし急に生々と四肢に張りみちてくる彈力で、全身にくすぐられるやうなむづ痒さを感じたので、力一ぱい兩腕を頭の上にひろげながら起きあがつた。

それから、髪をふりみだした寢卷姿のまゝで居間にはいり、すぐに正面の窓をあけた。すると、疏林の新芽のかほりが朝の微風とゝもに流れてきた。燦珠はついと窓を離れて鏡臺の前に立つた。——鏡にうつる自分の姿は彼女に新しい滿足を與へたらしく、鏡の中の自分と顏を見合はせて、くす〳〵笑ひだした。

そのとき、樹立をめぐる飛石づたひに人の足音が輕くひゞいてきた。——この家の娘がパンと紅茶とを小さな盆の上にのせて大事さうに運んでくるところだつた。燦珠は窓から顏を出して親しさうに笑ひかけながら。

「お恒ちやん——今、ゆかうと思つてゐたところなのよ、毎日ほんとにお氣の毒さまね、いゝわ此

處からいたゞくわ」

彼女は兩手を窓の外にのばした。

「――それから、あのお手紙が……」

小娘は、盆を燦珠にわたしてしまふと、懷ろの中から、同じやうな恰好の角封筒にはいつた二通の手紙をとりだした。燦珠はそれをうけとつて、ぢつと眺めてゐたがしかし、一通の手紙はそのまゝ封も切らないで、兩手で皺くちやに丸めたまゝテーブルの下の紙屑籠の中へぽんと投げ棄てた。

「……厭になつちまふわね　ほんとに、こんなお坊つちやんのお相手なんか、もう眞つぴらだわ！」

小氣味良ささうに鼻の尖をゆがめて、誰れに言ふともなく、きれぎれにさう呟きながら、もう一通の手紙の封を切つた。それを一息に讀み終ると彼女の顏に急に誇らしげな微笑がうかんだ。そこへ表門の方の通路から高い靴音がひゞいてきたので彼女は慌てゝ手紙をテーブルの上の文箱の底へかくした。

やがて、靴音は窓の前でとまつて、カーテンのすき間から一人の男が首をつき出した。

「あら――仁科さん、駄目よ、そんなところから覗いちや、今から御飯を喰べるところなのよ」

「だつて、もう十一時ですよ、何しろ九時の約束でせう、だから僕はちやんと時間どほりに來たんですよ――窓がしまつてゐたから敬意を表して、丸ノ内をひとまはりドライブして日比谷公園を歩いてそれから又やつてきたんですよ」

「ごめんなさいね、――わたし、うつかりしてゐて忘れてしまふところだつたのよ、ぢやあ、いつそのこともう少し寢てゐればよかつたわけなのね」

「おや、おや、その調子で今に僕の存在も忘れられてしまふんぢやないかな、――かういふ歌があります、齒磨の楊枝のごとく捨てられる若き男もある世なりけり、つてね」

「ずゐぶん、いゝ御機嫌ね、御自身でさう覺悟してゐらつしやれば間違ひないことよ、あなたが楊枝？、そんな何べんもいろんな女の唇を潜りぬけてきた楊枝なんか、せいぜい何處かの會社の給仕が靴墨でもなすりつける役にしか立たないことよ」

「……ひどいことになつたな、だがいゝさ、靴墨でも何でも我慢しますよ、――思ひ出は汝がやはらかき唇に――か」

仁科はさう言ひかけて慌てゝ言葉の調子を變へた。

「――冗談ぢやないですよ、何しろ自動車が待つてゐますからね」

彼はちらつと腕時計を見ながら早口に言つた。

2

燦珠と仁科を乗せた自動車は春光を正面から浴びて凹凸の烈しい郊外の道を疾走してゐた。眺望が左右に遠くひらけてゐるだけに平原をわたつてくる風はうすら寒く燦珠は靴下の絹をとほして迫つてくる冷氣にある快さを覺えながら久しく見たことのない、丘から丘につゞく松林や、赭土の肌をむき出しにした新道路の上をゆるやかな音を立てゝトロッコがすべつてゆくのを自動車の窓から無心に眺めてゐた。——

仁科は靴の尖で輕く拍子をとりながら、小聲で何かうたつてゐたが、不意に燦珠の肩を敲きながら、

「ね、ほら——あそこに山が見えるでせう、あの下が洗足池で、不良少年のあひゞきには持つて來いの場所ですが——何しろ相手は當代の人氣女優ですからね」

「お合憎さま——その相手が一流の聲樂家と仰りたいところでせうけれど」

「おや、おや、あなたの神經もずゐぶん速力が速いですね」

無駄口を敲き合つてゐるうちに自動車は少し勾配の急な坂を登りはじめた。兩側は赭土の斷崖のために陽ざしが遮られてゐるので霜どけの道は泥に糠るんで自動車の輪は稍もすると深い窪地に歛りこ

むのであつたが、しかしやつとその坂道を登りきると、いかにも新開地らしい小さな田舍街が彼等の視野を塞いでゐた。その田舍街の盡きるところに眞つ青な水を湛えた池の一部分が見えてきた。

「さあ、このへんで降りませう?」

右側に、池をめぐる丘にはいる古い門がある。その前で仁科は自動車をとめた。

門を入ると、仁科は先きに立つて、枯れた雜草に埋まつてゐる右側の道を象牙の柄のついたステッきをふりふり歩いていつた。

うねうねと曲る道の果ては深い雜木林をうしろに控へた廣場になつてゐる。——そこからはひろびろとした池の水面がすぐ眼の下に見えた。池は硬ばつたやうな靜けさにつゝまれ、その上にうすく冴えた空の色が映つてゐる……。

「何だか、いゝ氣持なのね——何時までも、わたし、かうやつて立つてゐたい氣がするわ」

「御隨意にどうぞ、——その間に僕は一つあなたと二人きりになる場所を探してきますからね」

仁科は一種の氣取り方で、斜に右肩をそびやかしながら池に向つた、だらだら坂を下つていつたが二分と經たないうちに歸つてきた。

「池のふちに、何處からも見えないやうな素敵な場所がありますよ、——おまけに、もう一つその前にボートがつないでありますから、若お望みなら何時でも僕の腕をお目にかけますよ、——この鏡

のやうな水面を眞一文字にわたるのもずゐぶん贅澤ぢやないですか！」

「その勢ひで、ついでに裸體になつて泳いでゐらしたら如何？」

「——勿論！」

仁科は大きく胸を敲いてみせながら

「あなたにその勇氣があればね、僕は立派に向ふ岸まで送り屆けて御覽に入れます」

わざとらしく決然とした調子で言つたが、しかし、その聲の底には多少の眞實が籠つてゐた。

「まあ、いゝかげんになさいよ、誰もいないと思つて、いゝ氣になつて、——少し靜かになさい、誰か來るかも知れないぢやないの！」

燦珠はきめつけるやうな聲で言つたが、仁科が慌てゝその言葉に應酬しようとしたとき、早くもその誰かの足音が反對側の道からすぐ間近に聞えてきた。

3

「ほら、誰か來たぢやないの！」

燦珠は、馴れた手つきで、仁科の肩を輕く突きながら、慌てゝ身體をうしろへひいた。

そのとき、左手の窪地のへりから、黑いソフト帽をあみだにかぶつた一人の男がぬつと首をつき出

したのである。——

「あら……」

その男と視線がばつたり合ふと燦珠は思はずぎきつとした。だがしかし、彼女はすぐに平靜な笑顏にかへつて、その男の方へ近づいていつた。

「——とんでもないところで會ふものね、わたし今日は新鮮な空氣を吸ひにやつてきたのよ」

「そりやあ結構ですね、——」

その男は冷やかな聲で言つた。そこへ、仁科が愛想よく帽子をとりながらやつて來た。

「——南里さんでしたね、何時かの晩は失禮しました。あのときにもお近づきにならうと思つたんですけれども、あまり多勢で居たもんですから……」

「いや、もう僕こそ——それよりもこんなところで、君たちのランデブウをおびやかしたやうになつてしまつて實に恐縮して居るんですよ」

南里は氣輕な調子でさう言つたが、しかし仁科の顏にはかすかに不快な表情がうかんだ。

「ランデブウでもないでせう、——男と女が郊外散歩に來たつて何も……」

「いや、——」

南里はぢろりとその横顏を眺めながら、

「さう正面からくるもんぢやないよ。僕は冗談を言つてゐるんだから――それとも君は僕の言葉に何か屈辱を感ずる理由でもあるんですかね」

「何を言つてゐるの――どつちにしても同じことだわ、仁科さん、だからあんたは女に好かれないのよ」

燦珠はたしなめるやうな聲でさう言ひながら、南里の方を向いて――

「何處かこのへんに紅茶でも飲ませるやうなところは無いの、立つてゐると少し寒いわね」

「ありますよ、この雜木林の向うに――だか僕は失敬しますよ」

「どうして、南里さん？」

「こんな恰好をしてお伴をするのは氣がひけますからね」

彼は羽織つてゐる洋服の外套の下からはみ出てゐる垢じみた褞袍の袂をつかんで見せた。

「だつて、――あなたはさういふ人になつてゐるんぢやないの、いいわよ、今日だけは特別にモダンガールと席を共にすることをゆるすわよ」

「そいつは光榮ですね――ところで斷つておきますがね、僕はビールを頂戴しますからね……」

「うるさい人ね――文句を言はないで早くいらつしやいよ」

弱い早春の陽ざしは何時の間にか雲に掩はれてゐた　風が出たのか、水面にうつつた周圍の風景が

ざわ〳〵とくづれはじめた。

南里が先きに立つて三人は、未だ少しばかり霜溶けのあとを殘して糠るんでゐる雜木にかこまれただら〳〵坂を下りていつたが仁科の顏には暗鬱な表情が次第にひろがつてゐた。――彼は燦珠のあとから少し離れていま〳〵しさうにステッキで虚空をうちながら歩いていつた。

4

平家建の古いレストランが廣い坂道を越えた丘の上にあつた。それは外から見ると、レストランといふよりも、むしろ小さな園亭といふ感じに近かつた。南里は先きに立つて硝子戸のそばのテーブルに席をとると、すぐにうすいカーテンをあけた。此處から見ると、蒼々とゆれてゐる湖面の一角は、對岸をめぐる松林の丘陵にかこまれてゐるので、それはまるで、うしろに渺茫たる海を控えた入江のやうな感じだつた。――燦珠はハンドバックの中からコンパクトをとりだしながら、

「ずゐぶん、いゝところなのね、洗足池つてわたし、もつと小さな池かと思つたわ」

「今ごろはいゝですがね、――春になると大へんですよ。何處から集まつてくるかランデブウのむれがぞろ〳〵やつてきますよ、何しろひとりで歩いてゐる男の顏が間がぬけて見えるほどですからね」

「そんなところなの――でも、今ごろはまるでひつそりしてゐるぢやない」

燦珠はちらりと南里の横顔に親しみにみちた流し目を呉れながら、

「だけどへんよ、あなたは何うしてこんなところをひとりで歩いてゐらしたの、――こつそり誰かを待つてゐらしたんぢやないの？」

「何のことですか、それは、――さつきの僕の言葉に對する逆襲といふわけですか、だがそいつはお氣の氣だが鰻蛇ですな、寒いのにこんなところまで、あひゞきにやつてくる馬鹿はゐませんよ、――僕はもう一時間近くぶら〳〵してゐるんですが、未ださういふ醉狂な連中には一組しか會ひませんよ」

南里は、ぶつきらぼうな調子でさう言ひ捨てゝから、ぼんやりテーブルのそばに立つてゐる色の白い丸ぼちやの小さい女給に、紅茶とビールを命じた。

「――一組？でもそんな人がゐた？」

「えゝ、丘の上に立つてゐましたよ、この風景の點景人物にしては少し華やかすぎるほどの美人がね」

南里は彼とテーブルを隔てゝ向ひ合つた椅子に、むつゝりとして口を噤んでゐる仁科の頰の肉がそのときぴり〳〵と動くのをぢろりと眺めながら言つた。

「いゝことよ、――」燦珠はわざと身體をくねらせるやうにしてそつぽを向いた。仁科はステツキの尖で床板の上をこつ〳〵敲いてゐたが、それは努めてこの場の空氣に調子を合せようとしてゐるやうに見えた。しかし、さうすればするほど彼の顔には抑えがたい苛立たしさが現はれてきた。

間もなく女給が紅茶とビールを運んできた。――南里は半白い泡にみたされたコップをぐつと一息にあけてしまつてから、

「ところで――、近ごろ荒川から何か手紙は來ませんか？」

「――急に何故そんなことを仰しやるの？」

「いや、あの男が、ほらこないだの晩、銀座のカフエーで會つた男があるでせう、――あなたが荒川の住所を知らせてくれと言つて賴んだ……あの男がもう上海へ着いて居るころですから」

しかし、その言葉が終るか終らないうちに仁科が不意に立ちあがつた。

「――話の途中で失禮ですが、僕はちよつと失敬してボートを漕いで來ますよ」

彼は殊更、ほがらかな笑顔を示さうとしたが、しかし、そのためにかへつて頰の肉がひきつゝたやうにゆがんでしまつた。その敵意と憤りに然えてゐる瞳を南里は冷やかに彈きかへしながら、

「まあ、待ちたまへ、君はずゐぶん氣の早い男ですね、――それに第一、世の中には禮儀といふものがあるからね」

そのとき、雲の層をやぶつて流れてきた午後の陽ざしのために池の水面は急にきら〳〵と輝きはじめた。

5

「――ぢやあ僕が何かあなたに無禮なことでもしたと仰しやるんですか？」

仁科の唇は血の氣を失つたまま顫へてゐるのであつた。何よりも彼には自分の眼の前に腰かけてゐる不愉快な男が――言葉といふよりもむしろ、身體全體で――自分を輕蔑してゐるといふ感じを避けることができなかつたのである。瞬間、南里の顏面には異常な緊張が現はれたが、しかし、彼はすぐに笑ひだした。

「何ですか、――君は莫迦に苛々してゐるね、僕は何も自分のやうな無賴漢に禮儀をまもつてくれと言つてゐるんぢやないよ、――此處にゐる一人のレディに對して男性としての義務を果さうとしたまでだ、つまり、騎士としての君の怠慢を責めたいといふ丈のことさ」

彼は三杯目のコップをあけてから、部屋の隅でしきりに髮を直しながら、きよとんとした眼付で彼等の方を眺めてゐる女給に眼顏で新しいビールを運んでくるやうに命じた。

「――いや、ありがたう、だが、僕に興味の無い話を聽く必要はありませんから、やつぱり、僕は

ボートを漕いできますよ」

仁科は苦々しさうな微笑をうかべて立ちあがつた。彼には何故自分が、かうも昂奮しなければ居られないのかまるでわからなかつた――おれはもう二分間、この男と向ひ合つてゐたら何をやりだすかもわからないぞ！

「ぢやあ、直きに歸つてきますから」

彼は燦珠の方を向いて、さう言つてから部屋の外へ出ていつた。しかし、外へ出ると新しい憎々しさが急にこみあげてきたのである。何だ、あの破戸漢は――まるで人を罵る權利を天から授かつてゞもゐるやうな顏をしてゐやがる――、彼は毒々しさうに心の中で呟きながら、思はず肩をそびやかした。……彼には何よりも戀人の面前で自分の存在が無視されたといふことが、そして燦珠と自分との間にやうやく燃え立つてきた情熱が、南里の出現によつて妙にぼやけてしまつたことが、わけもなく腹立たしくなるのであつた。しかし、その考へは彼の足が池に近づくにつれて、ぢり〳〵と變つてきた――。彼は、あのレストランの部屋の中に燦珠を殘してきたことが急に不安になつてきたのである。すると、彼はずつと前に燦珠の部屋の中で始めて彼と向ひ合つたときの荒川克彥の、あの苦しさうな顏を思ひだした。そのときに無言のうちに二人の間にかきたてられていつたひそやかな敵意がふたゝび彼の胸の底に甦つてきた。

その感じは、しかし思ひがけなくも、彼の心の中に萠えてきた新しい嫉妬と調を合しはじめたのである。——あの男はことによると自分の友人のためにおれに復讐をしようとしてゐるのではないか！

仁科の胸は急に、けつそりとした心細さで一ぱいになつた。何よりも彼にとつてはすべての女を自由にすることができるといふ誇の傷つけられたことが悲しかつた。彼はその悲しさをまぎらすためにステッキで拍子をとりながらうたひはじめたのである。靜かな大氣の中に滑らかな聲が美しく溶けていつた。その聲のひゞきにぢつと聽き惚れながら、彼は新しい欲情が撥ねかへるやうに湧いてくるのを感じた。——

さうだ、今夜こそ、——今夜こそ、どうしてもおれはあの女を自分のものにしてみせるぞ！

彼は全身に疼くやうにひろがつてくる情熱に、戰くやうな快よさをおぼえながら、ひらりと水際につないであるボートに飛び乘つた。

6

南里玄作は默つてテーブルの上に頬杖をついてゐた。彼は硝子戸越しに、肩をいからして水際の方へ歩いてゆく仁科のうしろ姿を眺めてゐたが急に燦珠の顏の上に高らかな笑ひを浴せかけながら、

「何です、彼奴は一體？素晴らしい熱情家ですね。今の權幕ぢやあ、僕は決鬪でも申込まれるんぢやないかと思つて冷々してゐましたよ！」

彼は非常に氣輕な穩かな調子で言つたが、しかし、燦珠は唯、かすかに唇を動かしたゞけで物を言はなかつた——。彼女は南里の毒を含んだ皮肉が仁科に對してだけではなく間接には自分に對しても言はれてゐるといふ感じを避けることができなかつた。すると彼女の胸の底には何とも知れず不愉快な苛立たしさがこみあげてきたのである。だが、少しばかり殘つてゐる彼女の自尊心は急にむくむくと頭を擡げはじめた。

「——あなたは妙な方よ、あんな純粹な、人のいゝお坊つちやんを如何して輕蔑しなければゐられないんでせう？」

「これはどうも——うつかりすると、あなたからも決鬪を申込まれさうな形勢になつてきましたねまあ、そんなにむきにならないで下さい——あの男を輕蔑しなければ居られないのは、つまり僕は本能的に猿といふ動物が嫌ひだからです」

「猿ですつて、——そんなことをあなたは本氣で仰しやるの？」

「本氣？いや、勿論」

彼は燦珠の顏の色が憤りと恐れとのために次第に蒼白くひきしまつてゆくのを見詰めながら、半

分ほどコップにあまつてゐたビールをぐつと飲み乾した。

「――もつと確かな言葉で言ひませう、僕はあの男を輕蔑しなければ居られないほど、あの男に敬意を――いや、存在を認めてゐるんです、何故かといつて、明かにあの猿のごとき人物は現代の英雄ですからね」

「ひどいことを仰しやるわ――仁科さんが猿なら、ぢやあ、わたしは何なの？」

燦珠は何時の間にか、ぢり〳〵と南里の毒舌の罠に陷つてゆく自分を感じてゐた。それは喩へやうもない齒がゆさであつたが、しかし、それにもかゝはらず、びしびしと鳴る鞭の音にぢつと耳を澄ましてゐるやうな快よさの中に心を委ねたい氣持になつてゐるのであつた。

「あなたは女ですからね、――僕よりは前に女を三つの種類に分けた哲學者がありますよ、猫と、烏と、牡牛と、……だから、この中でどれでもお好きなものを選んで下さい」

「何とでも仰るがいゝわ、――さういふ理窟はあなたのお友だちの荒川さんにでも吹込んであけなさいよ」

「荒川なんぞ此際論ずるに足りませんよ、それよりも、もう少し僕にわれ等の仁科を讃美させて下さい、――あの英雄が何故に新しいかといふことについて、――あの男は反省といふことを知らないんです、だから、あの自信に充ちみちた顏付をごらんなさい、まるで、すべての男から尊敬を、すべ

ての女から愛を、……といつた調子ぢやないですか！」

南里は言葉に追つ駈られるやうな氣持で一氣にしやべりつゞけてゐたが、しかし急に硝子戸の方に視線をうつしながら愉快さうに笑ひ出した。――

「ね、ほら、ごらんなさい、――あなたの騎士がボートを漕いでゐますよ、あの颯爽たる姿を見て僕のかき立てた不快を一掃するんですね」

彼は新しくついだビールをぐつと飲みほした。

7

「――南里さん、もう澤山よ、わたし、あなたの毒にあてられすぎて、息苦しくなつてきたわ」

「僕の毒に？……いや、僕には毒なんかありませんよ、唯、少しばかり嫉妬を妬いてゐるばかりです」

「嫉妬ですつて、――嫉妬なら嫉妬らしくなさいよ、いやに哲人ぶつて、言葉をひねらなくつてもいいぢやないの、わたし、何だか、もう頭か痛いわ」

「ぢやあ、……」

南里は素早く立ち上つてゐた。

「此處を切上げて、もう一度新鮮な空氣に觸れたらいゝでせう、その丘の上まで行つて僕は失敬しますから」

燦珠が慌てゝ何かいはうとしたとき、南里はもう小さい女給の手から勘定書をうけとつてゐた。外へ出ると、池をわたつてくる午後の微風は、早くもたそがれの冷たさを含み、遠く見える新しい文化住宅の白いペンキの色が弱い陽ざしの中に溶けてゐた。――二人は丘の下の道をならんで歩いていつたが、しかし一口も物は云はなかつた。燦珠は頭がもや〳〵として何かしら不愉快な、例へば胸の中がすつかり雜草で埋まつてしまつたやうな重苦しい氣持になつてゐたが、それにもかゝはらず名狀することのできない快よさがぢりぢりと心の上にのしかゝつてきた。彼女は南里の、無雜作に吐き捨てた言葉を何時の間にか頭の中で繰返してゐるのであつた。――

燦珠は、少しビールに火照つた南里の横顏が、一種の威嚴をもつて自分の視野の中にひろがつてくるのを、茫然として見上げながら、――この不愉快な男は、それにしても、何といふ力を持つてゐるのであらう、――彼女はさう思ふことによつて、自分が完全に南里に翻弄せられたといふ意識の中に今はむづ痒いやうな陶醉をすら感じてゐるのであつた。――

道が盡きて水際に下る坂の上まで來たとき南里は急に立ちどまつた。

「――僕は此處で失敬しませう、僕の家は此處から半道ほどありますからね　今から、ゆつくり歩

いて歸りますよ、……それでは」

「だけど、仁科さんの自動車が待たせてあるのよ、どうせ同じことですもの、近くまでお送りしますわ」

「――いや、そんな必要はありませんよ、僕は歩いて歸りますから！」

南里は突放すやうに、さう言つて、もうくるりと踵をめぐらしてゐた。そのまゝ、彼はうしろを振向かうともしないで、砂利を敷いた坂道に高く足駄の音を殘しながらのぼつていつた。――

燦珠は妙にたよりない氣持になつてゐた。言はゞ、それは不意にうしろから抵抗することのできない力で跳ね飛ばされたやうな感じだつた。しかし、そのとき仁科の唄ふ旋律を帶びた聲音が丘の下の方から聞こえてきた。けれども――その、もつれるやうに空間にひろがつてゆく微妙な調音すらも今の燦珠にはすべての魅力を失つてしまつてゐた。

「おや、――此處にゐたんですか、それで如何しました、あの野良犬のやうな男は？」

何時の間に來たのか、仁科が樹立の間から、悄然として立つてゐる燦珠の顏を覗きこんでゐるのであつた。

「南里さんでせう、――今、歸つたばかりよ、でも、あの人は、あなたのことを猿だと言つてゐたわよ」

「猿だつて――僕が、僕は今まであんな不愉快な男を見たことはありませんよ」
「向うでもさう言つてゐたわよ――だけど仁科さん、わたし、もう歸らなければならないわ、今夜六時に帝國ホテルで會ふ約束になつてゐる人があるんですもの」

8

「帝國ホテルですつて、――そこで誰があなたを待つてゐるんです？」
「あら、そんな顏をするもんぢやないわ、わたしを待つてゐるのは近代劇場の經營者なのよ、――だから、きつと、次ぎの出し物の相談でもするんだわ」
「袋井さんですか、それなら何も帝國ホテルを選ばなくつてもいゝでせう、自宅でもいゝし、事務所でもいゝし……」
「ところが、さうはゆかないのよ、――劇團の內部とくるとそりやあうるさいの　それにね、わたしはいま、さうでなくつても自分勝手なことをしてゐるやうに思はれてゐるのよ、――だから」
「いや、わかりましたよ、――ぢやあ、僕も帝國ホテルまで同道しませう、ごうせ、そんな用事なら直ぐ濟むでせうから、それまで僕はグリルで飯でも喰べながら待つてゐませう」
「わたし、そんなうるさい人は大嫌ひよ、……　そんなに心配なら何處までもついてゐらつしや

るがいゝわ」
「ついてゆきますとも、――今夜はね。」
仁科は燦珠に近づいて、右手を輕く握りしめながら、
「――今夜はね、僕の方に重大な相談があるんですよ！」
その聲は生々とした情感にみちてゐた、燦珠はその手を握りかへさうともしないで、そつとふりほどきながら低い雜木林にかこまれた細い坂道を、街道につゞく古い門の方へ靜かな步調で步いてゐつた。
午後の空はふたゝび曇つてきた――池の向ふ岸は灰色の雲のために日の光が遮られてゐるので、樹間にひらめく風景は煤けた墨繪を見るやうにぼやけてゐた。
池のふちの小さな茶店の前には五六人の男が一列にならんで釣絲をたれてゐるのが見える。――埃つぽい街道を石を積んだ荷馬車が一臺、無氣味な轍の音を殘して通つてゐつた。長閑な馬子の唄がゆるやかに空に顫えながら、しかしそれも次第に遠ざかつていつた。燦珠は身體全體に妙に痺れるやうな疲れを感じてきた。憂鬱な自然の中に心を沈めてゐる人間の頭にときとして、思ひがけない過去の風景が通り過ぎることがあるやうに、彼女は、悲しみも喜びも、今はあまりに遠く隔たりすぎてしまつたところの荒川克彥の顏を思ひ出したのである。……

「如何したんです、――莫迦にふさぎこんでゐますね、帝國ホテルは六時でしたな、するとまだ一時間はたつぷりありますから、品川の方を迂廻して歸りませう」

「えゝ、――わたし、昔の戀人のことを考へてゐるのよ」

「昔の戀人？それは誰です、あの若い小説家ですか――荒川何とかいふ？」

「誰だつていゝわ、――あなたの干渉を受ける必要はないことよ」

「なるほどね、權利は無いかも知れないな、だが、干渉をする義務はありさうですよ」

「如何して？」

「――燦珠さん」

仁科は一つの衝動に堪えられないものゝやうに、小さな燦珠の身體をうしろから、ぎゆつと抱きしめた。そのまゝ首筋に鋭く接吻した。――惡魔的な熱情が彼の胸の底から嵐のやうに起つてきたのである。

9

帝國ホテルの二階の一室には、近代劇場の經營者である袋井信策が安樂椅子のクッションに身體をうづめながら、葉卷をくゆらしてゐた。短く刈りこんだ口鬚、赤味を帶びた頬、濃い眉毛、――それ

等のすべてにいかにも事業家らしい生氣にみちた彈力がひそんでゐた。彼はとき〳〵腕時計を見た。その眼はぢつと考へこむやうに窓に近いテーブルの上のスタンドの青い絹の笠を洩れる光をぢつと見詰てゐたが、やがて、ゆつくりと立ちあがつて、兩腕をうしろで組合せたまゝ廣い部屋の中を輕く調子をとつて歩きだした。――

眼の前の卓上電話のベルが氣魂ましく鳴りだした。慌てゝ受話器を耳にあてがつた彼の顏には忍びやかな微笑がうかんできた。――

それから彼は太い聲で、

「……あゝ、さう、ぢやあ、すぐ通してくれたまへ！」

電話をはなれると、彼はふたゝび、元の安樂椅子に腰をおろして、殊更、悠揚とした態度で葉卷をくゆらしはじめた。扉をノックする音が聞えたのは、それから二分と經たないうちだつた。

「どうぞ！」

彼は葉卷の灰を絨氈の上に落してからどつしりとした響のある聲で外のノックに答へた。重い扉が靜かにあいた。入つてきたのは燦珠であつた。――彼女は妙にそわ〳〵した面持で、袋井の顏に笑ひかけながら、

「お手紙拜見しましたわ、――だけど、今日は、つまらない約束をしたもんですから、すつかりお

そくなつてしまつたのよ」

「――僕も、ことによると、このまゝ此處で一夜を明かすことになるんぢやないかと思つてゐましたよ」

「でも、何か急な用件ですの、何だか心配になるわ、どうせ袋井先生のことだから半分は酔狂だと思つてはゐたけれど」

「どうして、――いや、却々、われわれにとつては死活の問題なんですよ」

袋井は、自分のそばに燦珠の席をあけながら言つた。

「――ほんたうですの、それは、わたしにも關係があることなの？」

「もちろん、――われ〳〵全體の問題ですからね、だが、話はゆるゆるすることにして、如何です夕飯を一所に喰べませう、實はそのつもりで、グリルに席をとつてあるんですが」

「グリルに？」

「えゝ、――大食堂の方より、あの方がかへつて知人に會ふおそれがありませんから、それに今頃の時間だと、客はほとんどゐませんよ」

「だけど、――グリルだとわたし困るわ、ほんたうを言ふと、わたし送り狼を一匹つれてきたのよ」

「ほう、――ぢやあ、その狼がグリルで待ち伏せしてゐるといふわけですか！」

「さうなのよ、それもね、始めは小さなテリア位に思つてゐたのが何時の間にか狼になつてしまつたの、――その狼が今夜は氣が少し荒くなつてゐるといふわけなのよ」

「誰です、――牙をみがいてゐる狼は、だが向うが狼なら今夜は僕は猪になつてもいゝです、よ――いやいつそのこと虎にならうか、兎に角狼を退治する役目を僕が一任しませう」

「さうはゆかないことよ、――かりに狼を逃れたとしても、虎に喰はれなければならないんなら同じことぢやないの」

燦珠は、次第に昂奮してゆく袋井の顏を覗きこみながら、囁けるやうな聲で言つた。

10

燦珠は少し間隔を置いて、袋井の横の席についた、袋井はその横顏をぢろ〳〵と眺めながら、――

「それで、一體、誰なんです、あなたを餌食にしようとする送り狼は？」

「――わたしのパトロンなのよ、だけど、何もその人にかぎらないわ――男は自分の都合のいゝときには何時でも送り狼になることよ、……だけど、ほんたうにわたし今夜は御馳を喰べる氣になれないの、重大なお話だけ伺つたらもう失禮するわ」

テーブルの上にはペパーミンの瓶が置いてあつた。袋井は默つて立ちあがつて、細長いグラスを燦珠の方にすゝめながら、大きな瓶の栓をぬいてゐた。——

「どうです、一杯やりませんか、あなたは少しそわ〳〵してゐますよ、一杯やつて、すつかり腰を落ちつけてしまつたら如何です」

「——でも、わたし、今夜はとても疲れてゐるのよ、こんなときにはゆつくりした氣持で話が出來ない性分でせう——だから、あなたの御用件だけ早く伺ひたいわ」

燦珠はとろ〳〵と透明なグラスをうづめてゆく青い液體を見詰めながら言つた。

「いやに短兵急ですね、——すると、やつぱり、狼の餌食になりたいんですかね」

袋井はふゝんとせゝら笑ふやうに鼻をゆがめた。それから、資本家らしく應揚な調子で笑ひだしたが、しかし その聲は燦珠の耳には一種の野獸的なひゞきをもつて迫つてきた。

「さあ、——さうかも知れないことよ、だつて虎よりも狼の方が御しやすいぢやないの、わたしだつて猛獸を使ふ位の術はちやんと心得てゐるわよ……」

「おや、おや、ぢやあ、僕もあなたに使はれるために一つ猛獸を志願することにするかな」

彼は、にやりと笑ひながら、テーブルの上に置いてある鋏で新しい葉卷の口を切つた。

「——あなたはもうそんな資格を失つてゐらつしやることよ、だつて、わたしたちはあなたの鼻息

をうかゞつて生きてゐる人間ぢやないの——」

「そんなに僕を特殊階級にまつり上なくつてもいゝでせう、僕だつて人情もあれば意地もありますよ——それに戀愛にしたつてね……」

「戀愛——？そりやあ女を自由にすることは出來るかも知れないわ、だけど戀愛といふのはお互同志の間のことよ」

「勿論、そうですとも、僕は近代劇場の經營者といふ假面をかぶつてゐますがね、そんなものは何時でもぬぎ捨てますよ、現に僕は個人的には……」

彼は急に燦珠の方にゝぢり寄つて、金屬的に細いひゞきのある聲で言つた。

「個人的では、あなたを愛してゐますよ」

しかし、その聲には、かういふ種類の人間が、自分の安全を保證するための巧な手段として、もしまかり違つたら冗談にまぎらしてしまふことができる程度の豊な餘裕が殘つてゐた。

「——個人的にですつて、難かしいのね、個人的といふのはどんな風な愛し方なの？——」

燦珠は、もう我慢がしきれなくなつたといふ感じを、誇張した表情の中に示しながら、ぞんざいな調子で笑ひだした。

「——個人的といふのはね、僕とあなたと差向ひの場合だけのことを言ふんです」

袋井は、ほとんど衝動的に立ちあがりながら、

「例へば、今夜のやうな場合ですね」

彼は大股に扉に近づいて、がちやりと鍵をおろした——虎が、いよ〳〵本性を現はしたのである。

11

仁科は、グリル食堂の、入口から向つてすぐ右側の窓に近い食卓についてゐた。——そこにゐるとホテルの内部につゞく階段が眞つ正面に見えるからである。

彼は、その階段に靴音がひゞいてくるごとに顔をあげた。……腕時計の針は間斷なく時を刻んでゐる。分秒を追ふその針の動きを眺めながら、新しい空想の中に波うつ彼の情熱は次第に高まつてくるのであつた。六時、——七時、その七時が、もうあと十分で八時にならうとしてゐる。

だが、食堂の中は割合にひつそりしてゐた。彼はプレンソーダにまぜたウヰスキーを、ゆるやかな食事の合間にちびり〳〵と舐めるやうに飲んでゐたが、しかしその一杯がやつと終るころには顳顬がしきりに痛んできた。それから、耳の中が、がん〳〵鳴りはじめた。——

彼の頭の中には、燦珠の肉體が艶やかな色彩に包まれた美しい曲線を描いて、のたうち廻つてゐるのである。さながら、それは、一枚の古風な錦繪であつた。——噛みしめるやうな甘い快樂の豫想で

彼の頭は一杯になつた。そして、全身がわな〳〵顫えてきた。

正面の臺の上には電氣スタンドが二つならんでゐた。青と白のうす絹の笠を透して洩れてくるその明かるい火影が、遠近法のやうやく狂ひかけた彼の視野のうちに春めかしい憂愁を湛へて、ぼうつとひろがつてゐるのであつた。だが燦珠は、それにしても、一體どうしたのであらう——？

仁科はそつと腕時計を見た。八時である。彼は急に苛々してきた——そのとき、ふと、稻妻のやうに仁科の腦底を、同じ建物の中の彼の知らない部屋で、燦珠と袋井とが、向ひ合つて話しこんでゐる姿がひらめいたのである。すると空想のフイルムはわけもなく、ずる〳〵とひらけてきた。彼は、まるで怪奇な夢を見てゐるやうな氣持になつた。だが、その無氣味な幻像は、彼の胸を不安のために暗くとざしてしまふよりも前に、燃え立つてゐる感情に新しい油をそそぎ入れたのである。——

一組の西洋人が正面の階段を上つつてゐつた。それから、またひつそりとなつた。その靴音がすつかり消えてしまつたとき、彼はたしかに、そつとうしろから自分に近づいてくる人の氣配を感じた。

慌てゝ、ふりかへると、燦珠が唇を顫はせながら立つてゐた。顔の色の蒼ざめてゐるのが、どろんとした仁科の瞳に美しくうつゝてきた。……

「おや、あなたは何處から來たんです？」

「外を廻つてきたのよ」

燦珠は棒のやうに突つ立つたまゝ笑はうともしなかつた。

「如何したんです、——お掛けなさいよ、今、僕は袋井さんの部屋を訊いて電話をかけようかと思つたところですよ」

仁科は、命令するやうに彼の向ひ側の席を指しながら言つた。

「でもね、わたし、今夜はもう失禮するわ、何だが大聲をあげて、ひとりで泣き出したいやうな氣がするのよ」

「何故です——如何したといふんです?」

「わたしね、ひとり考へたいのよ、——でもずいぶん待たせたわね」

燦珠は髪の毛の亂れを直しながら、仁科の横の席にくづれるやうに腰をおろした。

12

「すると何か面倒な話でもあつたんですか?」

「——何でもないのよ、わたしねあんな劇團にはもう用が無いの、だから、きつぱり片をつけてきたといふだけのことよ」

燦珠は、さう言つてから、はじめてわれにかへつたやうに、ぎよつとして顏をあげた。彼女は、思

ひがけないことをしやべつてしまつたといふ氣持に襲はれながら、しかし、それにもかゝはらず彼女の心は自分が何をしやべつたのかまるでわからないほどに烈しい昂奮狀態をうろついてゐた。

「ほう、——まるで突飛な話ですね、すると袋井さんが何か言つたんですか?」

「何でもないのよ」

彼女は同じ言葉を繰返しながらそつと胸に手を當てゝみた。心の底に殘滓のやうに殘つてゐるものは、重い石で、ぎしぎしと上から壓えつけられるやうな、息苦しい無氣味な感覺ばかりだつた。眼を瞑ぢると、呼吸の縮むやうな物狂はしい陶醉が全身の血管に小さく波をうつてゐる。毒々しく輝いた瞳——野獸的な力强さにみちた烈しい抱擁——憎々しい情感にみちあふれた袋井の赤黑い頰のにほひは、目まぐるしい回想の中からしつとりとうかんでくるのである。——。

彼女は、夢から醒めた夢遊病者のやうに、ふら〳〵と袋井の腕からはなれてわめくやうに叫びたてた自分のあさましい姿を思ひうかべた。

わたし、もう、あなたの支配なんか受けたくないわ、さあ、扉をあけて下さい、扉を——今夜かぎり、近代劇場なんぞに用は無いわ……。彼女が飛び立つやうに、さう言つたとき、袋井はうす氣味のわるい笑ひを唇の上にうかべた。彼は冷然として、ゆがみかゝつたネクタイを直しながら、その自信にみちた瞳はかうさゝやいてゐた……さあ、逃げられるものなら逃げてみろ、——お前はすつ

かりおれのものになつてしまつてゐるんぢやないか！

燦珠は、その回想の中で、自分の身體が、ずたゞ〳〵に、ひき裂かれてしまつたやうな氣がした。袋井の兩腕の中に顫えてゐた自分の姿を思ひだすと、――自信も、誇も、輝いた將來も、美しい夢も、名譽も生活も、ありとあらゆるものが一息に踏みつぶされてしまつたといふ氣がした。暗い、けつそりとした絶望感がひた〳〵と彼女の心に迫つてきたのである。

しかし、仁科は、虚ろな表情のうかんでゐる燦珠の蒼ざめた顏の中から、明かに一つの出來事を讀みとつてしまつた。――さうだ、この小鳥は見事にあの肥つた資本家の張つた網に引つかかつてしまつたらしいぞ！

すると、急にうそ寒い感じが、板戸のすき間を洩れる風のやうに彼の胸の底を突つ走つた。それは非常に貴重なものが、傷ついてしまつたのを見たときの感じに似てゐたが、しかし、それだけに、今は何の躊躇もなしにまつたく無雜作にそれを扱ふことのできるといふ氣持が彼の心をすつかり自由にしてしまつた。――どつちみち同じことさ、今こそ、おれは何でも出來るぞ、――彼は、さう、自分に對して呟きながら、

「兎に角、此處にゐたつて仕方がないでせう――外へ出てから、ゆつくり話を聞きますからね」

「お話し――わたし、お話しなんかちつとも無いのよ、それよりも今かは、ひとりで歩りたいの、

何も今更あなたの御意見を伺ひたくないわ」

「えらい權幕ですね、だが兎に角此處を出ませう」

仁科は、落ちついた態度で、テーブルを離れながらにやりと笑つた、戰はずして敵の牙城を陷れたといふ喜びの中に、ふたゝび彼の情熱は燃え立つてきた。外へ出ると門の前に自動車が待つてゐた。燦珠は何の拒む力もなくその中へ追ひこまれてしまつた。

早春の夜は更けてゐた。燦珠は力なくクッションに身體を埋めて今は如何にでもなれといふ感情に心をまかせながら、自動車の窓に火照つた額を押しつけた。

第七章

一九三〇年

1

一九三〇年代の日本は、その全段階を通じて、明かに一種の發作的症狀を呈して居た。ちやうど、ヒステリーが起つて狂ひかけた女のやうに。——

すべての社會相を彩るものは混沌と不安の深い影であつた。一つの軌道に定着して居る時代の動きは、ピントがまつたく外れてしまつた。長い間、一方にかたむいて居た社會のシーソーは、やうやくぎし〳〵と絶え間なく搖らぎはじめた。かういふ時代の空氣を呼吸して生きて居る人間は、片足だけで、やつと斷崖の上に立つて居るやうなものである。一歩誤れば、彼等は深い生活の谷底に轉落しなければならないのだから。……彼等を支へてゐるものは、一日々々の安全を望む小さな宿命觀だけになつた。夜が朝になり、朝が夜になるといふあたり前すぎる假説の上に茅生えた刹那的な享樂主義が人間の生活から、空想的なもの、——永遠的なものゝすべてを追拂つた。

世界は一日ごとに變つてくる。——時代の慘忽性は、むき出しの姿を現はして古きものをことゞく破壞した。見よ！一本の古い道德の針は、もはや社會のほころびを縫ふに堪えなくなつてしまつてゐるではないか。この不安の波をくゞつて、低劣にして俗惡なるアメリカニズムは、靜かな街頭を、廣告とポスターでうづめてしまふとゝもに、感傷的な女學生の胸にモダンガアルの英雄主義を植つけ

た。無數のカフエー、チエア、レボリユーションのむれは、右のポケットに催情藥を忍ばせ、左の腕にはマルクスの資本論を抱えて、彼等の情熱を一杯の混合酒に溶かしこんだ、ダンスホールは家庭の暗鬱を逃れてきた若い細君たちの、大つぴらな、あひゞきの殿堂となり、宵の郊外電車は、妻の嫉妬をおそれる、おろかな亭主の酒に火照つた萎びた顏によつて埋まつてゐた。——

この社會相の縮圖に觸れたい人は、夜、十時、新橋の橋畔に立つて、街燈の光の烈しく交錯する大通りを、ちやうど鰯の大群が潮をわけてのぼるやうに、うね〳〵と歩いてゐる顏の波を見わたすがいい。十時、——十一時、——潮が流れにしたがつてその色を變えるやうに、街頭に現はれた時代の風景は刻々に變つてくる。十二時に近づくと雜音はことゞく去つて廢墟のやうな寂莫の中を、きれぎれに聞こえる、泥醉漢の靴音にまぢつて、モダンプロステイチユートのおとろえた脂粉のかほりがさながら都會の末路をかこつやうに、無氣味な哀感を忍ばせて漂つてくる。

午前一時、——夜空は高く曇つてゐた、廣告塔の光が、その上にほの〴〵と流れてゐた。……尾張町から數寄屋橋の方面に曲る暗い舗道の上に洋服を着た一人の泥醉漢が、ごろりと寢そべつてゐる。——彼は兩手で頭を抱えたまゝ、ときゞ〴〵、かすかにうなるやうな叫び聲を立てゝゐたが、しかし、正面の電車通りに向つて立つてゐる交番の巡査には、もちろんこの男の、いぎたなく寢そべつてゐる姿は見えなかつた。其とき高らかな足駄の音が數寄屋橋の方から聞えてきた。近づいてきたのは袴を

はいた二人の學生であつたが、しかし、彼等は舗道に寢そべつてゐる醉漢には、まつたく氣がつかないもりゝやうに、蹣跚とした足どりでその前を通り過ぎていつた。

だが、一時間ほど經つて、巡査は到頭、この醉漢を見つけてしまつた。

「——おい、こら起きんか——こら！」

巡査は、しきりに前かゞみになつて肩をつかみあげようとしたがその男は死體のやうにぐつたりと上體をえびのやうに曲げたまゝ眼を開かうともしなかつた。——

2

三月の夜の街は靜かに更けてゐた。騷音はことごとく無邊際の空に溶けて、ところどころに高い建築の窓から漏れる電燈のほかげが白く空間に顫えながら、舗道の上に光りの斑點を落してゐた。

その舗道の上には、巡査に首筋をつかんで引きあげられた醉漢が苦しさうに息を吐いてゐた。それから、どろんとした瞳を徐々にひらいて、ぢつと巡査の顏を見据た。

「な、——なんだ、おい？」

長い髪の毛が頰にもつれかゝつて、その蒼ざめた顏は幽靈のやうに物凄かつた、彼は巡査の手をはなれると、蹌踉として後退りしながら、うしろの建築にぐつたりともたれかゝつた。